

---

# SIKE (サイキ)

涼火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイキ  
SIKE

### 【Nコード】

N1263E

### 【作者名】

涼火

### 【あらすじ】

平凡な日常を過ごしていた女子高生、糸伊原茜はある日、情報工学の研究者である従兄弟―海棠空から開発されたばかりのAI-人工知能を託される。自らをサイキサイキと名乗るそのAIは、自分で考え「行動」する「知性」をもった精神だった。何故か茜に執着心を見せる青年、SIKEを茜に託したまま、行方の知れない従兄弟、そしてSIKEを巡って暗躍する組織たち。それぞれの思惑が交差してゆくハードSFです。

あかねさす

私は私。

それは当たり前のことである。

では、「自己」とは何か？

もしそれを的確に言いあらわせるとするのなら、どこに「それは存在するのかわかるのか？」

フランスの哲学者、ルネ・デカルトは言った。

「我思う、故に我あり」と

こうして、全てのものに「自己は存在するものなのか」という懐疑的思考を持つことによって、その存在は立証される。つまり、全ては思考あつてのものだとデカルトは説いたのだ。

しかし

「心」とはなにか？

「魂」とは何か？

そこにはたして「自己」は存在するのかわかるのか？

その明確な答えは、今という科学の世紀においても明らかにされておらず、我々の持つ運命的、あるいは永遠の命題なのかもしれない

い。

わたしは

だれ？

大切な人がいなくなってしまった。

とても大切な人はずなのに、顔が思い出せない。

それどころか、その人がどのような性格をしていたのか、どのような格好をしていたのか、どのような食べ物が好きだったのか、「私」にどのような言葉をかけてくれたのか。すべてがもやにかかってしまったように、ゆらゆらと揺れてよくとらえることができない。

けれども、ひとつだけわかることがある。

こうしてその人のことを思考するだけで、私はとても「苦しくなるのだ」

私はこれまで二つの大きな別れを経験してきた。

一つは父親の死。

しかし、幼かった私は父の顔もよくは覚えていない。顔もあやふやで、遊んでもらった記憶も無い。薄情だといわれてしまえばそうなのだが、やはり私の記憶に残っていないということは私の中で「

存在しない」ということに近いのかもしれない。

そしてもう一つは大好きだった従兄弟がアメリカへと留学してしまっただこと。

常々、情報工学への尽きせぬ興味を語っていた彼は、高校卒業と同時に向こうの大学に進むことになった。それまでも「天才少年」と何かと騒がれていたから、留学のことを聞かされても、あまり驚きは無かった。

けれど、シヨックだった。

『ひきとめてはいけない』

必死にそう考えてみるものの、いつまでたっても納得することは出来なかった。

「茜は泣き虫だなあ。心配しなくても大丈夫だよ。ずっつと向こうにいるわけじゃないんだからね」

ぼんぼん

いつものように頭の上に手をのせると、軽くたたくように撫でてくれた。

優しい、おおきなて

「あきには、アメリカに何しに行くの?」

泣きやんだ私は、彼に問いかけた。

多分他愛も無い単なる興味心だったのだろう。彼は微笑むと、

『茜のお友達を見つけに行くんだよ』

「あーかーねーくん、何をやっているのだね？」

「……はっ、え……あわわわわわわわ!!」

茜は慌てて水の溢れ出しているコップを引き抜くと、ぼとぼとに濡れた手を見てため息をついた。

「大丈夫？今日は上の空見ただけど」

「……うん、何やってんだろ」

茜は食堂のセルフサービスで汲んできた水を二つ、机に置いた。放課後のせいか人もまばらで、読書やおしゃべりなど、皆思い思いの時間を過ごしているようだ。

「……愛しのお兄様がまた帰って来れないからって、ぐずぐずしてるんじゃないわよ」

「……楓子、あんた、一昔前の少女漫画みたいな呼び方やめてくれる？」

茜は腰まで伸ばしたご自慢の黒い髪を払うと、外をふと見つめた。きらきらとした太陽が地面を照らし、運動場で活動している運動部員たちの生命力を奪っていた。

「なによ、本当のことでしょう？10歳の時に別れたまま、一度も会っていない私の初恋の君…」

うつとりとした表情で、演技がかった仕草を試みせた

「うげえ……」

「おいおいおい、キミの心情を的確かつダイナミックに、この演劇部長でトップスターの楓子様が演じて見せたというのに、何なのだね、そのゲテモノを見るような目は」

「…楓子も私がそういうキャラじゃないことくらい知ってるでしょうっ？」

「まあねえ。見ているだけなら正統派美少女っていつてもいい位なのに、性格がそれを破壊しつくしているというか、何というか」

「そこまでひどい？」

「だってさあ、告白してくる男子を、まるで時代劇の最終斬りのごとくばったばったと……」

私は飲みかけの水を噴出しかけ、目の前にいる友人を睨んだ

「だーかーらっ！！あれは余りにもしっつこい男だったから、丁重にお断りさせていただいただけなの！」

「…その男子、人間不信に陥ってしばらく不登校になったの覚えてるっ？」

「けっ！近頃の日本男児は脆弱でいけねえや」

肘をついて外を眺めていると、何人かの男子が帰って行くのが見えた。多分、帰宅部組だろう。茜もパソコン部に入ってはいるが、あまり活動が活発とは言いがたいので、演劇部の練習が始まるまで、こうして楓子に付き合っているというわけだ。その後は帰宅するしかない。

「茜の本命ってさあ、やっぱりその”初恋の君”なわけ？」

「へっ？何よ急に」

「いやー今度の夏休みに、今年もその人が帰省できないのが堪えていらっしやるそうぞ」

「別に。メールとか手紙はちゃんとくれるし、まったくの音信不通ってわけじゃないよ」

海棠空<sup>なほ</sup>。茜の従兄弟であり、初恋の人。

今から7年前、空は将来を嘱望され、アメリカへの大学入学を決めた。もともとから情報工学の分野に興味を持っていた彼は高校の推薦もあつてその分野ではトップクラスの研究をしている大学に留学することとなったのだ。

それこそ「私が私である」という意識を持ち始めた時からの仲で、仕事に忙しい母に代わって何かと私の面倒を見てくれた。両手をいっぱい広げる仕草を見ると、いつも「しょうがないな」という顔をしながら抱き上げてくれた。…さすがに今は出来ないが。今から考える



と勉強も大変なのに自分の面倒も最大限見てくれていたのだ。頭が下がる。

アメリカに留学してからの空は、向こうの大学の研究室で目覚しい成果をあげたらしい。発表した論文がとある科学雑誌に取り上げられ一躍脚光を浴びた。何でも”A Iの知的認識における論理的思考”とか何とか…読めないけど。英語だし。専門用語だらけだし。いやいやそんなことをいっていけはいけない!!と少しでも空に近づこうとパソコン部にはいったものの、やるのは簡単な表計算やWEBページ作成程度。まあ、高校のPCだからあまり過度な期待はしていなかったが。

「じゃあさ、メールで言ってみれば？」寂しいから帰ってきてほしい”って

「だって、向こうも忙しいだろうし…」

「あまー…い!!そんな逃げ腰でどうする!!恋は当たって砕ける!!」

楓子は水の入ったコップを掲げ上げ、オーバーな仕草をする。茜はさすがに恥ずかしかったのでたしなめるように、目で「座れ!!」と合図を送った

「茜さん、ガンとばしちゃだめですよ…」

「あのねえ、それに本当に恋愛感情を抱いていたかなんてわからないわよ。顔ももうあやふやだし。向こうで金髪のガールフレンドでもいるかもしれないし」

恋…あれがそういうものだったのか、茜自身、いまだに理解できていない。ただ一緒にいたかったのは本当のこと。アメリカへの留学だって…本当は。

「なんかさあ、茜見てると、恋に焦がれた少女っていうよりも…ブラコン?」

「ははは…、そうかあブラコンかあ。って誰がブラコンよ!!」

少しばかり声が大きかったのだろう、何人かの生徒にこちらを見られ、身をすくませる。

「声大きすぎ」

次に聞こえてきたのは楓子の声ではなく、茜と同年ぐらいの男子の声。

「温…」

「相変わらずだな」

「…つつさいわね。何か用?」

「叔母さん、今日も仕事で夜遅くなるそうだから、晩御飯うちで食べてやってね」

「…そう」

ふと、茜は目の前の青年―温のほつを見上げた。

海棠温。茜の幼馴染であり、先ほどから話題になっている海棠空の弟だ。同じ年ということもあってか付き合いはかなり長い。

茜と同様、空にはずいぶん遊んでもらっているはずで、小学校に上がるまではいつも彼の後をついてまわっていた。けれども小学校に入った頃から距離を置くようになったのだ。それがどうしてなのか分らなくも無い。天才少年と近所で騒がれていた空兄に何かと執着していたから。茜が「空兄」の話をするのも近頃は面白くないらしく、いつも顔をしかめていた。黙ってみていればそれなりに顔はいいのに、もつたないと茜は常々思っていた。

「で、母さんが帰りに夕飯の買出しに行ってきたほしいってさ。どうする？」

「そうだね。いつもご相伴に預かってばかりというのも悪いし、行こうかな」

「お、デートですかい？」

楓子が茶々を入れてくるのを無視しつつ、茜は横の席においてあった学生鞆を取り、立ち上がった。時計を見るとそろそろ楓子の部活が始まる時間だ。

「じゃあねえお二人さん。茜、今日は付き合ってくれてありがとうねえ、また明日。海棠君も」

ああ、と温は生返事を返してすぐに踵を返す。

茜はすぐにその後を追った。

いつからだったか茜と温との間に会話が少なくなってきた。幼稚園や小学校の頃は飽きずに毎日おしゃべりをしては、笑いあって転げまわっていた。けれどもそれぞれに友達が出来るようになって、中学に入って否応無しに男と女の付き合い方の違いを見せられて、それだんだん双方とも距離をとるようになっていったのかもしれない。その証拠か今は物静かに見えるけれども、同性の友達の前では明るく話している。

(男の人って難しい…)

「あのさ、聞いている？」

「へ…？あつ、お…おうつ！！」

「…動揺してるのバレバレ」

「べつ…、別に！？そんなに私拳動不審？」

「…かなり」

茜はがっくりと肩を落とす。やはり楓子の言うとおり、今日の茜は何だかおかしい。先日のメールの件がまだ応えているのだろう。

『今年の夏休みもそっちに行けそうに無いんだ…』

「…兄貴がこっちに帰れないなんてこと、今に始まったことじゃな

いじゃないか」

「それは…そうだけど」

「兄貴はこっちにいるよりも、向こうにいる方が楽しいんだよ」

「…っ、そんな言い方ないんじゃない？それに、空兄は言っていたもの”ずっと向こうにいるわけじゃない”って」

すると今度は、温の方が自嘲めいた表情で茜の方を見つめてくる。遠い記憶のかなたにある、あの人によく似た顔立ち。

「じゃあ、なんでいつもメールや手紙ばかりで、日本に7年間も帰ってこないんだと思う？就職も向こうでしたらしい…。それってこっちに帰ってくるつもりがないってことだろ？」

「そ、そんなことないわよ！！そりゃあ今は、仕事を立て込んで忙しいんだろっけど、そのうち絶対日本に帰ってくるんだから！」

「…またでたね。茜の根拠の無い論理が」

「根拠なんか求めなくてもいいのよ！」

こっちという会話をしていると、茜は段々悲しくなってくる。あれだけ二人して懐いていたのに、どうして温は空のことを”いなくて当たり前”みたいに言えるのだろうか。

「ほら、行くぞ。今日はタイムセールで牛乳と卵が安いんだ」

えらく庶民的な言葉を残して、温は私を置いてすたすたと先へ進

んでゆく。

いつか、いつか…また3人で笑いあって遊ぶ日がくるのだろうか。

## プリンのおじいちゃん(前書き)

サブタイトルはこんなんですが、中身はいたって真面目(?)(?)ですのでご安心下さい。

## プリンのおじいちゃん

「それで、彼女は例のAIとは接触できたのか？」

「ここは、都内のあるビルの上階。重役らしい男性とその秘書がなにやらひそひそと話を進めている」

「いえ、まだです。しかし、時間の問題かと」

「…向こうも何を考えているのだ。わざわざ接触をはかれなどと」

「私にも向こうの本意は図りかねます。しかし、これはまたとない好機。ラドクリフ財団といえば、クロイツァー財団とも拮抗する力を持つ唯一の存在。いまや世界の経済を左右する存在といっても過言ではありません」

「…それ相応の見返りが得られる…か」

男は片方の口の端を歪めるようにして笑い、イスにもたれかかった。

「それでは、少しばかり強硬手段に出させていただけようか」

その言葉を聞いた秘書の青年は、一礼をするとドアノブに手をかけその場を後にした。

「あらあら、まあまあ。こんなに卵と牛乳買ってきてもらっちゃっ



て

温ほむと空兄の母親であり、家族の生活ラインを握っている海棠夏代なつよは、茜がむきになって買ひ物カゴにつめこんだ大量の卵と牛乳を見て頬に手を添えて可憐に微笑んで見せた。とても20代の息子がいるようには思えない若々しさで、私も時折ぱうつとしてしまうことがあるくらいだ。おそらく茜の中の「理想のお嫁さん」ナンバー1だろう。

「それじゃあ、今日は茜ちゃんも好きなホワイトソースのオムライズにしましょうか」

「わあい」

茜は諸手を上げて賛成した。レストランのシェフとして働いていたという夏代の料理の腕は確かだ。彼女の母親である万樹にも見習ってほしいと常々思っていた。

「そうそう、空くんから茜ちゃんに小包が届いてたわよ」

「え」

つきつきと、台所の前で腕まくりをしている茜に向かって夏代は言った。

「勝手に見ちゃ悪いと思って、そのまま玄関の隅に置いてあるの。帰りに持って帰ってね」

…何だろう。今まで要件といえばメールばかりで、こういう風に物が送られてくることはめったにない。

「誕生日…じゃないよね」

「さあ、何かしらね。そういえば空くん今年の夏休みも帰って来れないそうね」

「…」

「そりゃあ、もう子供じゃないんだからしょうがないとは思っけど、一年に一度くらいは顔出してほしいわ」

夏代は余り表には出さないが、7年前にアメリカに行ったつきり帰ってこない空のことを何かと心配している。今でも月に一度はお米や味噌などの日本の味を詰め込んだ特製ダンボールを送っていて、空兄からのメールを見る限り、こつてり系の食事が多い向こうでは日本食がとても恋しくなるとのことなので、重宝しているらしい。茜は一度空からのメールで日本食の名前が羅列された件名を見て「末期だ…」と感じたこともある。

「兄貴はこつちにいるより、向こうにいる方が楽しいんだよ」

先ほどの温の言葉が頭の中でぐるぐる回っていた。もしそうだとしたら、空にとって、自分や温は不要な人間なのだろうか

「こつちそうさまでした」

「茜ちゃん、プリン食べない？今日お隣の奥さんから頂いたの」

「いただきますー！ー」

右手を勢いよく挙げて狂喜している茜の後ろを、食器を持った温が通る。

「あら、温くんいらないの？」

「…いつも言ってるだろ、甘いのは苦手だって」

ため息をつきながら、台所に食器をつけると、リビングを後にしようとする。

「茜が食べれば。まあ、太ったとしても俺には関係ないけど」

「温くん、もう2階上がったの？」

夏代の言葉に、温は苦笑しながら答えた。

「明日、数学の小テストがあるんだ。そこでプリンで狂喜乱舞している奴もだけど」

痛い所をつつかれた茜は、温を睨みつけてふい、と横を向いた。

「…いいのよ糖분을脳内にいきわたらせてから、家でやるんだから」

正直に言うと数学はかなり苦手だ。この間の中間テストはひいひい言って、平均点すれすれだった。せめて小テストでは挽回しなければ。できれば目の前にいる私よりも数学が段違いにできる男に明日のテストのヤマを聞かせてもらいたかったが、それはすなわち茜自身のプライド傷つけてしまうことのように思えた。

(…家でやるっ)

がっくりと肩を落とした茜を見て、くすくすと夏代は笑った。

(ちくしょう、可愛いなあ)

「ねえ、茜ちゃん」

考え事しながらプリンをスプーンでつついている茜を呼び起こすかのように、優しい声で呼びかけた。

「もし、茜ちゃんさえよかったら、こっちで暮らさない？」

「…え？」

予想外の言葉に茜はスプーンの上に乗ったプリンを落としそうになった。

「万樹ちゃんー茜ちゃんのお母さん、今とっても忙しいでしょう？最近家には帰ってる？」

「…いえ。前に帰ってきたのは4日前…かな」

「でしよう？いくらセキュリティがしっかりしてるからって、年頃の女の子一人でマンション暮らしはいくらなんでも無用心だと思うの。何より茜ちゃんも寂しいでしょう？」

茜はスプーンから手を離すと、夏代のほうをじっと見つめた。

「…大丈夫ですよ。1人は慣れてますから。それにお母さんズボラ

だし、一人にしておくかと危なっかしくて見てられないんですよね」

好意はありがたかったが、甘えるわけにはいかない。こうして夕ご飯をご馳走になるだけでも本当にありがたいのに。

「でも、茜ちゃんも来年受験でしょう？こっちとしては子供が1人いても2人いても同じだし」

ね、と夏代は茜の手の甲に触れてきた。それはとても温かくて、いつも恋焦がれてきたぬくもり。

その後茜はまんじりともせず、せつかくのプリンの味も理解できないまま、その日の夕食を終えたのだった

茜が夕食の後片付けを手伝って、帰宅の準備をしていると玄関のドアが開く音がした。

「あらあら、まあまあ。冬麻さんが帰ってきたわ」

心なしか嬉しそうにぱたぱたとスリッパの音を立てながら、夏代はリビングを後にした。

「ただいま、夏代」

「今日は早かったのね」

慣れた手つきで、夏代は冬麻ふゆあの背広を受け取るとハンガーにかけた。

海棠冬麻<sup>ふゆま</sup> 海棠家の大黒柱であり、空と温の父親でもある。それだけに切れ者らしく普段は人のよい笑みを浮かべていても、ずばりと物事を言い当てたりすることの出来る「直感」の持ち主だ。海棠兄弟の外見はどちらかといえば父親似である。

「ああ、思ったよりも早く仕事が片付いてね。おや？今日は茜ちゃん<sup>あかね</sup>が来てるのかい？」

玄関にきちんと並べられてある、小さな革靴を見て冬麻は言った

「ええ。お夕飯一緒に食べたのよ」

「そうか。…ついでだし、車を出すよ」

「そうね。もう遅いしそうしましょう。呼んでくるわ」

腕時計を見ると、もう10時を廻っていた。少し長居し過ぎたかもしれないと反省しながら、茜は車の窓からネオンに彩られた街を眺めていた。先ほどの会話が何度も何度も頭の中で反芻される。

「茜ちゃん」

「はっ…はい！」

勢い余ってか大きな声で返事をした茜をみて、冬麻はくすりと笑いを漏らした。

「いや、今日は何だか元気がないみたいだなあ、と思ってね」

「いえ、そういうわけでは。…すみません、お仕事が終わったばかりだっていうのに、家まで送ってもらうなんて」

「…子供が大人に遠慮するものじゃないよ。…同居の話、夏代から聞いたんだね」

しばらく訪れた沈黙の後、最初に言葉を切り出したのは冬麻の方だった。

「実を言うと、ずいぶん前から茜ちゃんと一緒に暮らしたいって言いつつ続けていてね。まあ男所帯だから寂しいというのもあるんだろうけど」

「…そうなんですか」

全然気付かなかった。

「万樹：君のお母さんとも一度話し合わなくちゃいけないとも思うんだけどね、僕のほうも人の事言えない有様でさ」

茜の母親である万樹<sup>まき</sup>は、早くに夫を亡くし、女手一つで茜を育ててきた。もとより英語が得意なだけはある、今は通訳業務に携わっている。冬麻<sup>ふゆあ</sup>から見れば実の妹に当たる。

そういうしている内に、車は茜の暮らすマンションの前へと到着した。





## ガール・ミーツ・ガール

「まあ、同居の話はゆっくり考えてからでいいよ」

冬麻ふゆあはそう言うと、おやすみ、と手を振りまたもと来た道を車で走り去っていった。茜はその後をしばらく眺めた後、ふうとため息をついてマンションの中へと入る

「ただいま」

そういつては見たものの、家の中はがらんとしていて、真っ暗で人もいない。毎日見るいつもの風景。万樹は帰ってくるとしても午前0時を過ぎることがしょっちゅうなので、こうして帰宅してもないことが殆どだ。

鞆を自分の部屋に置くと、風呂場へ行き沸かし始める。暑くなってきたとはいえやはり日本人たるもの、一日に一回は湯につかりたいものだ。

ボタンを押してリビングへと戻ると、机の上においておいた小包に目がいく。

（「開けてみるか」）

そんな軽い気持ちで、それを手に取った。平べったくて日常的に使用するノートほどの大きさがある。重さは2キロ位で硬さもあつた。よく見てみると梱包の仕方が荒々しくガムテープが乱暴に巻かれてあつた。茜は丁寧にガムテープをはがすと中身を取り出しにかかった。

中には緩衝材に巻かれてある、四角の物体がグレイのボディを輝かせていた。

「…パソコン？」

日本で普及しているものよりは少し小さめの、ノート型のPCが入っていた。表には空の現在の職場であり、世界でもIT業界においてトップのシェアを誇る「アスタルテ（Astarte）」のロゴが入っていた。

中身を更に調べてみようと、袋の中身を詳しく見てみたが、何も入ってはおらずしばらく首を傾げてた。

「メール来てるかも」

もしかしたら、このPCについて空から何か連絡事項があるかもしれない。茜はPCを持ったまま自分の部屋へと移動し、自分の机の上においてあるデスクトップのPCを立ち上げた。

いつもの電子音を聞き、すかさずメールボックスをチェックするが、新着メールは0件だ。

「…」

おかしい。

何か底知れぬ違和感が茜の背筋を走り抜ける。

（「…考えすぎ、か」）

もしかしたら、このPC内に何かしらのデータが入っているかもしれない。茜はそう思い立つと電源ボタンを押し、PCを立ち上げる

「あれ？見慣れないソフトウェアだな」

その後に見れたのは、「(プサイ)」というギリシア文字のロゴだ。そして一旦画面が暗くなり、輝く文字が現れた

『「へ」のログインを実行します。ユーザーアカウント認定を行いますので、認定を受けたユーザーはイヤホンマイクを装着し45文字以内のパスワードをどうぞ』

「…へ？」

よく見ると、イヤホンプラグにはよく見る形のイヤホンマイクが装着されていた。おそらくこれをつけて声紋認証を行うのだろう。

通常、人間の声は様々な周波数で構成されており、一人一人が違ったデータを持つ。そのため指紋と同じく本人認証を行うことが出来るシステムであり、最近ではセキュリティシステムなどに多用されているという

「…どういふこと」

ひたすらEnterキーを叩いてみたり、イヤホンマイクに向か

って「アー」と発声したりしてみるものの、何も起こらない。

そうこうしているうちに、お風呂が沸いたらしく、ピポピッといつもの電子音が聞こえてきた。

「明日、部活の時に聞いてみるか」

今日は夜も遅い。早く風呂に入って寝よう。その前に、茜はパソコンに向かい、空に向かって出来るだけ簡潔な文章で、今日来たPCについて尋ね、送信した。

それから風呂に入り、念のためPCをチェックしてみたが、メールボックスの受信トレイは、未だ0件のままだった。

「おい、茜君、大丈夫かい？」

「ふふ…ふふふふふふふふふふ」

授業終了の時間を告げるチャイムが頭の中でリンゴンと響き渡っていた。というのも、昨日温から今日の数学の小テストについて知らされていたにもかかわらず、すっぽりと忘れ去っていたのだ。朝、楓子から聞かされたときの衝撃は、かなりのもので未だにそれを引きずっていた。

「まあまあ、何も小テスト1回如きで人生が決まるわけじゃないんだからさ！元気だしなよ」

茜のクラスの数学教師はかなり厳しいことで知られており、赤点

を取った生徒が続出したとしても補習や追試などの救助措置をとらないことで知られていた。それだけに普段のテストも厳しいものがあるのだ。

後ろの方の席に座っている、温も「そらみたことか」とばかりに冷たい視線をこちらへ送ってくる。

「そういう、楓子はどうなのよ」

「え……?……」

明らかに強調されているかのような間。それで茜は全てを悟りきったように「裏切り者お」と叫んだ。

「あはははは。そうだ、期末に向けて海棠君に勉強見てもらったら、彼理系科目はトップクラスだし」

「あいつに頭下げるのだけは、閻魔の大王様に『地獄に落とし五臓六腑を喰らい尽くすぞ』と脅されても御免被りたいわ」

「あはははは……。そこまで嫌か」

茜は机に突っ伏したまま、窓から空を見つめた。どこまでも透き通るようなライトブルーの色にしばらく見入っていると、温の声がした。

「今日も夕飯食べていくだろ?」

「……」

結局あの後万樹は帰ってはこなかった。おそらく会社に泊まったのだろう。メール一つ、電話一つも無かったが、もとより性格が杜撰なので茜自身気にはしていない。

「今日はやめておくわ。部活で遅くなるかもしれないし。夏代さんにはよろしく言っといて」

「そうか」

温はそれきり何も言わず、茜の席から離れてゆく。

「茜ちゃんさえよければ、一緒に暮らさない？」

あの時の言葉が胸の深くでつかえていた。なんだろうこの歯がゆいような感触は。茜は体を起こすと、乱れた黒髪を手櫛で整えながら物思いにふけていた。

それを見た楓子は、頬を赤らめながらこちらを見つめてくる。

「…何よ」

さすがにその視線に気付いたのか、茜は前の席に座っていた楓子に向かって口を尖らせた。

「いや、絵になるなあと思ってさ。なんだろう、恋煩いに悩まされるジュリエットって感じで。ぐぐっとくるのよね」

「言ってることがいちいちオヤジくさいなあ」

少しばかり照れた表情を見せた茜は、それを紛らわせるようにふい、と横を向いた。

「あははは。そうかもね」

そのとき教室のドアがガラツと開き、毎日のように顔を見ている担任の教師が入ってきた。

「おらー、各自席につけーHRを始めるぞ」

まるで鶴の一声とも言わんばかりの担任教師の大声に、クラスメイトが散り散りに自分の机に向かう。

「ええと、早速だが数学の林野先生から今日の小テストが添削されてきたので、今から返すぞー。何でも次回の授業までに、間違っている所をやり直して提出してほしいぞうだ」

沈黙

「……………は？」

その後のテスト返却で、点数を見た茜が貧血を起こしたかのように、ふらついた足取りでHR後の教室を後にしたことはいうまでもない。

「で、これがその例のPCですか？」

高校の最上階にあるPC教室の一角に3〜4人の人だけが出ていた。都立宮ヶ音高校PC部の面々である。

やはり、自分の持つ知識だけでは不十分ということで、部活メンバーの知恵を借りることにしたのだ。少なくとも茜よりはPCの知識はある。

「うん、アメリカにいる従兄弟から送られてきたんだけど、立ち上げかたがさっぱりで」

その中でも眼鏡をかけた小柄な少年が、茜の持ってきたPCを見て目を輝かせた。

「…これ、アスタルテの最新モデルじゃないですか!」

「え?これ、そんなにすごいものなの?」

少年ーパソコン部唯一の一年生、築山昇つみやま のぼるは、この部のなかで唯一まともにプログラミングができる少年だ。それだけにPCの知識は他の部員とは一線を画している。

「ええ、このアスタルテ社P-009タイプのPCは、密かに日本Verが開発されてるって噂されてたんですけど、いやぁ実物を拝める日が来るとは」

心なしかつきつきとした手つきで、電源を入れる

「ふうん」

「通常のノートPCの概念を打ち払うような容量の大きさはともか



くとして、そのアルゴリズムの構築の早さが肝なんですよ」

言っていることがさっぱりだ。

「築山あ、もつとわかりやすく言えよ」

横から茶々を入れるようにして築山に絡んでいるのは、すらりとした背の高い細身の女生徒だった。男気あふれる口調でひじをつきながら、興味なさげにこちらを見てくる。一応この部の部長である33年の琴嶋美野里だ。

おそらく、さっぱり分らないという表情の茜を見かねて、助け舟を出してくれたのだろう。

「ああ、失礼。アルゴリズムというのはITにおけるPCの計算方式のことですよ。日本語では『算法』などとも呼ばれていますね。ある特定の計算法を打ち込み、効率的に『答え』を手にするための手順を言います。コンピュータの情報処理の基盤で、我々の身近な所から言えば、インターネットにおける検索エンジンや、図書館などで採用されている蔵書検索などもそれにあたります。ようするにプログラミングの過程でおこる計算方式のことですよ」

晴れ晴れとした笑顔で、茜と美野里に向かって言い放つ。美野里のほうはまるで心得たかのように頷いて見せるも、茜の方はといえば首をかしげたままである。

「……つまり、プログラミング作業に特化されたPCってわけね。一般人向けじゃないんだ」

そうおもむろに口を開いたのは、副部長の萩田千鶴だった。シヨ

トボブの黒髪に白い肌がよく映える着物の似合いそうな和風の美人である。

「ええ、けれどハッカーの間では人気が高くて、アメリカでは生産が追いつかないって話です」

「…茜の従兄弟ってさ、アスタルテに勤めてるんだっけか？」

美野里は機動音を出すPCのディスプレイを眺めながら、問うた。

「あ、はい。大学で発表した論文が認められたとかで、企業の方からお誘いがきたらしいです」

「へえーじゃあエリートなわけだ。でもなんでこんな築山みたいなマニア向けのPCが茜宛に？」

あきらかにおかしかった。確かに高校に入ってPC部に入ったことを報告はしたが、向こうはこちらのPC処理能力を把握しているはずだ。

そうこうしているうちに、ディスプレイが例の声紋認証システム画面へと移行する。

「ほーほーこれは確かに声紋認証をもとにしたバイオメトリクス認証ですね。しかもパスワード付きとは…おそろしいセキュリティ強度だなあ」

昇は画面を見ながら、なにやらキーボードをたたいてみるものの、画面は固定されたままだ。

「うーん、常識的に考えて、糸伊原先輩の声に対応しているんじゃないけど」

「えっ…私？」

「はい。…それにしても」（プサイ）か。聞いたことないソフトウェアだなあ。アスタルテ社専用の商品かな？」

「茜ちゃんはパスワードに心当たりはないの？」

千鶴の問いかけに、茜は必死になって頭の中身をひっくり返してみたが、何も思い出せない。

「こういうパスワードは入力形式であれば、数字とアルファベットなどを組み合わせないと、セキュリティ強度は上がらないんですが、声紋ですからね、おそらく何か意味のある文章だと思いますよ」

「意味のある…文章」

その後、茜は何度かイヤホンマイクを装着して試してみたものの、ログインできずじまいだった。



## 拉致

「はあ」

部活…といっても半分お遊びだがーの帰り、茜は夜道を一人歩いていた。学校から家までは電車と徒歩であわせて30分ほど。平均的な距離だろう。今の高校を選んだのも家から近いということもある。今は駅から家に帰る途中だ。等間隔に並んでいる街灯があたりを照らし出す。

閑静な住宅街ということもあってか、物静かだ。茜のほかに通行人はいない。

「今日はメール来てるかな」

母親の万樹が居るとき以外に自宅で会話することのない茜にとつて、メールは唯一のコミュニケーションの源といえた。

ふと、手に持っていた学制鞆ともうひとつ、青のタータンチェックの手提げ鞆を見つめた。中には空から送られてきたPCが入っていた。電化製品店などで見かけるノート型のPCとは異なり、かなり軽量化されているらしく、あまり重さは感じない。

時計を見ると、7時を少し廻ったところだった。

「スーパー空いてるかな…」

「糸井原茜さんですね」

無機質なまでに特徴というものを剥ぎ取ったかのような声。囁くようにふつと聞こえてきた声の主をたどるかのように、茜は後ろを振り返った。

黒の背広に、サングラス姿の男が3人、横に広がるようにして立っている。30代くらいだろうか、辺りが暗いせいで顔の判別は難しい。危機を感じ取ったかのように、茜は半歩後ろへと下がった。裏道のためか人気もなく、逃げ込めるような場所もない。

「…ご安心を。我々はアスタルテ社の者です」

中央に立っていた男が、最初に口を開いた。どうやらこの三人の中では一番筆頭らしい。

「アス…タルテ？」

世界中でも知らない者はいないだろうというほどの、IT業界でトップシェアを誇る会社―アスタルテ

「はい。海棠主任の従兄弟の系伊原茜さんですね？」

「…」

答えようとはしない茜に対して、男は肩をすくめ、手帳を差し出して見せた。そこには日常的によく目にするアスタルテのロゴマークとともに、目の前にいる男の写真が貼られていた。

「海棠主任が貴方に会いたがっています」

「え…空兄が…」

おもわず返事をしてしまった茜はしまったというふうに顔をしかめた。

「はい。彼は今、社の大きなプロジェクトを成功させるため、日本に滞在しています」

「日本に…帰国しているの!?!」

「はい。しかしそのプロジェクトの機密性からご家族には秘密でした。しかし、どうしても、貴方にだけは会いたいと強く望んでおられますので…」

全身に電流が走ったかのようなショックだった。体中が震えているのが嫌でもわかる。

「お手数ですが、よろしければ私どもと一緒に来て頂きたいのです」

「そらに…空さんに会わせてもらえるんですか?」

「ええ」

やっと会える

その気持ちに引きずられるようにして、茜は恐る恐る前へと歩を進めた。しかしその時――

「うおっ!?!?!?!」

ピリピリとした放電と共に周囲の街灯が一気に破碎した。防犯灯

の破片が周囲に霧散し、警戒態勢に入った男は懐に手を入れると黒い、細長い物体を構えた

（「……………け…拳銃っ!?!」）

茜が目にしたそれは紛れもなく、映画や漫画などでよく見る、小型の拳銃であった。

咄嗟に危険を察知した茜は、飛び出すようにその場を走り去ろうとする。……しかし

ピリッ

首筋に鋭い痛みが走ったかと思うと、目の前に暗闇がやってきた。

（「空兄……」）

気を失う直前に見たのは、幼い記憶の中におぼろげに残っている、自分に対して微笑みかける、空の姿だった。

「……どうして手荒な真似をした、かしはら檀原」

先ほどの筆頭格の男が、部下らしき青年に対して苦言を呈した。

「しかし、あのままでは抵抗される一方です。……あの状況下で説得に応じる可能性は限りなく低い」

青年―檀原は手にしていたスタンガンを懐へとしまうと、茜を軽



々と抱き上げた。

「……」

部下に正論を吐かれ、男一喜田川は言葉に詰まった。

「しかし、こんな美人ちゃんをかどわかすなんて、俺たち軽く犯罪者じゃないっすかあ？」

そう軽口をたたいたのは、3人の中で一番大柄の男一小野坂だった。

「もしかしなくても、法には抵触しているさ。……しかし、さっきのは何だったんだ。……じきに人も来る、早く本社へと戻るぞ」

「「アイサー」」

三人は慣れきったように、無駄な動きを一切せず、まるで何事もなかったかのようにその場を後にしたのだった。

「おともだち？」

その言葉の意味の分らない私は首をかしげた。空兄がこれから行くところは、私もまだ行ったことのない異国の地。

「おともだちならねえ、あかねにはいっっぱいいるよ……！ ゆっかちやんでしょ、まさこちゃんでしょ、あきのちゃんでしょ……」

「そうか、でも友達は、たくさんいた方が楽しみが増えるだろう？」

涙が流れている頬を、空兄は丁寧にハンカチで拭いてくれた。

「これから、僕が探しに行く茜のおもだちはね、とっても恥ずかしがり屋さんなんだ。だから、とーっても遠い所にいるんだよ。本当は茜ともお友達になりたいはずなのにね」

「あかねと…？」

優しい顔立ちを更に緩めて、誰もが警戒心を解くであろう微笑を浮かべて、空兄は言った。

「うん、だからね、もし僕がその友達を連れて帰ってきたときには笑顔で挨拶できるね？」

私はもう涙の乾いた顔を上げ、空兄のほうを見た。

「うん、わかった。ばいばい、そらにいまたね、すぐにかえってきてね、こんど……」

そこで茜は目が覚めた。しかし視覚が正常に働いていないのか、視野が無い、起きても真っ暗な闇が広がっている。

「お目覚めですか？」

壮年の男の声が出た。それと同時に先ほどの光景が思い返され、自分がようやく拘束されていることに気付いた。目には目隠し、そ

して冷たいイスに座らされ、後ろ手に手錠をかけられている。

「米原、目隠しをとれ」

「しかし」

「大丈夫だ。これからの我々の話を聞いてもらうには、ある程度信用してもらわなければ…だろう？」

暫くの沈黙の後、ようやく光が差し込んできた。急激な視野の広がりに茜は目を細めた。そして段々目が明かりに慣れてくる。

目の前にいたのは、予想よりはいくらか若い、空と同年代位であろう精悍な顔つきをした青年がイスに座っていた。それを取り囲むようにして、きっちりとしたスーツを着こなした中年の男性、それから先ほど茜を連れ去った、あの男の姿もあった。

「はじめまして、糸伊原茜さん」

「…」

茜は何も言わず、ただ目の前にいる男を睨んでいた。男と自分との間には長いテーブルがあり、まるで映画のセットのようにぴかぴかに磨かれていた。

「先ほどは部下が手荒な真似をしてしまったそうだね。すまなかった」

茜は何も答えずただ震えていた。おそらく恐怖に体を支配されているのだろう。唇を動かそうとするものの、声にはならない。

「自己紹介をさせてもらおうか。私は柴崎コンサルティングの柴崎柴崎渉だ。以後お見知りおきを。こっちは秘書の米原だ」

「柴崎…コンサルティング？…アスタルテじゃないの？」

「ああ、多少便宜上のことでね、悪いとは思ったが社員証を偽造させてもらったよ」

茜の眼光が更に鋭くなる。

「しかし、我々が君に話したことの内には真実も含まれている」

「え…」

「君の従兄弟に当たる、海棠空かいどうあきは確かに、アスタルテの1大プロジェクトの主任を任されていた。とあるAI-人工知能の開発についてね」

もとより、情報工学の道を志していた空は、大学の研究室において、目覚ましい成果をあげ、発表した論文において学会や各企業注目を集め、大企業『アスタルテ』に引き抜かれる形で研究員として入社した。AIについての論文も以前から何本か発表しており、アスタルテというITを専門的に扱う企業内においてAIの開発はさして珍しいことではないはずだ。

「君も知っているとと思うが、AIとは本来『弱い』ものだ。人間の知的な活動を模して作られたプログラムであり、自ら『考え』、『行動』することはまずない。しかしその常識を打ち破ろうとした。情報工学の永遠の課題ともいえる本当の意味での『人工』の『知能』

「精神を有する『強い』AIを作り出そうとしたのが、このプロジェクトの主任・海棠空だ」

「AI…、精神？」

「言っていることの意味が分からなくなってくる。いくつかの単語が頭の中を巡るが、茜の中でうまく処理できずにいた。」

「そして、海棠主任率いるプロジェクトチームはとうとう一つのAIを完成させた。人としての精神を宿した「本物の『人工知能』」をね」

## パンドーラの箱

茜はあたりを警戒した。目の前に先ほど自分を連れ去った男がいることから、拳銃などで武装していることは間違いないだろう。

「君は海棠空かいとうそらから、どの程度例の人工知能について教わっている？」

「…そんなのわからないわ。仕事の話は聞いたことないし」

ただ、人口を膾炙して伝わってくる空に関する噂話を聞いて、関心していただけた。本人から研究内容について詳しく教わったことはまずない。

しばらくの長い沈黙の後、静かに思考していた柴崎が、言葉を選び取るように口を開いた。

「the Supelative Intelligence  
that heve Knowledge of Everything  
ing」

次の瞬間、茜の耳に届いたのは、聞きなれない英単語の羅列だった。

「なに…、それ…」

「ふむ、本当に何も知らされていないらしい」

茜は眉を吊り上げ、足を踏み鳴らした。こうしたことが何にもならないとは分っているものの、頭がムカムカした。

「日本語に訳するとするならば、”全ての知識を有する最高の知能”といった所か。頭文字をとって『S I K E』と呼ばれている、海棠主任の開発した新型のAIだよ」

「S I K E…」

聞きなれないその名前に躊躇するものの、何故か嫌な感じはしなかった。

「その、S I K EとかいうAIと、私の中に何の関係があるのよ。」

「それが大有りでね。米原<sup>よねはら</sup>」

秘書の男は、了解したとばかりに頷くと、目の前のテーブルに1台のノートPCを置いた。昨日空から送られてきた、あのPCである。

マホガニー製の机に、そのPCはどこか不似合いで、灰色のボディが照明の明かりに照らされて、底光りしていた。

「S I K Eはそのアスタルテ社製のPCの中にある」

「JJJ…に?」

自ら考え、行動する、まるで生命のような『知性』。そんなものが本当にこの小さな箱庭の中に存在しうるのだろうか。

「ああ、そうだ。どういわけか海棠主任は、君をこのPCのオンラインユーザーとして登録し、君に託した。それを解除してもらおう

「と思って、こうしてお出でいただいたわけだ。」

「そんなの…空兄に直接聞けばいいじゃない」

投げやりに横を向きながら、茜は答えた。早く開放されたいという思いからか、知らず知らずの内に早口になる。

「君の従兄弟―海棠空かいどうあきには産業スパイの容疑がかけられている」

「!?!」

映画やテレビでしか聞いたことのない言葉の響きに、一瞬時が止まったかのような錯覚を覚え、うつむいた。

（「空兄が…スパイ？」）

「アスタルテ社は、PCの開発とは別に行ってきたAI-人口知能についての研究情報開示を積極的に行ってこなかった。そこでライバル会社が開発者である海棠氏を抱きこみ、優秀な人材と共に情報を引き出そうとしたんだ。その証拠に、容疑がかけられたと知るや、彼はアスタルテから姿を消している。それ以来彼の行方はわかっていない」

行方不明…その言葉が頭の中をよぎる。もし、空がそのような産業スパイであったとして、なぜ大事なAIを茜の元に送り込んできたのか、その真意が分らなかつた。

「何故、貴方たちはそのAIがほしいの」

柴崎は足を組みなおし、背筋の凍るようなぞっとする笑い方をして



「…正直に言えば、我々はそのAI自体に興味はない。ただ、取引の材料としたいだけだよ。…物事を円滑に進めるためにね。平和ボケしているこの国に住んでいたら分りにくいかもしれないが、このAIには世界中の様々な国家が注目しているんだ」

その言葉で全てを悟ったかのように、茜は目の前の男を最大限の侮蔑の眼差しでねめつけた。

「私に顔を晒したのもそういうわけなのね」

茜自身もよく分らないが、ドラマなどで登場人物が誘拐されたときなどは、犯人の顔は被害者に見えないようにするのが普通だ。

「君は賢いな」

つまりは、茜自身をこうして拘束していることも、国家という巨大な組織によってもみ消すことが可能だということだ。

「さあ、説明はここまでにしておこう。我々に協力してもらえかね？」

「…条件が2つあるわ」

茜の答えに向こうは無言で答えようとはしない。おそらくこちらの出方を伺っているのだらうと解釈した彼女は、ゆっくりと口を開いた。

「まず、この手錠をはずしてもらおう。それから、私をこの部屋に一人にすること。それが条件よ」

「…おどろいたな、この状況で『取引』をもちかけるとは」

しかし、茜はそれ以上口を開こうとはしない。相手が銃器などの武力を有しているにもかかわらずに見せるその強硬な姿勢は、無鉄砲でありながら、どこか美しくもある。

「…わかった、いいだろう。喜田川、彼女の手錠を外してやれ」

「!?!?よろしいのですか?」

「かまわん」

喜田川は一度聞き返したのみで、後は何も言わず懐のポケットからオードソックスな形をした鍵を取り出し、茜の後ろに回った。

かちやりという、金属のごすれあうような音と共に、手首がようやく自由になった。

「君のご希望通り、我々はこの場から退散させてもらうよ。カメラから監視はさせてもらうけどね」

その言葉と共に、茜以外の三人の男は背後にある唯一の扉から外へと出て行った。

(「カメラ…」)

うまく隠してあるのだろう。茜の肉眼では確認できない。ただ、机とイスがあるばかりの簡素な部屋だ。逃亡を防ぐ目的のためなのか、窓すらない。

（「誰か…心配しているかな」）

拘束されていたせいで赤くなった手首をそつと撫でながら、茜は心の中で首を振った。多分だれも茜がこうして拉致されたことに気付いていないはずだ。温とは夕飯は食べないと返事してしまったし、おそらく母の万樹は今夜も家には帰ってこないだろう。

そつとPCにふれてみた。無機質なそれからは、温かみは一切感じられず、ひんやりとした冷たさだけが、肌をつたう。

何故か恐ろしいほど、冷静な自分の姿に少々辟易した。

スタートボタンを押した。いつものように「」のロゴマークが現れた後に、例の指示が出る。

『「」へのログインを実行します。ユーザーアカウント認定を行いますので、認定を受けたユーザーはイヤホンマイクを装着し45文字以内のパスワードをどうぞ』

『こういうパスワードは入力形式であれば、数字とアルファベットなどを組み合わせないと、セキュリティ強度は上がらないんですが、声紋ですからね、おそらく何か意味のある文章だと思えますよ』

今日の昼、昇に言われたことが頭の中をめぐる。

「意味のある…文章」

多分、空と自分にとって思い入れのある言葉なのだろう。といつても一緒の時間をすごしていたのは7年も昔の話だ。

（「落ち着け。考える」）

まずは、この「」にログインしないことには全てが始まらないのだ。

「アメンボ青いなあいうえお」

手持ち無沙汰に、いつも楓子がつぶやいている台詞をつぶやいてみるが、何も効果はない。認証画面は相変わらずのままだ。

「隣の客はよく柿食う客だ」

変化なし。

「…」

本当にこのPCは自分の声に反応しているのか不安になってきた。

「本当に彼女が、『SIKE』のオンラインユーザーなのですか？」

米原の不安を孕んだ声に、柴崎は肯き帰す事もせずじつと監視モニターを見つめていた。

「PCが彼女宛に送られてきた以上、そう考えるのが筋だろう」

「しかし、実際の所、あのPCは糸原茜の自宅ではなく、海棠空の実家に郵送されています。これはどうとらえるべきなのでしょう」

「さあな。しかし向こうから手渡された書類によれば、ユーザーは『糸原茜』で間違いないそうだ。根拠はどこにあるのかは知れんがな」

メインモニターの中の茜はイヤホンマイクを装着し、なにやら意味の成さない言葉をつぶやいている。

「よかったですか？こうして監視しているとはいえ、ログインをされたら、何が起こるか…」

「彼女は「」のユーザーではあるが、SIKEのアクセス権限を保持していない。それに、ずぶの素人が世界最高峰の知能を持つAIを扱えるわけがない。…ここをどこだと思っている」

ここは地上120メートルの超高層ビル「アヴァロン」。都内の憩いの場として1階〜12階までがショッピングモール、そして13階からは企業のオフィスとして使用されている。柴崎コンサルティングの根城とも言うべき施設であった。

そしてここはその最上階。すぐ外唯一の出口には、喜田川ら3人の精鋭を貼り付けてある。脱出は絶望的。その環境から考えれば、彼女はあまりにも孤独といえた。

「私にはよく分りかねるのですが、そもそもSIKEとはどういうAIなのですか？」

柴崎はしばらく指をならした後、メインモニターをこつこつとこ

づいた。

「米原、『魂』とは何か？と聞かれて、すぐに答えられるか？」

「…は？」

「あれ”はそういうのと同じようなものだ。『存在意義の有無』とでもいおうか。明確な目的をもって作られたわけではない。『人の精神』を真似て作られたのだから。だから無限の可能性を秘めてはいるが、同時に何も出来ないおもちゃ同然のもでもある。そうだな…言い換えるとするならばギリシア神話における『希望』とでもいおうか」

長期戦と見たのか、柴崎はイスに深く腰掛け、メインモニターからしばらく目を離した。

「…こんどあったらね、また、おうたをうたってほしいな」

私がそう言うと、空兄は鼻の頭を掻いた。照れた時によくやる癖だ。

「お歌かあ、次に会ったときは多分…そういうのはやらない年だと思っただけだなあ」

少し茶のはいった髪が風に揺れる。苦笑交じりの笑い声が聞こえた。

「じゃあ、その”おともだち”をつれてきたときに、いつしよにうたおう?」

私はよく、小さな頃から空兄に童謡を聞かされて育ってきた。夏代さんのお腹に温がいた時に、胎教にいいということで、買い集めた童謡のテープを聴いて育ったためだという。そのなかでも1曲、おそらく私が赤ん坊の頃から聞かされ続けた、大好きな曲があった。

「そうだね、その子も多分、茜と同じで歌うのが大好きだと思うよ。そういうと、私を抱き上げて、思いつきり抱きしめてくれた。多分それが最後に感じた、空兄のぬくもりだったんだと思う。」

「ねーむね、ねーむね…」

茜は机に突っ伏したまま、唇を動かし始めた。

眠れ眠れ 可愛し緑子めぐ わくこ

母君ははおみに 抱かれつ

こごちよき 歌声に

むすばずや 美し夢うつま

シューベルト作曲の有名な子守唄。歌詞の意味はよく分らなかつ

たけれど、馴染み深いメロディが今でも頭の中に焼きついている。

その瞬間、ピピピッと電子音が鳴り響く。茜はあわてて座りなおすと意識をディスプレイの方へと向けた。――そこには

『本人確認終了。声紋認証しました。ユーザー名 糸伊原 茜』  
(プサイ) 『へようこそ。』

淡々とした文字列が次々と流れてゆく

『『』のアプリケーションソフトは”SIKE”のみです。起動しますか?』

茜は迷うことなくエンターキーを押した。

すると今度は、イヤホンを通して音声のみが流れってくる。聞きなれない、すこしキーの高い若い女性の声だった。

『SIKE、起動しました。初めまして、私の名前は”SIKE””。愛称はサイです』

『ただ今の時刻は、午後10時13分です。東京の天気は晴れ時々くもり。気温は19度。湿度60%』

『――何かご要望などございますでしょうか』

次の瞬間、茜はマイクに向かって思いっきり声を張り上げた。



「……………助けて!!!!!!」

『命令の意味がわかりません、もっと明確な言葉を選び、マイクに向かってお話下さい』

茜はマイクの部分をこれでもかというくらい口に近づけ、

「だからっ!!このビルから出せっていつてんの!!」

AIというものがどれほどあてになるかは分らなかったが、先ほどの連中にされるがままよりはよっぽどいい。

『……………ユーザーの命令を了解しました。……………命令実行中』

「…っ!まずいぞ!!おい、はやく鍵を開ける!!」

外で見張りをしていた男たちが、中の様子に気付いたらしく、激しく扉をたたいた。

『『アヴァロン』の電圧管理システム、及び中央情報制御システムに侵入。現在ハッキング中』

茜はPCを抱えもつと、部屋の隅のほうに移動した。

『何をしている、早くしろ!!』

スピーカーを通して先ほどの男―柴崎の声が響き渡る。

『キーの暗証番号が変えられています！…！だめです！こちらからの操作を受け付けません』

男たちの怒声が交差し、茜は膝を抱えてうずくまる。そのとき腕の中のPCがまた声を発した。

『ハッキング成功。これより『アヴァロン』全施設の電圧を制御します。カウント開始』

無機質なまでの女性の声で、運命のカウントダウンが始まった。もしかしたら自分とはとてもないことをこのAIに向かって言ってしまったのかもしれない。けれども、もう変えられないところまできていた。

『5』

「中央制御のスパコンが暴走をはじめています。システム制御不能！…！」

『4』

「どづいつことだ！…！こんな話は聞いてないぞ！」

『3』

「だめです！、中央電圧に加え、緊急の回線がすべて使用不能に！…！」

『2』

「まさか！？相手はたかがノートPC一台だぞ！！」

『1』

茜は耳をふさぎ、体を地面に伏せ、やがて来るであろう「何か」に備えた。

ブラック・アウト  
『停電』

あたりは暗闇に染まり、永遠に続くかのような恐怖と一瞬の静寂が支配した。

「……かくして運命の歯車は回りだし、希望という名のパンドーラの箱は解き放たれたのである。」

## 脱走

アヴァロン停電の3時間前、温はパソコン室を訪ねていた。

「あ…糸伊原いますか？」

部屋には三人しかおらず、まだ少年とも言える体つきをした男子生徒を挟むようにして、二人の女子学生が座っていた。パソコンは男子生徒の使っている一台しか起動していなかった。

「お？彼氏さんか？」

そう温を呼んだのは、ショートカットでどこかさばさばした口調の女生徒だった。たしか、茜の先輩でこのパソコン部の部長である琴島美野里<sup>ことしまみのり</sup>。

「もう。美野里ちゃんったら。茜ちゃんなら、もう帰ったわよ。海棠君」

美野里をたしなめるようにして、彼女親友であり副部長の千鶴が口を挟んだ。

「そつですか…」

少しだけ残念そうに、肩をすくめた温を見て美野里はからかった。

「いやあ、片思いって言うのもつらいねえ」

「…!!?!?!?!」

にやにやと人の悪い笑みを浮かべながら美野里は温をからかった。

「あらあ、そうなの？」

「え、海棠先輩、そうなんですか？」

昇と千鶴の二人が同調して尋ねてくる。

「ち…違います！俺とあいつはただの従兄弟で、あ…あいつ今日も多分一人で晩飯食べると思うから、誘えって母が…」

しどろもどろになって腕をぶんぶんと横に振るう。しかしそれがまた言葉の怪しさをかもし出していた。

「ふふん、先輩の観察眼を甘く見るんじゃないぞ！」

「美野里ちゃんのそれは、ただの当てずっぽうだけだね」

幼馴染のふたりは、会話の息もぴったりと合っている。

そのときだった、携帯電話のバイブが鳴ったのは。皆一斉にポケットの中を漁る。着信元は温だった。

「……」

温はしばらく携帯の画面を睨みつけ、急に表情を変える。

「…すみません、いないならいいです、じゃあ」

振り絞るような声でそういうと、ドアを開け外へと出て行った。その後、続く足音の速さに、残された三人が気付くことはなかった。

「檀原、小野坂。一旦制御室へ戻れとの通達だ」

無線機から耳を離れた喜田川は部下に向かって命令した。超高層ビル「アヴァロン」の全システムは起動していないものの、携帯電話や無線といった機器はまだ生きていた。

「ええっ！いいんですか？」

画面の黒くなった、認証システムのキーを意味もなくカチカチと言わせていた小野坂は喜田川の方を見た。

「いい。このあたりには他に人を残しておく。どうやら我々が本格的に出張<sup>で</sup>らなければならなかったらしい」

「しつつかし、どうすんですかあ？このシステム管理をやっていたスパコン…えーとなんだっけ」

「<sup>アーサー</sup>Arthurだ」

小野坂の明るい声をたしなめるかのように、静かな口調で檀原は言った。

「そう、その<sup>アーサー</sup>Arthurも、10カウント取られちゃったんですよ？それってやばくないですか？」

「まあな、おかげでこの『アヴァロン』は停電状態に加えて全制御が停止状態だ。セキュリティセンターの部員が必死に回復させようとしているが、絶望的だそうだ」

「…そもそも、あのAI…えーと」

「SIKEだ」

いちいち言葉につまる小野坂をフォローするかのようになり、檀原は立ち上がると補説した。

「そうそう、そのAIにそんな高度なハッキング能力があったなんて、我々聞いてませんでしたよね？」

「さあな、上には上の思惑がある。我々はその通りに動いていたらいい」

感情を極力削ぎ落としたかのような声音は、今の状況の危うさを物語っていた。

「ちょっと！何なのよ。今は！？」

閉じ込められた部屋の片隅で、茜は腕の中にあるPCに向かってあらん限りの怒声を聞かせていた。

『「アヴァロン」の全電圧をブラックアウトしました』

「そうじゃなくて、そうするに至った経緯を聞いているのよー！」

『あなたは、「このビルから出してほしい」という命令を私に出しました。私は自身で『考え』、最も効率的にこの「アヴァロン」からアカネを脱出させる方法を割り出しました」

「それがこれ？」

『イエス』

「私にはあまり状況が変わってないとは思えないんだけど」

停電から15分。あたりは真っ暗で唯一の明かりといえば手元にあるPCのディスプレイのみ。携帯電話は鞆の中。つまり頼れるものといえば本当にこのPCのみなのだ。扉へと近づき揺らす・蹴るなどして開錠を試みたが、内側からはどうやってもあかない仕様になっているらしい。

『現在、監視システムのカメラに接続中』

「え？」

次の瞬間、茜の目の前に現れたのは、このビルとおぼしき建物の廊下で巡回している男たちの映像だった。扉の前に一人、そして突き当たりにもう一人。真っ暗なせい、懐中電灯の不安定な明かりがちかちかと揺れていた。

『現在この扉の向こうには、監視役の男が一人、そして通路の突き当りを歩哨している男が一人。武装はしていませんが、アカネの体力からいつて負ける可能性は90%以上です』

「…あんだ、いつ私の体力なんか割り出したのよ」



『一般論です。何か問題が?』

「…続けて」

『いまから、電圧管理システムの一部を復旧させて、この扉を開きます。その後すぐにブラックアウト。暗闇での混乱に乗じて非常階段へと逃げ込みます』

「…非常階段?」

ディスプレイに3Dの画像が現れる。そこには普通の部屋のほかに、部屋と部屋の間を縫うようにして広がる空間があった。

『この扉を抜け、向こうの通路を右に行き、突き当たりを左に抜けてください。そこにケーブル敷設用の非常用通路があります』

「つまりは突っ走ってことなのね」

『今、考えられる方法の中で最も危険度が低い選択肢です』

S I K Eの語り口はテキパキとしていながらも、どこか感情というものが抜け落ちていくように感じた。先ほど柴田が話していた『考える』A Iという言葉がいまだに信じられない。

けれど今はそんな悠長なことを言っている場合ではないのだ。

逃げなければ。

「米原、現状を報告しろ」

制御室にそろった面々は、懐中電灯の光だけを頼りに、お互いの顔を確認すると、真剣な面持ちで青年が口を開くのを待っていた。

「…現在の「アヴァロン」は完全にあのPCの制御下にあります。電圧は1階から20階まで全てブラックアウト。閉館していたこともあり、シヨッピングモール・オフィスのほうに人がいなかったことは、不幸中の幸いかと。監視システム・セキュリティシステム、共に現在の所稼動している箇所はありません。また、下層の階へ通じる通路も全てロックされており、我々は閉じ込められた状態にあります」

「…応援要請は？」

「つい先ほどから電波の乱れが激しく、通信機器が通じるのはアヴァロンの上層のみと推測されます」

しばらくの沈黙がその場を支配した。一瞬にして状況は覆り、自分たちは地上120メートルという絶海の孤島に取り残されたわけだ。

「…警戒レベルを5まで引き上げる」

空気が凍りついた。それはつまり、現在のこのアヴァロンにあるだけの武装の使用を許可したということだ。

「…公安に介入されると後々面倒なことになる」

「ですが……！！相手は一般の民間人ですよ」

珍しく感情をあらわにする喜田川に、柴崎は厳しい目を向けた。

「たとえば、民間人であろうと、あのAIを使っている時点でもう我々の敵だ」

小野坂も嫌悪感を示しているのか浮かない顔をしていた。

「最優先はAIの確保だ。ログインがなされた今、糸伊原茜に用はない」

茜はイヤホンマイクを装着し、パソコンを閉じると脇に抱え込んだ。普通のPCとは違い、スリープモードには入らないらしい。

『……現在、システムの一部を復旧中』

ピ、ピ、ピ……という電子音と共に茜の心拍数も上がってゆく。目を閉じ深呼吸をした。

（「大丈夫よ、今頼れるのは自分自身しかいないんだから！」）  
気合を入れるためにもと、掌で自分の頬をパンパン！と叩く。

『……復旧準備完了。カウント開始』

イヤホンから聞こえる声にあわせて、扉のロック部分を見つめる。

『5、4、3、2、1——』

その瞬間目の前が急に明るくなる。そして、扉の外から見張りの男たちの声が響いてきた。

「どうした、電圧が戻ったぞ！」

「システムが復旧したのか……。おい、制御室に連絡をとれ」

その声を合図としてか、またSIKEが急に電子音を出し始める。どうやらすごい勢いで計算しているらしい。——そして

またしても電源が落ち、あたりを暗闇が支配した。

（「今だ！！」）

瞬間的にドアロックの灯かりが赤から青へと変わり、それを見計らって茜は思いっきり扉へと体当たりをした。そして何度もシュミレーションをすませたように、右へと走り抜ける。

100メートル走で15秒の俊足を生かせる日が来るとは思っても見なかったが、男たちは不意を突かれたように、茜の走り去った後を呆然と見ていた。そして、

「……おい！！女が逃げたぞ！」

「何をしている！早く追え！」

辺りは暗く、非常灯すらついていなかった。けれどほぼ直線なのと、長く暗闇の中にいたせいか夜目はきいていた。やがて懐中電灯

を振り回して男たちが追いかけてくる。

茜は恐怖心と必死に闘いながら、突き当りを左へと抜けた。そこには、S I K Eに言われたとおり、非常用とわかる扉が設置されていた。

慌てて、ドアノブを引き出し右へと回す…が。

「…開かない!!!?」

焦りのためか緊張で滑るが、いくらドアノブを回してみても、鍵はロックされており開けることは出来ない。ここは袋小路だ。追い詰められたら元も子もない。

「ちょっと!!!このドアはあんたが開けるんじゃないの!?!」

右手に抱え持っていたノートPC - S I K Eに向かってあらん限りの怒声を響かせる。

『―――現在解析中。過去5分以内にロックの暗証番号が第三者に書き換えられた形跡あり』

『!!!それって…!』

「おい!!!こつちだ!」

背後から人の気配がする。しかも1人ではない。

「なんとかして!」

こちらに駆けて来る追っ手を恐怖の眼差しで見つめながら、茜は助けを求めた。

『現在ハッキング中……セキュリティシステムへの侵入完了。  
――開錠アンロックします』

その指示通り、セキュリティロックの色が赤から青へと変わり、茜は思いっきりドアを引っ張ると、中の暗闇に体を躍らせた。振り返ると今にも男たちが自分に襲いかかるうとしてるのがわかる。しかし扉は閉まり、間髪のところ助かったのだと分ると、その場に座り込んでしまった。

## モーガン・ル・フェイ（前書き）

サブタイトルはアーサー王の妹から取りました。内容と直接的には関係有りませんが、間接的にはある・・・かな。

超高層ビル「アヴァロン」に出てくる子ネタは大体アーサー王に関連するものからとっていたりします（そんなに活用はしていませんが）

## モーガン・ル・フェイ

「経過を報告しろ」

柴崎は部下の米原に向かって、感情を極力抑えた声で問うた。それは逆に自分自身の怒りを極力抑えているかのように聞こえた

「はい。先ほどの電圧システムの一時的な復旧はやはり例のAIのものでした。目的は混乱に乗じての対象の脱出かと」

柴崎は口の端を噛んだ。先ほどからあのAIには一泡も二泡も吹かされてばかりだ。

「それから、システムの一部復旧に乗じてこちらからハッキングを仕掛けてみましたが…全て失敗に終わりました。…ただ、」

「…なんだ？」

歯に物の挟まった物言いをする部下に、後を続けるよう促した。

「いえ、そのシステムの復旧に伴い、こちらからのハッキングとは別に第三者からのハッキングが行われていました。こちらは成功しているようで、非常用通路への扉のキーコードを書き換えたのは確認しています」

「その第三者とは？」

「不明です。5分とたたない内に、全てのPCがブラックアウトしましたから」



「…妙だな」

S I K E の情報はもれてはいないはずだ。しかも、彼女ー系伊原茜が今現在どういう状況にいるのか分らなければ、非常通路のキーコードを書き換えるようなことはしないはず。ほんの一部とはいえ、たった5分間でS I K E が管理しているはずのセキュリティを書き換えたのだ。相当腕に自身のあるハッカーなのだろう。いやこの場合はクロツカーというべきか。

『会長』

無線機を通して音声が入ってくる。電波が乱れているせいか音割れが激しかったが、かろうじて聞き取れるレベルだ。作戦に支障はないだろう。

「喜田川か。守備はどうだ」

『現在20階のA通路、非常通路のドア前にいます』

系伊原茜は現在、20階の非常用通路にいる。そこは『非常用』とは名ばかりの通路で、主に表に出しづらい『商品』を運ぶのに使用していた。なので柴崎コンサルティングのごく限られた人間しか存在を知らない。部屋と部屋の間を縫うようにして縦横無尽に走るそれは、このアヴァロンを知り尽くした人間でも位置を正確に把握して移動することは困難だ。地図があればよいのだが、機密情報であるためペーパーメディアでは存在しない。それに、むやみに単独行動をとって統率を取れないようであれば意味はないという喜田川の助言に従い、精鋭隊三人の団体行動で対象を拘束することにした。

「…会長」

背後に立っていた秘書は、恐る恐る主に問うた。

「何だ」

そうこうしている間に、強行突破のためのカウントが始まった。

『5、4、3、2、1…』

「…我々は、もしかしたら『はめられた』のではないですか？」

その答えは、ドアのロックへと向かって放たれた銃声によってかき消されてしまった。

「なっ…何！！今の？」

パソコンのディスプレイの明かりを頼りに手探りに進んでいた茜は、始めて生で聞く銃声に体を竦めた。一発ではなく、何発か続けて放たれるそれは彼女の体の自由を奪うには十分すぎた。

『…解析中。…非常用通路のドアが拳銃によって強制的にアンロックされたようです…』

「…！！」

やがてその答えが示されたように、扉を蹴破る音が響き渡る。そしてそれに続くかのような複数の足音。茜は走り出す。なるべく遠

くへ引き離さなければ。

「非常階段はどこ!？」

相手に気付かれないようになるべく小さな声で、SIKEに話しかけた。

『この通路をまっすぐ行き、突き当りを左へ、そして一番目の角を右へ。その後突き当たりを――』

べらべらと話し始めるPCに、茜は頭を抱えながらも、言われたとおりに突き当たりを左へと曲がる。足跡の主たちはこちらの気配に敏感なのか、的確に追跡してくる。

「…ちょっと!!もっと手短かな経路は!？」

『…………』

手元にあるPCは黙り込んだまま応答がない。焦りをこめた声で再度尋ねるが返事はなかった。

(「嘘でしょー!ー!」)

みるみるうちに男たちとの距離が縮まってゆく。やがて袋小路にたどり着き、茜は乱暴にPCのキーボードをたたいてみた。しかし応答はない。

『糸原茜さん』

拡声器のひび割れた音が反響して耳に突き刺さる。それを振り払

うかのように首を振ったが、無意味だった。

『そのPCを我々に渡して投降してください。これが最後のチャンスですーこれを拒否するようなら、われわれは武力行使も厭わない』

じりじりと男たちがこちらに攻め寄ってくる。その手には白い銃身が握られていた。

(「…」)

投降：もう既に自分は一度このAIを使って逃走している。ただで帰してはもらえないことは、本能で分っている。だとしたら、どんなに絶望的な状況であろうと、自分自身の力で抜け出さなければならぬ。何よりもー空兄に本当のことー真実を教えてもらうまでは。

比較的落ち着いた態度であたりを見回す。そして、足に微妙ながら風が当たっていることに気付いた茜は視線を下へとずらした。格子窓がとりつけられているそれは、どうやら換気口のようなのだ。最大の力をふるい蹴りをいれると、案外簡単に窓は外れた。からんからんと、金属の音が響くがかまいはしない。

「…っ！おい」

「嬢ちゃん!!」

空気を通すだけの機能を有しているそのなかは、狭かったが四つんばいになればなんとか動き回れるほどだった。ひっしになって匍匐前進し、角を曲がる。

通気口の幅は狭く、その場にいた三人とも首を突っ込んでみたものの、体を入れることはかなわない。ライトの明かりで照らしてみたが、曲がり角があるため死角が存在し、視界も良好とは言いがたかった。じつと耳を澄ましてみるとかすかに人の気配がした。やはり女性の茜の身であっても、身動きをとるのは容易ではないらしい。

「おいおい……」

小野坂は呆れた表情で肩を竦めた。檀原はなおも冷静な表情を崩さず、右手を通気口に入れ、しばらく目を閉じた。

……そして――――

パァンッ

銃声が当たりに響き渡る。黒いコンパクトな銃身バレルが特徴的なベレッタM800。それが通気口の入り口の壁をめり込ませた。それと同時に若い女―茜の悲鳴がこだました。

「今の銃声が聞こえたか！我々は本気だ！出てこなければ、また撃つぞー！」

恐怖心をおおるかのような、低い叫び声の後、ずしりと思ひ沈黙が支配した。

「檀原！」

喜田川は止めにかかるうと、檀原の肩を揺さぶった。

檀原は動じることなく、しかし瞳の奥に静かな怒りの色を表していた。

「…我々の任務はあのAIを確保する、それだけのはずですよ」

「だからといってだな！相手はただの女子高生だぞ！」

「…あなたは、彼女がただの女子高生だと本当に思っているのですか！？」

「…」

それは最初から感じた違和感だった。彼女―系伊原茜を拉致したとき、何故か電圧が不安定となり防犯灯が破裂した。普通ではありえないことは明白だった。

それだけではない。

『ずぶの素人が世界最高峰の知能を持つAIを扱えるわけがない』

喜田川・檀原・小野坂の上司である柴崎はこう言った。

―しかし現に彼女は、AIに命令を下し、コマンド行動している。これはどういうことなのか。

「――現場の指揮は私が取る」

うつむいてしまった檀原を見下ろしながら、喜田川は彼の肩から手を離れた。

「こっぴなつてしまつては、他に通気口を探るか、ここで持久戦に持ち込むかしかないな」

前者はたとえ見つかつてしまつても、深追いは出来ない。それに向こう側からどのような攻撃を仕掛けてくるか未知数だ。喜田川は先ほどの檀原の言葉を自らの胸のうちで反復させた。

（「ただの女子高生ではない…か」）

その認識を改めなければならないことを、喜田川は今更悟つたのだつた。

ぬくもり

ひとりはいや

くらいのはいや

なにかがおそいかかってくるような気がするから

あれはいつの頃だったろう。

多分、小学校に入りたての頃だ。

幼い私は母親に挨拶をしてベッドに入った。

季節は真夏で、夜とはいえ熱帯夜で寝苦しかったのを覚えている。

しばらくして…玄関のドアが閉まる音がした。

「おかあさん…」

ずりずりとタオルケットを引きずりながら、玄関を見ると、母の靴はなかった。多分仕事に出たのだろう。

しょうがないのだ。



母は私を育てるために、一生懸命に働いているのだから。

理屈では分かっていても、幼い私は寂しくて、寂しくて、一人で部屋に戻ると、ベッドの中でしくしく泣いた。

寝てしまおう

そうすれば、夢を見ているうちに、明日になっているのだから。

そう決意して、横になるものの、日本の夏独特の湿気の混ざったぬめりとした空気が、喉の辺りにまとわり着いて眠れなかった。

そのうち、耳にさあああああとという、透き通るような音が響いてきた。それはだんだん激しく、次第に物を地面に叩きつけた時のようになる。

(「雨…」)

私はまたタオルケットを握り締めると、窓のほうを見た。ガラスにたたきつけられた雨水が筋となって下へと落ちてゆく。

それを見ていると、脂汗が額ににじむのが嫌でも分った。

私は、雨が苦手だ。

何故か、こころがとても騒ぐ。見るのも嫌だった。

次第に涙があふれてきた。

泣いてはいけない。

私はそう言い聞かせた。じゃないとなめられるから。様々なものに。なにより自分の心が弱くなりそうで、私は賢明に強かった。

「おかあさん」

いないはずの、母を呼ぶ。けれどすぐに「呼んではいけない」と自分に言い聞かせた。

おかあさんは、おしごとなんだから。

暗闇の中、雨の音だけが響く世界。

まるで私だけが「そこ」にとりのこされたかのように

「…あきにい」

大好きな従兄弟の名をよぶ。

それと同時に、堰をきったように涙がとめどなく流れた。

「つく…、ひ…つく」

ふと、枕元を見ると、電話の子機が見えた。

それを手に取ると、短縮の3番を押す。

1番は母親の携帯。2番は職場だ。3番には空兄の携帯番号が入っていた。

通話ボタンを押す。

けれど、コール音を1回聞いただけで、やめた。

今、何時だと思っっているのだろう。空兄も明日学校があるのだ。もう寝ているに決まっている。

私が我慢すればいいのだ。

わがママを言っっては、皆に迷惑がかかる。

ぎゅう、と子機を握り締めて、ただ時がすぎゆくのをじっと耐えた。

タオルケットに包まる。汗が滝のように流れるが、それを取りさることはできない。耳をふさいでも、雨の音はやまず、ますます強くなってきた。

ひとりはいや

くらいのもいや

あめもきらい

いやだ、いやだ、いやだ

膝を抱えながら、泣き続けた。

かね？」

「…あ

透き通るような涼やかな声に、私は面を上げた。

空がそこにいた。

薄手のシャツに、ジーンズ姿で、心配そうにこちらを見ている。

「大丈夫かい？電話があったから、心配で来てみたんだけど」

当時高校生だった空兄は、息を切らせながら歩み寄ってきた。急いできたのだろう、肩が雨に濡れていた。

「万樹さんは、お仕事？」

こくこくと私は肯いた。

「そっか……。玄関の鍵が開いてるから、無用心だなあとは思ってたけど。よっぽど急ぎの仕事だったんだね」

私は、掌でごしごしと涙をぬぐうと、まだ信じられないという表情で空兄を見つめていた。

空兄はそんな私を見てくすりと笑うと、ベッドに腰掛けた。

「茜は、雨がきらいなんだね」

「…うん」

タオルケットで私の涙をぬぐうと、空兄は私の隣に横になった。

一緒に寝てくれるらしい。

「あきにい」

「うん？」

「あきには、あしたがつこつは？」

「茜が気にする必要なんかないんだよ。子供は大人に遠慮するもんじゃない。…こんなこと僕が言えないか」

私はタオルケットを腕に抱えたまま、空兄の隣に寝転んだ。彼は私の手をとって静かに微笑んだ。

空兄の柔和な笑顔が全てを包んでいてくれるような気がして、私はゆるゆると目を閉じる。

そしてそのまま、ふかい、ふかい眠りの内に溶け込んでいった。

声が聞こえる

目を覚ませ、と。

誰かが呼んでいるのがわかった。

でも、もうすこし、夢を見ていたかった。

「アカネ…アカネ」

茜の頬を涙が一筋流れた。

あの銃声のショックからか気を失っていたらしい。急に向けられた敵意が、突き刺さるほど恐くて、逃げ出したくて、精神が拒否したのだ。

意識を戻した茜は、意識がはっきりするのを待ち、目の前のPCに目を移した。

そこにはいつもと同じように「《プサイ》」のロゴを写したディスプレイが頼りない明かりを灯していた。

わたしはひとり。

そこにはだれもおらず。

存在するとするならば。

それはあきらかな、敵意だけ。

その事実にも、茜はふるえた。どうして、こんなことになってしまったのだろう。

あの時、微笑みながら自分を救ってくれた空兄はもういない。

いるはずがないのに、救いを求めてしまっ。

「アカネ」

PCがまた、茜の名前をよぶ。

「…せいよ」

言葉が暴力的になる。

「あんたの…せいよ」

やめなければ、こんなこと、意味のないことなのに。けれど、いちどあふれだした言葉はとどまることなく、茜の口から流れ出た。

「あんたのせいだ…、私がこんな目にあってるんでしょお!」

「……」

荒げた声が、精神を高揚させるたのか、茜の瞳から流れ出る涙は止まらない。

「ここから、脱出させるとか言っというて、何でこんな所で隠れてなきやいけないの!?!」

「……」

PCからの応答はなかった。しかし、しばらくの沈黙の後に、少し緊張をはらんだ声でPCは告げた。

「……私の意見を言います」

めずらしく、淡々とした物言いではなく、何故か感情というもの

が深く感じられる声だった。

「……あなたは私のことをただの『モノ』としか認識していません——」

「…え？」



## 強気のジュリエット

「……あなたは私のことをただの『モノ』としか認識していませんー」

「…え？」

予想外の言葉に、茜は耳を疑った。

「私は『思考』する人工知能 - S I K E<sup>サイキ</sup>です。そう、最初にも申し上げたはず。けれどあなたは一度も、私の名前を呼んでくれない」

「…」

「アカネ、あなたはこの世界上で唯一私に命令<sup>めいれい</sup>できる存在です。けれどそれは私を『利用できる』ことと同義だと思わないでください。私はただのモノのように、決められたプログラムをこなすものではありません。私は私の意志で『決定』することができます」

「…私の呼びかけを無視したのもそういう理由？」

「イエス」

簡潔な答えに、茜はふつつつと頭に血が上るのが分った。

「…、こっちはねえ、命がかかってんのよ！忘れたの？私がこんな目にあってるのはあんたのせいなのよ！」

『しめんなさい』

「……………は？」

『「ごめんなさい」とは人が日常的に使う謝罪の言葉です』

「い…いやいやいやいやそういうことでなく」

『私の一時的な感情であなたを危険な目にあわせたことには謝りま  
す』

すこし棘のある言い方だと思ったが、最初の頃に感じた機械的な言葉があまり感じられない。これが『彼女（彼女か？）』の素なのか  
もしれない。

そう、茜は思った。それと同時に何故かこのAIについて親近感  
が湧いてきた。

自分と同じでどこか気が強く、へそを曲げると中々直さない。

『海棠博士が私によく話してくれましたーあなたのことを』

「博士って…空兄のこと？」

『イエス。彼は私を生み出しただけでなく、私とコンタクトをとり、  
物事をどうとらえ、学習するのかを教えてくださいました。』私』とい  
う存在がたったひとつということも』

言葉は淡々としていたが、ときどきゆっくりとなる口調に懐か  
く思う気持ちにじみ出ているような気がして、茜は少し気持ちが明  
るくなった。

「……わたしのこと、何て話していたの？」

『手にかかる、妹のような存在だと』

うつ・・・と茜は言葉に詰まる。そのように思われていることは承知の上だが、少しだけ複雑な心境だった。

『そして、この世界で一番大切な存在だとも』

「…え？」

『……いえ』

茜は狭い通気口の中を膝を抱えて座り、制服に降りかかる埃をはらった。かなりきつい体勢だったが贅沢はいつていられない。

「わたしも『ごめんなさい』」

茜はふっと、柔らかい笑みをS I K EのいるP Cにむかって投げかけた。S I K E自身がそれを認識できるのかどうかわからなかったが、たまらなく、そうしてみたかった。

ここは地上120メートルの超高層ビルの上。周りは敵だらけで助けも来ない。まさに四面楚歌だ。

『海棠博士は管理者としてわたしに対する命令権を有していました。が、すでに放棄しています。- -けれど、放棄する直前に私はある命令を彼から受けました。これは『至上命令』といい、あなたの命令よりも優先されなければならぬものです』

「空兄あまぎが？それは…」

『「……なにがあっても、茜を守れ」』

PCのイヤホンから流れてきたのは、懐かしい、低い透き通るほど澄んだ男性の声だった。

「何…？今は」

『海棠博士の最後のメッセージであると同時に、私の『至上命令』でもあります』

（「……空兄の？」）

10年ぶりに聞く従兄弟の声は、少し焦りの感じられる、緊張感を孕んだ声だった。おそらく自分が追われるとわかっただけで…。

『海棠博士は管理者権限でもって私にあなたを守れ、と命令を出しました。ですから、私はなによりもそれを優先させなければならぬ』

「……さっきまでシカトしてたじゃない」

『それはそれ、これは、これ』

茜は内心で「そんなのありかよ！」とツツコミを入れたが、スルーすることにした。それは、今この状況下ですることではない。

そうだ、自分は決して悲劇のヒロインなんかではない、この状況に酔ってしまえばそれまで。助けを待っただけのジュリエットなど認めんだ。

自分の活路は自分で開く。決して一人などではない。「味方」がすぐそばにいるのだ、何を迷う必要があるだろう。

「サイキ」

名前を呼んでみた。何だかむずがゆいというか、すこし面映い気分だった。

『……サイ』

「え？」

『サイ、とお呼びください、アカネ。私の愛称です』

相も変わらずこの「相棒」には「表情」がないため、感情が読み取りにくかった。けれど、なんのことはない。S I K Eはいつだって自分の思っていることを語りだす。それに耳を貸せばいいのだ。

とても簡単なことなのに、できていなかった。

「…わかったわ。サイ」

すると、ディスプレイの中の「」のロゴマークがぐるりと一回転した。何かの感情表現らしいが、茜には読み取りづらかった。

「ーさあ、いつまでもこんな辛気臭い所に閉じこもってないで、さ

つさと脱出しましょう」

S I K E に向かって言うてみたが、半分以上は自分を奮い立たせるためだった。

『……そのことなのですが……』

一方、制御室では、大勢のオペレーターが独立した何台かの P C で、S I K E へのハッキングを仕掛けていた。しかし、状況は芳しくなかった。もとは個人用の P C であるせいか会社の最新型とはやはり性能からして違うらしい。逆に軽く S I K E にあしらわれ、逆ハックされるのが関の山だった。

「集中攻撃も無意味か。……しかしありえるのか？ 一度攻撃をうけた A r t h e r は 2 5 5 T F L O P S ……アーサー最新型とまではいかないまでも、P C ではまず太刀打ちできない相手だ。……しかも相手はノート P C だぞ」

テラがメガに負けるなど……。柴崎は臍ほそを噛む思いだった。せめて外部への通信が復旧すれば……。通信回線は全て使用不能状態。先ほどの独立 P C で試したものの電波妨害で瞬く間に P C 自体が使い物にならなくなった。

「……で、お前たちはどうして戻ってきた？ お姫様の姿が見えないようだが？」

額を右手で押えながら、柴崎は目の前にいる喜田川と檀原に問うた。

「通気口のなかにいます。入り口が狭すぎて3人のいずれも追いかけることは不可能でした」

「…しぶといな。入り口では小野坂が張り付いているのか？」

「はい。しかし、精神的に追い詰められているのか、威嚇発砲したところ気絶してしまった様で…」

「引きずり出せないのか？」

「なにぶん、入り口から見て死角に入った場所にいるものですから… だれか小柄な者を連れて行きたいと思ひまして」

とはいったものの、柴崎に思い当たる人物はいない。米原も同じらしく目線を合わせると残念そうに首を左右に振った。この会社で武張った仕事をしている人間は大抵ガタイがいい。茜は背か低いと言いがたかったが、線が細いため、ぎりぎり通気口にもぐりこむことができたのだろう。――だとすると後はここにいるオペレーターぐらいだが、彼らを危険に晒すわけには行かなかった。それに言いづらいことだが、腕っ節の強さでいえば茜の方が強そうだろう、といったような面々なので、正直言つて無謀だ。

## カリヴァーンの鞘（前書き）

カリヴァーンとはアーサー王伝説で名高い、エクスカリバーの別名です。ちょっとした小ネタです（ネタになっているかどうか心配）



## カリヴァーンの鞘

茜はひよっこりと角から頭を出した。先ほど出てきた穴から灯りがもれていた。おそらく懐中電灯の灯りだろう。それから逆方向へとそろそろと這ってゆく。そしてS I K Eサイキの指示通りに曲がりくねったダストの中を四つんばいのまま進んでゆく。膝頭がひりひりとして痛かったが、ここで立ち止まってもられない。

かまわず、前へ、前へ。

そして指示のあった格子窓につくと、渾身の力をこめて格子を蹴った。狭いせいか余力が中々つかなかったが、何度かやっているうちにネジがゆるんだのか隙間が空き、やがてがつつという音と共に格子窓がふつとんだ。額にかいた汗を手でぬぐうと、茜は中へと入り込む。

そこには大小さまざまな太さの線コードとともに、四角形の茜の身長と同じくらいの大きな箱が設置されていた。赤・青・黄などのランプがチカチカ絶えず光っている。それとともにぶおおおんという低いうねりのような音が聞こえた。気がつくと吐く息が白いのがわかり、おもわず腕を組みS I K Eを抱きしめた。

「……ここは？」

『……中央制御室……超高层建筑』  
『アヴァロン』が有している、スーパーコンピューター・『A r t h u rアーサー』です』

「……アーサー？」

『255TFLOPSもの容量を有し、この『アヴァロン』の情報制御のすべてを一手に担っています』

そう聞くと、その四角い箱は暗い部屋の中であだひとつの「異物」のように見えた。

「これからどうするの？」

『管理者権限を用いてAアrアthアurアのシステム内に侵入・そして内側から完全に破壊します』

「ええっ！！でも今はサイがこのシステムを操ってるんでしょっ？」

『私は今単に、このシステムの『手綱』を握っているに過ぎません。時に馬は騎手をもあざむくものです』

(「スパコンを馬扱い……」)

しかしどうであれ、今はSシIイKキEがこのビルの情報制御を握っているのだ。ここで手放してしまうのはかえって危険だと思われた。

『アカネ、非常通路に逃げ込んだ時のトラブルを思い出してください』

「え？」

確かあの時、暗証コードが書き換えられたとSシIイKキEはいつていた。

「でも、サイがこのネットワークをハッキングする前にあらかじめ書き換えられていたとか…」

『いいえ。私は言いました『三分以内に』と。それはつまり誰かが私たちの状況をどこかで”見て”いるということに他ならない』

システムの一時復旧に伴う外部からのハッキング。これは何を意味するのか。

『私の予想が正しければ、例のハッキングはこの<sup>アーサー</sup>Arthurといういわば「扉」を通じて内部へと侵入したということになります。こうしている間にもどこから私たちを監視し隙あらば、邪魔しようとしている。…それだけは許せない』

その声の中には怒りがこもっているように見えた。茜はArthurの前へと移動すると、床に座り込んだ。そしてPCを開く。いつもの「《プサイ》」のロゴマークが静止していた。

「それってつまりーさっきの柴崎とかいう人たちとは別の誰かが私たちの邪魔をしているってこと…?」

『イエス』

「でもさ、このスパコンを破壊してそれで私たちはどうなるわけ？向こうは武器を持っているようだし」

『ー私が逃亡のための手立てを考えず、ただ暴走している、そう言うつもりですか?』

「だって、これを壊してしまったら今度こそ…」

戦いという場面においては、こちらはまったくといっていい程無力だ。

銃を突きつけられた時の背筋をかけぬける”ひやり”としたとした感触。今でも鳥肌が立った。目の前が真っ白になるようなあの感覚―あんな思いは1回だけで十分だ。

『アカネ？』

今度はどうやら心配させてしまったらしい。茜はつとめて元気な声をだした。

「大丈夫、何でもない。それよりここからどうやって外に？」

『部屋の奥を見てください』

しかし辺りは暗くて部屋の奥どころか1m先すらも危うかった。そこで茜は立ち上がるとPCを片手に歩き出すと、すると茜と同じ身長ほどの小さな扉が見えた。

『物品搬入用のエレベーターです。屋上と1階へ直通しています』

「！？それってつまり…」

当初の計画で使用する予定だった非常階段をつかわずとも下へと下ることが可能だということだった。

『そしてもうひとつ、そのエレベーターは完全な外部からの情報制御で動くということですよ』

「つまり、また『介入』があるーそう言いたいよね」

S I K E はだまつたまま、ウイイインと音を鳴らし始めた。そのとたんものすごい勢いで数字がディスプレイ上に現れてはきえてゆく。どうやら人間には想像もつかない程の速さで演算しているのだろう。やがてそれがすべてやんだ。

『アカネ。適当なコネクタを一つ私につないでください』

「コネクタって…?」

『ここはアヴァロンの心臓部です。つまり各情報端末にアクセスするためのコネクタのストックは常駐してあるはず。それを見つけて私とアーサーとを繋いで下さい』

そう言い放つと、また計算を始めた。どこか高飛車なサイキの物言いに茜は少し眉をひそめたが、彼女の言うことも最もだと思い、あたりを探ってみた。

コネクタは案外簡単に見つかった。ダンボールに小分けして置いてあったのだ。そのうち何種類かを抱え持ってS I K E の側へと屈みこんだ。そして合う型のを慎重に選び、はめようとする。しかし中々合うものが見つからない。

『FXー』

困った様子の茜を見兼ねてか、S I K E は助言した。

『FXシリーズのコネクタであれば、どれでもつながります』

「それを先に言っつてよ！」

『常識です』

「なっ…！！」

やはりいちいち物言いが癪に障るAIだ、と茜は鼻息荒くしながら自分を押さえつけた。それと共に出るため息。

(「空兄もなんでこんな性格にしたのよ！」)

小言はS I K Eの生みの親である空にまで及んだ。それとともにため息をつく。ダンボールをようやく眺め「FX」と書かれたダンボールをようやく見つけ中身を取り出す。それをS I K EのPCへと繋ぐと今度はそろそろとArthurへと近づいた。繋ぐプラグは無数に有り、どこにつなげばいいのか茜にわかるはずもない。

「ーサイ、これってどこに繋ぐの？」

『どこでも結構です』

淡々とした声音のまま告げられ、茜は目の前にあつた空きプラグにコネクタを突っ込んだ。すると、地震が起きたのかと錯覚するほど地面が揺れた。いや、地面が揺れているのではない。スーパーコンピュータ・「Arthur」が揺れているのだ。

「なっ…何!？」

『『アヴァロン』内部ネットワークへの接続を行ったためのトラブル

ルです。大丈夫、すぐに収まります』

その言葉の通りに揺れはすぐに収まった。そのすぐ後に、PCのディスプレイ上にリンゴの形をしたロゴと共に認証画面が映し出されていた。

「……管理者画面ログインー」

その下にはお約束のように「25文字以内のパスワードを入力してください」の文字。

『…暗号解読アルゴリズムを構築中ーーー』

暗く、身を切るような寒さの中、茜の最後の戦いが始まった。

## 攻防

「会長」

柴崎はソファに深く腰掛け、暗い部屋の中でじつと耐えていた。この状況下で無理に動くことは無いはずだ。何かしら”向こう”から動きはあるはずだ。こちらから動くことは無い。

そう考えていても、不吉な予感ばかりが頭をよぎる

AIは覚醒と同時に茜と共に逃亡した。これは当初のシナリオには無かったことだ。柴崎が聞いたところによれば、AI-SIKE<sup>サイキ</sup>は自我を有し、それゆえに「他者」に依存することはないという。人間への依存こそが現在の情報産業の前提となりうるものであり、そうと考えるならばAI（人工知能）はその前提に背反するものである。しかし、二元論——この世のものは二つの相対するものから成り立つという考え方に基づくのであれば、AI-人工知能の誕生は必然的なものなのかもしれない。

たとえ機械であろうと、精神や魂といったものが宿るのであれば、それは人類のこれまでの短い歴史の中で最大の禁忌といえるものなのかもしれない。

「会長。非常回線を通じて向こうからコールが」

米原は他の社員に気取られないように注意を払いながら、手元の電話の子機を示した。

「!?!?だっ…誰だ!?!」



「…」

柴崎は米原につかみかかる勢いで迫った。米原は落ち着くよう促しながら耳打ちする。その名前に、柴崎は中ば”予兆”のようなものを感じた。

「どうしますか？この状況でコールができるとするならば…」

「いい、代われ」

そういいながら、米原から差し出された子機を耳に当てた。

『お久しぶりです』

電話の向こうから聞こえてきたのは、まだ若い青年の軽やかな、それでいて背筋をひやりとさせるような清涼感を持った声だった。

『大分、苦戦していらっしやるようですね』

言葉は心配している風であっても、声の調子とはそれとは正反対のようで、くつくつと笑いをこらえているようだった。

柴崎は必死に怒りをこらえながら尋ねた。

「どういうものか説明していただきたいものですね。あのAIは糸伊原茜の命令を受け付けられないのではなかったのですか？」

『「たしかに我々は糸伊原茜があのAIの声紋セキュリティシステムのログインパスワードを知っている、それだけの存在と伝えはし

ました。けれどももう一つ、伝えたはずです。かのAI《サイキ》は『精神』、『自我』を持っていると』

「それがどうしたというのです!!」

苛立つ気持ちが先走り、怒鳴り声となってあらわれる。

『…自我というものはつまり、自己がどのようなものを認識し、それを日常的な選択の中で適応させてゆくことに他なりません。どうやらSIKKEは糸原茜を一目見て、『恋』に落ちたようですね』

「…っ」

柴崎はもう既に気付いていた、しかし気付いた時には遅すぎたのだ。いま電話の向こうで薄ら笑いを浮かべている人物を信用するべきではなかったと。

『…心配なさらずとも、あと10分もせず全システムは復旧するでしょう』

「!?!」

『先ほど我々があなた方の所有するスパコンを介してネットワークへハッキングしたのはご存知のほずです』

「…」

ほんの短い、数分間の間に行われたハッキング。それが意味する所は柴崎も分った。

『ハッキングは現在も続行中です。我々の有する『アドニス』を用いて』

「なっ…！」

アドニスとはITトップシェアを誇る企業、アスタルテ社が1980年代から開発を進めて、昨年ようやく完成させたばかりのスーパーコンピュータの名称である。300TFLOPSという容量は勿論のこと、独自の発達した5つのネットワークシステム、そして演算の速さは世界一とも謳われている。

『おそらく、SIKEにも感づかれていないはずです。全システムの采配は彼女ーいえSIKEにゆだねられているのですから。- けれど』

そこで言葉が少し曇る。

『SIKEはこのメインシステムを構築しているArt<sup>アーサー</sup>hurの管理者権限を無理やり奪って、アヴァロンを内部から壊すつもりですよ』

「!?!?なんだと!?!」

管理者権限を用いて、内側からーそれは最悪のシナリオだった。

『系伊原茜は、中央制御室ーArthurのところですよ』

その声はあきらかに、嘲<sup>わら</sup>っていた。柴崎は苛立ち紛れに子機を乱暴に米原に預けた。

「喜田川！ 檀原！」

傍らに待機して、手元をなにやらいじっている二人は、注意を主のほうへと向けた。彼らが手にしていたのは、黒い銃身がいやというほど目立つ拳銃だった。その何挺かをズボンのホルスターにかけた。

「何でしょう」

「中央制御室へと向かう。準備しろ。それから小野坂も呼べ」

「会長も行かれるのですか？」

「ああ。ここまでこけにされて、黙って見ていられるか」

ぎらぎらとした視線で睨みつけてくる柴崎を見て、喜田川は背筋が凍る思いがした。

## コタツ論争

茜は膝を抱えながら、じつとパソコンの画面を眺めていた。恐ろしい速さで演算しているのか、先ほどからギョインギョインと鋭い音を出している。

「ねえ…サイ」

茜は寒さを紛らわせようと話しかけてみたが、中々返答は無い。やはりそれどころではないのだろうと、諦めて膝に顔をうずめた。

吐く息は白く、まるで季節が一気に夏から冬へと移動してしまっただかのようだ。

『……寒いですか？』

急に聞こえてきた声。それは先ほどから共に行動してきた存在を証明するものだった。

「…わかる？」

『このPCには、上部中央に小型のアイカメラが埋め込まれていますので、茜の状態は逐一手に取るように分りますよ。体温が先ほどより0.25度低下しています』

「大丈夫よ。こんなの、クーラーのきいた部屋にいますと思えば」

そう言いながら、最近冬服から夏服へとかえたばかりの制服を恨んだ。

『茜は寒いのは嫌いですか』

「……え？」

SIKEなりに気を使って（？）のことなのだろう、話題を振ってきた。

「うーん、寒いのはあんまり好きじゃないけど、暖房が効いたためぬくした部屋で、本読んだり、テレビ見たり…あつ、サイは”こたつ”って知ってる？」

軽い電子音と共にSIKEは答えた。

『……炬燵こたつとは日本の暖房器具のひとつであり、熱源の上に炬燵こた檯たを組み、こたつ布団を掛けたもので、布団の中に足を入れて暖をとる。床を数10cm下げて足を曲げられるようにした掘り炬燵と床が平面のままの置き炬燵に分けられる。』

見事なまでの模倣返答だった。

「……さすが、最新式のAIね」

『……何故ですか？』

「はい？」

『何故、暖をとるのに狭い場所に足を突っ込まなければ成らないのですか？温まりたいだけなら、ストーブやエアコンで十分のはずです』

「…」

つまりS I K Eは、外観的機能ではなくこたつの中身、「本質」について尋ねているのだ。

「えーっと…なんだかその方が楽しいじゃない？」

『楽しい？それは「精神的に高揚する」という意味ですか』

「まあ…それに、狭い所だからこそ、人が集まってきた、おしゃべりしたり、一緒にテレビ見たり、うたた寝したり、うん、そうだね。楽しいからかな」

茜なりの一番自然な返事だった。そういえば、今年のお正月は珍しく母子めずらしく過ごしたのを思い出す。大晦日のチャンネルは紅白かクイズ番組化で母の万樹と白熱した試合（喧嘩とも言つ）を繰り広げたのだった。

『…』

「わかった？」

『イエス』

また、「《プサイ》」のロゴがぐるりと回る。

そうこうしているうちに、画面の中のパスワード枠が埋まってゆく、すべてこれはAI（人工知能）であるS I K Eがはじき出したものだ。すでに10桁を越えていた。

『パスワード解析まであと15分――』

そのときだった。破裂音に似た銃声が当たりに響いたのは。茜は不吉な予感がして後ろを振り返る。すると外へと通じるドアが今にもこじ開けられようとしていた。

「さ…サイ!!」

悲痛な叫びにも似た声で、茜はS I K Eに呼びかけた。

『中央制御室のロックが強制開錠されました。危険です』

「そんなことはわかってるから、早くして!!」

『それでもアルゴリズム構築速度は、最高値をはじき出しています』

何発かの銃声の後に、体当たりの音が聞こえてきた。茜は自分の肩にもたれかかるようにして襲ってくる恐怖と戦いながら、PCを抱き寄せ、なるべく後ろに下がった。

「あと何分!？」

『最速でも13分』

「間に合わないわよ!」

その声と共に、扉が男たちの体当たりによって弾けとんだ。懐中電灯の明かりが茜たちを照らし出す。



「こんばんは、糸原茜さん。先ほどは、どうも」

声はあくまでも穏やかだが、目はもはや笑ってはいない。見えるとするのならば、憤怒の表情だけだ。

「さあ、そのAIを返してもらいましょうか」

「いやっ!」

その声と共に背後にいた男たちが茜の腕をつかむが、茜はPCを抱きしめたまま動こうとはしない。

「…困りましたね」

柴崎は銃口をゆっくりと床へと近づけ、引き金を引いた。トリガー部屋に残る残響に茜はますます身をすくめると、目の前の男を睨みつける。目尻には涙がにじんでいた。

「さあ、渡せ…渡すんだっ!」

（「いや…」）

自分を必死に奮い起こしながら、茜は自分に言い聞かせた。だめだ、ここで渡してはいけない…と。

なぜかはわからなかった。けれども、母親が子供をかばう本能のようなものが茜を揺り動かしていた。しかし、男たちにもみくちやにされてPCがずりずりと腕から離れてゆく。

『大丈夫です、アカネ』

（「え？」）

『大丈夫です、アカネ。私は大丈夫です』

『離してください、大丈夫ですよ。私を信じてください』

それは優しい、聖母のような声だった。その声に少し安堵した茜はゆるゆると力を緩めていった。

## コタツ論争（後書き）

「アヴァロン編」もようやく佳境です…（ゼエゼエハアハア）とにかく書ききる気満々なのでよろしくお願いします！

## 人質

違和感が残るが、まるで限りなく普通の。

柴崎は茜からひったくるようにPCを奪うと、後ろへと下がった。16桁でS I K Eの演算作業は止んでおり、パスワードが埋まる気配は無い。

「なるほど、自分の『主人』が危険と知るや、抵抗は止む、か」

「サイ…」

「サイ…？ああ、このAIのことが」

茜は両腕を喜田川と檀原に捕まれ、膝をついた。首をぐっと押さえつけられる。おそらく体に力が入らないようにするためだろう。

「多少、不透明な点もあるが、まあいい。これで先方との『契約』は果された。・・・しかし、困ったことになったー」

銃口がこちらを向いている。それは視線のように茜の肌を這うようにして感じる事が出来た。

「君は知らなくてもよいことまで知り、我々に多くの損害を与えた」

息が凍るほど寒いにもかかわらず、汗が吹き出た。体は震えが止まらない。

「会長、あのようないことがあったとはいえ、彼女は一般人です。ここは穏便に…」

茜を取り押さえていた男の一人が進言した。

「穏便に…だと？」

柴崎がそう言ったとき、少しだけ首を押えていた力がゆるんだ。茜は目の前の男を見上げる。

そこには、銃口をこちらに向けた柴崎の姿と、ディスプレイをこちらに向けたままのS I E K Eが見えた。いつもの「《プサイ》」のロゴ…ではなく、何かの映像を流し続けていた。

（「草原…いや、海？何なの？この映像は？」）

それは何の変哲も無い、ただの映像の羅列だった。まるで、バラバラの写真を無理やりつなげたかのような。

その時だった

体が大きく震えたかと思うと、脳の中にイメージがわきあがった。加速する・周りの景色が解けてゆく、そして目の前がいきなり記号で覆いつくされた。流れてゆく記号が、いつしか消えていく。そうしていくうちに、「景色」はどんどん変わっていった。

様々な「イメージ」が恐るべきスピードで頭の中をよぎってゆく。

（「いや…怖い…」）

今まで感じたことの無いような感覚に、茜は必死に耐えた。唇を強くかんだせいか、口の中に血の味が広がる。

「おい…」

喜田川は茜の様子がおかしいことに気付いたのか、声をかけ、顔を覗き込もうとする。

「……………28P7K680H」

「え？」

「28P7K680H！アルファベットはすべて大文字よ！」

それはSIKEが今まで解析してきた管理者権限パスワードの「残り」だった。

SIKEはものの3秒とたたない内に、パスワードの枠をすべて打ち込んだ。

『管理者権限奪取成功』

その声と同時に、部屋の明かりがついた。あまりのまぶしさに、茜は目を凝らす。

「！！何故だ！、管理者権限パスワードなど…そうそうたやすく破られるはずがない。…何をしたんだ！」

「何も…」

気分が恐ろしく悪い。茜は振り絞るように返事をした。イメージの残像がまだ目の前をちらついていた。自分が何者であるかを忘れてしまう、それほどに強烈なイメージがいまだに体を支配していた。

「…まあ、いい」

再び拳銃の撃鉄を上げ、引き金トリガーに指をかける。

「お前にとってはせつかく手に入れたお宝だが、こちらには人質がある。……そつだ、外部からのハッキングを蹴散らせ。それぐらい訳ないだろう？取引先にも痛い目を見せないとな」

ゆつくりと、腕の中にあるAIに話しかけるようにして。銃口を茜の方へと向けた。

（「大丈夫よ、茜。信じるの」）

（「サイを…彼女を！」）

茜は拳を握り締め、ひたすら祈りを捧げた。

—————そして。

先ほども聞いたかのような、いやそれよりも大きな音が部屋を支配した。それと共に起こる揺れ。地震ではない。この超高層ビルを管理しているスパコン、アーサーArthurが揺れているのだ。

「くそっ！」

それと同時に一発の銃声。そして、部屋は再び暗転した。茜は自分のみが無傷であることを確認すると、男たちを振り払い柴崎めがけて体当たりをした。思ったよりも華奢な柴崎の体はよろけ、それと同時にPC-SIKEが頭のうえに振ってきた。

「痛っ！！」

PCが頭に激突した。頭を押えながら、腕にPCを抱えもつと、茜は頭の中にインプットしてあった場所へと移動した。この状況下で唯一の脱出口となる物品搬入用エレベーターへと。

「何故だっ！何故お前が！！」

背後から柴崎が何かを叫んでいるのが聞こえたが、茜はかまわないまま最後の力を振り絞って中へと転がり込む。勢いをつけすぎたせいか壁に肩から激突し、声にならない叫びをあげた。

「つつつつ…！」

『ドア閉鎖』

SIKEの声と同時に、目の前のドアが閉まってゆく。しばらくして、エレベーターが動き始めた。

安堵した茜はずりずりとその場に座りこみ、周りを見回した。もともと人が入るよう設計されていないせいか、中は狭く天井も低い。隅のほうになにやら大きめの塊があった。

「何これ？見たことが…って！私のカバン！」



それは、今日放課後に拉致されたときに持っていた学制カバンそのものだった。ある程度まで使い古した革のカバンと夏代お手製のタータンチェックの手提げまでご丁寧に用意されていた。まるで最初から茜がここに来るのを分っていたように。

―それから――

「あのさ…サイ、」

先ほどから感じていた「違和感」を、恐る恐る口にした。

「私たちって、1階…つまりは、『下』から脱出するんだよね？」

『上』か『下』かと問われれば勿論『下』ですこのエレベーターは屋上と1階に直通しています。出口は1階にしか存在しません』

その返答に、茜は唾を飲み込んだ。どうやらまた、トラブルが発生したらしい。もう膝から下に力が入らないというのに…。

「……………このエレベーター、上昇してない？」

## 邂逅

「…ちよつと！『第三者』からのハッキングは、管理者権限を持ったことで完全にシャットアウトしたんじゃないの!?」

『……イエス』

「じゃあ、どうしてこのエレベーターは『上』に向かつてるわけ!?」

『……原因不明』

茜は座り込んだ姿勢のまま深いため息をついた。S I K Eはこのエレベーターの緊急作動の指示だけを出して、すぐに<sup>アーサー</sup>Arthurを内側から壊したのだ。それはすなわち原因を探る術を持ち合わせていないことを意味していた。

「つまりは振り出し、ってわけね」

S I K Eからの返答は無かった。

茜はカバンの中から自分の携帯電話を取り出すと、とりあえず110番を試してみたが、つながらなかつた。画面を見ると、アンテナが1本も立っていない。あきらめて携帯をたたむ。

（「外にできれば、つながるかもしれない」）

そうこうしているうちに、茜を乗せたエレベーターは、最上階→屋上へ到達した。自動的にドアが開く。そのとき目を射抜くような

鋭い光が差し込んだ。

(「何…まぶし…」)

茜は目を右手で押えると、前を見た。学校の校庭ほども有る広さの屋上の真ん中には、ヘリコプターが止まっていた。おそらくこの光はそのライトの明かりなのだろう。

「こんばんは、糸伊原茜さん」

少し低いが、暗さを感じさせない声だった。その声で目が覚めたように我に返った茜は、跳ねるように首を上に向けた。

天使のような微笑がそこにはあった。

(「誰…?」)

見慣れない青年がそこに立っていた。

自分より頭一つほど背は高く、年のころはおそらく自分と同じぐらいに見えた。通った鼻梁に三日月型の薄い唇、オリーブ色の丸い目と同じ色の髪が風で揺れていた。整った顔立ちをしており、まさしく「好青年」といったタイプである。

「っっ…!!」

しばらく呆然として見入っていた茜は、半身をずらすと身構えた。とっさにあたりを見回すが、まさしく背水の陣といったところで、屋上スペースの向こうには地上120mの闇が広がるばかり。

「大丈夫だよ」

「え…」

「僕は君を助けに来たんだ」

さあ、と青年は茜に一步近づいてきた。それを避けるかのように後ずさりする。しかし青年の方が早かった。あっという間に距離をつめると、茜の腕をつかみ引き寄せた。

「はっ…離して！」

体を振るうが、思うように力が入らない。鋭く睨みつけると、相手は心外だといわんばかりに肩をすくめた。

「いいの？このままここにいたらやっかいなことになるよ？」

「…やっかいなこと？」

青年の言葉に茜は脅えた声を上げた。それを隙と見たのか、体ごと引き寄せると、軽々と茜の体を抱き上げて、ヘリコプターの後部座席に放り込んだ。

「なっ…！何するの…！」

青年は涼しげな顔で茜の隣に座ると、タクシートの運転手に話しかけるような気軽さで運転席に「出してくれ」と声をかけた。そのとたん、がくん、と地面が揺れる。一度飛行機には乗ったことが有るがそれとはまた違った浮遊感。ヘリのプロペラの回転音が耳の鼓膜に直接響く。

窓から外を見ると、そこはネオンの明かりまぶしい東京の街が見下ろせた。息の調子を整えた後、隣に座っている青年に問うた。

「…あなた、だれ？さっきの奴らの仲間？」

「……まさか？」

青年はゆったりとした所作で茜の方を向いた。顔立ちは17、8歳といったところだがスーツを着こなしているせいだろう、雰囲気は大人びて見えた。

「じゃあ、何なの！？私をどこに連れて行くつもり！！サイのことが目当てなんでしょう！？」

『アカネ、血圧が10上がっている』

「うるさい！！」

「サイ…？ああ、そのAIのことだね。生憎僕は『そいつ』に全くといっていいほど興味は無い」

「え？」

「僕が興味があるのは、君だよ、糸伊原茜さん」

そういうと、また出会ったときのような微笑を浮かべて、茜の瞳をじっと見つめた。見るものすべての時間を停めてしまうほど魅力的な、笑みだった。

「なっ、何を言ってるの！馬鹿じゃない!？」

慌てて目をそらした茜は、手元にあるSIKEを更に強く握り締めた。青年はため息を一つつくと、足元に放り投げたままになっているカバンを拾い上げた。学制カバンのポケットからくしゃくしゃになった紙が外にこぼれ落ちた。それを手にして広げた彼は思わず声にかけて読み上げた。

「2-E 9番 糸伊原茜 数学2 ……37点…?」

それは今日のHRで帰ってきた数学のテストの答案用紙だった。あまりにもひどい点数だったので、見ていられなくなって手持ち無沙汰にカバンの中に突っ込んだのだ。

「!!!!!!何勝手に読んでんのよ!!!」

茜は目を白黒させて、青年からテストの答案をひったくった。彼は人の悪そうな笑みを浮かべて、くすくすと笑った。茜はついでにカバンを手元に置くと、中にもう一度答案用紙をしまいこんだ。

「すごいね、どうやってそんな点数がとれるんだい？」

「…それは『イヤミ』として受け取ってもいいんでしょうね?」

「イヤミ?」

無邪気な子供のように首をかしげる青年を見て、茜は腹のそこから盛大にため息をついた。

「このヘリコプターってどこに向かっているの?」

もはや抵抗する気力も薄れている茜は、投げやりに問いかけた。

「君の家の近くだよ」

「か…帰れるの?」

「言っただろう、助けに来たって」

そっぴいながら、体ごと茜のほうへと寄ってきた。目を丸くさせた茜は窓際に身を引く。青年は面白がって彼女の顔を覗き込んだ。

「ずっと、ずっと、会いたかった」

（「なっ…」）

まるで昔の古いメロドラマでも見ているかのような気分だった。言われ慣れていない言葉の連続に茜の心拍数は上がる一方である。

「…今どきそんなこと言う奴始めてみたわ」

「?だって君は僕の『運命』なんだから」

青年は悪びれる様子も無く飄々と言ってみせる。

（「…本気だったらマジでたちが悪いわね」）

そう思いつつも茜は聞かずにはいられなかった。

「…運命?」

「そう、運命。この世界が何万という道に枝分かれしていようと、僕と君が出会うことは『運命』なんだ」

青年の檜皮色ひわだいろの瞳が、烏羽色からすばいろをしている茜の瞳をとらえた。本気だとは思えない。しかし、冗談だとも思えなかった。これまで茜に言い寄ってきた男性というのは皆「打算的」だった、茜に何かしらの「価値」を見出して近づいてくるのだ。それを一概に悪いとは言えない。茜だつて知らず知らずのうちに人を「利用」していることが多々有るのだから。人間の関係性というのは「利用し」「利用される」という所にある。何の見返りも求めない関係を築くことはとても難しい。たとえ家族であったとしても。しかし、彼の言葉には茜に対する「見返り」が見出せなかった。



邂逅（後書き）

謎の美青年登場！（笑）そろそろ恋愛風味が混じり始めます（意味不明）

## 運命

「もうじき到着します」

運転席の男は、マイクに向かって何やら指令を出しながら、青年に話しかけた。茜のほうからは後姿しか見えない。窓から景色をのぞいてみると、そこは茜の自宅から歩いて20分ぐらいの所にある廃ビルの屋上の真上だった。もとはセキュリティ会社の持ち物で、よくヘリコプターが止まっていたのを思い出した。

へりはしばらく滞空した後、下降を始めた。

無事にビルの屋上にへりをとめると、青年は広報座席のドアを空け外に出て、茜に手をさし伸ばした。彼の手はとても大きくて、何故か幼馴染の空あその手を思い出させた。無事に地上に着地すると、振り払うように手を離れた。

けれど視線は青年から離さなかった。 - 否離せなかったのだ。茜はどうしようもなくこの青年に惹かれていた。それは多分「恋愛」とは違った感情なのだろう。何かとめどなく自分の中に流れていた感情が急にわだかまり始めたかのような、妙な感情だった。

外は6月だというのに、風が冷たく、肌寒かった。

「あなた、名前は？」

「え？」

「名前よ。無いわけないでしょう」

青年はしばらく呆然と茜を見つめたあと、椿色の唇を開いた

「アオイ」

その言葉を聴いたとき、胸の鼓動が急に早まった。先ほどの脳の中に流れ込んできた”イメージ”の感覚に似ていた。どうしても心がざわめく。

『アカネ、大丈夫ですか。心拍数が上昇していますが』

イヤホンマイクを通じて、SAIKEが話しかけてきてくれた。今となつては聞きなれてしまった少し高めの子の少女の声。心の奥底に響くような美しい声だった。

「あなたは、サイーいえ、SIKEについてどれ位知っているの？」

目の前の青年アオイは興が削がれたといったふうに、眉を潜ませて茜を見つめた。

「近年アスタルテ社で開発が進んでいた人工知能のことだよ。『the Superlative Intelligence that have Knowledge of Everything』の英文の頭文字をとって『SIKE』と名づけられた。意味は『最上の知識を有する最高の知能』、まあ、開発者の海棠氏は別の意味をもって『サイキ』と名づけたようだがー」

「ーえ？」

「その意味を君が知るのには先のことだよ」

「…それも『運命』なの…?」

青年は答えなかった。そのかわりにまた、微笑んだ。

「血」

「え…」

「血がついてる、」

そう言うと青年は自分の唇を指差した。そういえば、先ほどの衝撃に必死に耐えようとして、口の端を噛んでいたことを思い出す。

茜が唇に指で触れようとする、アオイはそれを遮るように腕をつかんだそして――

(「……え?」)

次の瞬間口付けられていた。肩をきつく抱き寄せられ、逃げることもかなわない。体中が電流が走ったかのようにカツと熱くなり、茜は熱に浮かされたようにゆるゆると目を細めた。まるで眠りにでもいざなわれているかのように。

『ーアカネ!』

S I K E 《サイキ》の呼び声に正気づいた茜は、少しだけ緩まった腕を振り回し学生カバンをアオイのわき腹へとぶつけ、その反動で少しよろめいた彼の頬を思いっきり平手打ちした。

「なっ…、なっ…、なっ…何すんのよ!」

茜は顔を真っ赤にしながら、手の甲で唇をごしごしとぬぐった。口の中に血の味が広がり、鼻先を鉄分の匂いがかすめた。

「何って、確認したのさ」

「確認…?」

「僕たちがもう一度、『ひとつ』になるためのね」

アオイは至極真面目な表情で顔を伏せたのち、ふっと表情を和らげた。何故だろう。さっきと同じ笑みのはずなのに、底光りするような黒い『面』が茜の目には見えた。

(「怖い…」)

アオイはもう一度茜の傍へと近寄った。そして耳元で囁く。

「君にももうじきわかるよ、『運命』とはなんなのか」

「…」

「また会おう、茜」

まるで暗示にでもかかったかのように、体が動かなかった。アオイは茜から離れると、ひとりへリコプターのほうへと引返してゆく。

そして、また心の奥がざわめくような、プロペラの回転音を響かせながら、灰色の機体は飛び去っていった。

茜は呆然と立ち尽くしていた。先ほどの出来事がまるで夢のよう  
に、ふわふわとした感触を伴って脳内にフラッシュバックする。普  
通の、ごくありふれた一日になるはずだったのに  
この数時間でそれは一変した。組織からの誘拐・監禁・SIKEと  
の出会い・逃亡…そして

（「キス…」）

ぼつり

ぼつり

雨の雫が茜の黒髪にかかった。ぱらぱらと小雨だったが、すぐ  
に土砂降りにかわる。けれどそれでもなお茜はその場から離れるこ  
とが出来なかった。雨が額から頬、そしてのどを伝う。それと共に  
別の水滴も流れ出していた。どうしてだろう。いちど流れたそれを  
抑えることはできなかった。

「つく…つく」

手の甲で涙をぬぐいながら、唇をこれでもかというくらい擦った。

（「…あきにいい」）

思い出されるのは、遠いところへといってしまった従兄弟のこと  
だった。また、ほほえみかけて、思いつきり抱きしめてほしい。そ  
して言っただけでいいのだ。

「今までのことは全部悪い夢だったんだ」と

耳を突き刺すような雨の音は、茜の体を容赦なく打ち付ける。耳障りなその音は、彼女の心の内を攻撃した。

（「どうしてそばにいないの…？」）

『「……アカネ？」』

S I K E の声でした。

やっぱり、雨は嫌いだ。

何かにすがろうとしている自分の姿を思い知らされるから。





## 愛しの我が家

しばらく茜は、雨の中を立ち尽くしていた。これまで起こったこと全てを思い返しながらか、頭の中に納まりきるように情報を整理する。

しかし、うまくいかなかった。

まだ唇に熱が残っていた。それを振り払おうとして、何度も唇をぬぐう。

「あきにい……」

屋上のドアが突然開いたのはそのときだった。

そこに立っていたのは、息を切らせたもう一人の従兄弟、はる温だった。

「茜！！お前……！！」

何かを叫ぼうとするが、うまく声に出せないらしい。肩で息をして必死に呼吸を落ち着かせているのが分る。

「っ……！今までどこに行ってたんだ！心配したんだぞ……っ？  
っ？」

茜はしばらく、はる温のほうを見つめると呆とした表情でしばらく宙を眺めていた。

頭がくらくらする。

雨に打たれたせいだろうか、それとも慣れない頭脳労働をしたせいなのだろうか、それとも…

(「世界が、回ってる…」)

茜の様子がおかしいことに気付いた温はそろそろと茜に近づく。それと同時に茜は意識を手放した。

(「あ…き…にい」)

意識を失う最後の瞬間に見たのは、初恋の人によく似た青年の叫びにも似た呼び声だった。

温は突然崩れ落ちた茜の体を抱きとめた。額に手を当てると、どうやら熱を出しているようだ。長い間雨に打たれていたのだろう。体は冷え切っていた。

「茜!」

とりあえず茜の体を背負ってビルの中へと駆け込む。階段の端に座ると、呼吸を確かめた。少し苦しそうだったが、規則正しく呼吸をしていることに安堵した温は、ため息をついた。

「どっしてまた、こんなところ…」

「…ん」

腕の中の少女が身じろいだので、温は呼んでみた。

「おい」

「あ……」

「なんだ？つたく、これからおぶって帰る者の身になってみるよ」

「あ……き……にい」

「……」

温はしばらく呆然と茜の顔を眺めた後、唇をかんだ。

「何だよ。どうして……兄貴なんだよ」

助けに来たのは俺なんだぞ、と言いかけて、温は唇を閉じた。そして茜の頬をそつと撫でた。濡れた黒髪が指先に絡まった。

「……兄貴はもう来ないんだ。わかるだろ？」

そう、静かに問いかけた後、ゆっくりと茜の体を抱きしめた。

「帰ったら、冷やさないといけませんね」

それまでへりを静かに運転していた男は、助手席に座っているアオイの頬を見やると、くすりと笑った。年のころは30代の後半といった所で、中肉中背の体つきをしており、切れ長の目が特徴的だ

った。

「あいつには言うなよ」

アオイはニヤリと微笑むと、口の端を手でぬぐう。

「きつつい、一発だったよ」

「それは、自業自得というのではありませんか？」

ヘリの外をふと見やると、深夜のネオン街の電灯がきらめいていた。大小さまざまな光の粒は、まるでひと時の幻のように美しかった。

「しょうがないじゃないか、したかったんだから」

男はこれ見よがしにため息をついて、

「次からはせめて、相手に伺ってからにしてくださいね」

「いちいちうるさいなあ、松方は」

アオイは子供っぽく膨れて見せると、自分の口元に指先を当てた。そして急に声色を変える。

「…『茜』の解いたアヴァロンの暗号強度はいくつだ？」

「アーサー Arthur の管理者権限パスワードは『上』から流れてきた情報によりますと、168ビットだそうです」

普通、セキュリティパスワードはビット (bit) という単位で強度を測っている。通常コンピュータは二進法、つまり0か1の数字で構成されており、ビットというのはデータの最小情報単位をあらわす。

1ビットの暗号はつまり、数字で表すとすると「0」か「1」の2つのうちのどれか、ということになる。2ビットでは「00」「01」「10」「11」の4通りと2乗され、3ビットは3乗の8通りということになる。つまり168ビットというのは、2の168乗通りのパスワードが考えられるということになる。

「『アドニス』を使えば解読にどれくらいかかる?」

「テストを行っていないので何ともいえませんが64ビットの暗号解読テストでは15日で答えをはじき出しました」

「そうか…、予想以上だな。『上』も喜ぶだろう」

そのとき、男―松方のイヤホンがうるさく鳴り出した。どうやら無線がはいったらしい。

「『D』の帰還を確認したそうです」

「結構。それじゃあ、僕たちも帰ろうか愛しの我が家へ」  
マイ・スイート・ホーム

## 裏切り

アヴァロン最上階、中央制御室

「…何故だ・・・、何故お前が」

茜が搬入用エレベーターへ飛び込んだ後、一発の銃声はその場の時を止めた。

柴崎は流れる冷や汗を背中を感じながら、背後に目線を送る。喜田川や檀原も同じく驚きを隠しきれないようだった。目の前の壁は一発の銃痕<sup>じゆうこん</sup>。非常灯の明かりだけが灯る部屋の中で、空気が一瞬凍りついた。

「お…小野坂、何故だ」

銃声の発せられた方を見やると、そこには先ほどまで茜に銃を向けていた小野坂が柴崎らに銃口をむけていたのである。

「…わかりませんか？喜田川さんあたりはもう気付いていると思っ  
ていたのになあ」

いつものような軽い口調で話す小野坂は、銃身を下ろさず、会話を続けた

「…誰かに雇われていたのか」

「ええ。まあ、どこの組織なのかはもう見当がついていでしょう  
が。…おっと、檀原、この状況でどちらが不利なのかわかってい

だろう？」

隙をついて、逆転の機会をつかがっていた檀原の頭部に銃口が向けられた。

「助かったよ、檀原。お前が暴走してくれたおかげで『仕事』が随分やりやすくなった」

「っ……」

「何故だ…、5年以上も一緒にやってきたというのに、どうして裏切ったりしたんだ」

喜田川は搾り出すように声を出した。

「裏切り…？逆ですよ。俺は『組織』からこの柴崎コンサルティン  
グへ潜入するように命令を受けたんです」

「何だと…！」

「これが、人を使いまくる上司でね、それを考えれば喜田川さんは  
理想的な上司だったなあ」

「貴様！」

その時、廊下をひた走る音と共に、怒声が聞こえた。

「警察だ！全員武器を捨てて手を頭の後ろに当てる…！」

飛び込んできたのは、スーツ姿の集団だった。3、4人が固まっ

て拳銃をこちらに向けている。

「やっと決定打がおいでなすった」

そう言いながら小野坂はゆっくりと拳銃を床に置き腕を手の後ろで組んだ。状況を飲み込めていない柴崎・喜田川・檀原の三人は新たな侵入者にただ目を丸くするばかりである。

そのうち、男たちの中からきちっとしたスーツに身を包んだ中年の男性が柴崎の前まで歩いてきた。

「柴崎涉さんですね」

柴崎が黙ったままで居るのを肯定と受け取ったのか、男性は懐から細長く折りたたまれた紙を彼に突きつけた。

「逮捕状です。罪状は…言う必要はないでしょう」

「何故だ…お前ら警察にも十分尽くしてきたじゃないか！」

「お話は署のほうで。連行しろ」

柴崎は両の腕をつかんだ刑事に罵声を浴びせながら、中央情報制御室を出て行った。

「似口このくちさん」

男は連行されてゆく柴崎の後姿を見ながら、部下の方へと注意を向けた。



「何だ」

「本当によろしいんですか？あの男だけ連行はおるか、任意同行を求めないなんて。明らかに銃刀法違反ですよ！！」

そう言っつて部下の男が指し示したのは、戦闘服を着て銃をホルスターにしまっている小野坂の姿だった。

「彼はいい。『上』からのお達しだ。それにあの男が閉っていると  
なれば、私はこれ以上関りあいたくないしね」

「？」

独り言のように言葉を紡ぐ似口（くのくち）に部下の男は釈然（しやくぜん）としないものを感じながらも、上司に逆らうことは出来なかった。

## 裏切り（後書き）

久しぶりの更新です。

これでアヴァロン編はひと段落。S I K K Eのキャラクターで短編など書けたらなあとおもっています。

## はじまりのおわり

（「ここは、…どこ？」）

体全体を吹き抜けるかのような、柔らかい風が茜の体を優しく包み込む。辺りを見回すと、そこは一面青々とした草が生い茂る、草原だった。果てはなく、深い蒼の色を讃えた空に草がさわさわと揺れている。

裸足の足の裏がさくさく、と草をふみつけて、なんとも言えない新鮮な気分だった。

ここは何もない世界

まっさらな世界

私のほかには誰も居ない、完結された世界

そんな風に、茜には思えた。

「茜」

背後から呼び止められた茜は、ゆっくりと声がしたほうへとふり返った。

「あ…」

一瞬言葉を失った。何と云っていいのかわからなかったから。

「あ…き…こい」

そこに立っていたのは紛れもなく、茜が思い続けてきた海棠空かいとうあきだった。薄茶色の瞳にダークブラウンの髪がさらさらと揺れる。いつものように温和な微笑をたたえていたが、茜が最後に見た18歳の少年の姿ではなく、20の半ばといった年相応の青年だった。どこか懐かしい気持ちになるのに、どうしてか初めてあったような気持ちにもなった。

「茜、久しぶりだね」

さあああと風が頬を凧いだ。目頭が熱くなるのを感じて、茜は瞼を掌で押えた。

「つつ…」

言葉が出てこない。こういうときはどういえばいいのだろうか。

「ごめんね、怖い思いをさせてしまって」

そう言うと、空は茜の腕をそつとつかんで抱き寄せた。昔、雨の音が恐くて泣いていた時のように。

しばらくそうしていると、空はゆっくりと語り始めた。

「サイにはもう会ったよね？」

「…うん、ちょっと高飛車でとつても頑固」

「ははは、うん、友達になれたみたいだね」

茜の長い黒髪を撫でながら、空はからからと笑った。

「あの子はね、少し意地っ張りなところがあるけど、根はとても優しくいい子なんだ」

「自分は意思を持つてるんだ」って言ってた」

「うん。だって一人の独立した、立派な”人格”だからね。『機械には”自我”は宿るのか?』というのは長らくなされてきた議論なだけども、彼女はそれの一つの”答え”であるわけだ」

「空兄が作ったんだよね」

「うーん…『作った』というよりも『再生させた』の方が近いかなあ。あの子はね、茜と同じ年位の女の子なんだよ」

「?」

首をかしげる茜に空は微笑みかけると、ゆっくりと体を離れた。そのとき茜の脳裡に柴崎の話した言葉が浮かぶ

「!!そうだ!空兄!あのあの!産業スパイがアスタルテに抱き込んで他の企業が逃亡したっていうのは本当!?!」

「ははは、茜、大丈夫かい?」

飄々とした表情で急に慌てだした茜をなだめようとする。

茜は深呼吸を繰り返して、言葉を紡いだ。

「産業スパイをして、今逃亡してるって本当なの？」

それを聞いたとたん、空はあっちゃあどばかりに空は頭の後ろを搔いた。

「そこまで話が広がっていたのか」

「？」

「僕が現在逃亡しているのは本当だよ。でも相手はアスタルテじゃない」

「え…だっ、大丈夫なの!？」

食って掛かるように空に詰め寄る茜に空はどうどう、と落ち着かせようとしたが「馬じゃない!!」の返事に一蹴された。

「大丈夫だよ。ちょうどいい隠れ家も見つかったし。ここなら奴らも見つけられないだろうしね」

「そうじゃなくて!空兄、本当にスパイなんてしたの？」

「いいや」

空はため息を一つついた。

「じゃあどうして!!…そうだ、警察に保護を求めれば」

「警察は動いてくれないよ」

「え？」

それはどこか冷たい、ひやかかな言葉だった。それに自分でも気付いたのか空は慌てて訂正するかのようにつくろった。

「…とにかく今は、普通通りに学生生活を送ること。温はると協力してサイのチューリングテストを積極的に行ってほしい」

「チューリングテスト？」

「いいかえるとするなら、『サイがより人間らしい受け答えをするための訓練』ってところかなあ。詳しいことは温に聞いてよ」

空気が揺れた。風が吹いたのではなく空間そのものが揺れているかのように。

「そろそろ時間だ」

「え？」

「茜、きみはひとりじゃない。それを忘れないでいれば、大丈夫。

「運命」にだって勝てるんだから」

「運命？」

またその言葉だ。

『運命』

それは何を意味する言葉なのか。絶望かそれとも希望なのか

「じゃあ、また会おう」

「ま…待って、空兄あきにい！！」

茜が空に向かって手を伸ばしたそのとき、一陣の突風が彼女の視界を遮った。それと共に、彼女の意識は薄れていった。

次に茜が目を覚ました場所は、見慣れたベッドの上だった。すぐ目の前には人の顔があり、慌てて後ずさる。温ほだった。

「な…なんで？」

そのとたん、昨夜時分の身に起こったことが脳内を駆け巡る。最後に覚えているのは温が必死の形相でこちらに駆け寄ってきたことだった、それから以後の記憶はない。

温は茜のベッドに突っ伏したまま眠りについていた。

辺りを見回すと、そこは茜が生活しているマンションの自分の部屋だった。見慣れた天井に、机、丸テーブルの上にはプリントや教科書がごちゃ混ぜになって散乱している。

「帰ってきたの…？」

とたんに、じわりと涙があふれてきた。そして、しばらく物思い



に浸っていると、ぴぴっと電子音がした。

『アカネ』

S I K E の声だった。茜はベッドから降りると、自分のカバンを探し出しそこに入っているノートパソコンを開いた。

「サイ、私たちあそこから抜け出せたんだね」

『ええ、一時はどうなることかと思いました』

ディスプレイ上にはいつもと同じように「<sup>フサイ</sup>」のロゴマークがあるのみだった。

「ここまでは、温が運んでくれたの？」

『おそらく、その可能性は90%以上です』

「…どうして、パーセンテージなの？」

『バッテリーの消費が激しかったために、一時スリープモードに入っていました』

「あ、そう」

見ると電源ボタン横のランプが赤くなって点滅していた。

『付属のコンセントにつないでください』

そういわれた茜は、空から送られてきた箱を漁り、中からコンセントコードを取り出した。その片方をPCに繋ぎ、もう片方を机の裏にあるコンセントに差し込んだ。

『そういえば茜、顔色が悪いですよ。体温も3.5度上がっているようです』

「え……？あ……」

S I K Eにそういわれたとたん、茜はふらついて床に手をついた。頭がぼうつとして、のどが焼け付くように痛い。もう6月なのに背筋がぞくぞくするほど寒かった。

明らかに風邪の症状のオンパレードだった。

自分の格好を見ると、Tシャツに体操着代わりにしているジャージのズボン姿で、髪は濡れきっていた。どうやら温が着替えさせてくれたらしいが、茜は何だか複雑な心境になった。

（「とりあえず、シャワー浴びなきゃ」）

そろそろと、眠っている温を起こさないようにタオルとパジャマを引っつかんで部屋を出ようとした。けれども

勢いよく玄関のドアが開く音がして、茜は身構えた。しばらく耳を済ませていると、千鳥足のようなおぼつかない足取りでこちらへ向かってくる。そして茜の部屋の前でぴたりと止んだ。

そして、

「やつほー！ー！ー！！あかねえ、元気ー？」

「お…お母さん！？」

そこに立っていたのは、茜の母親であり、糸伊原家の大黒柱である糸伊原万樹まきの姿だった。長い黒髪に整った顔立ちは茜そっくりで、今は化粧をして体にぴったりとフィットした黒いスーツという仕事着姿だった。頬は赤く染まり、明らかに呑んでいる。

「なによ、そのシケた面はあ？」

そして、酒豪にもかかわらず酒乱の気もある万樹は、絡み始めると止まらない。

「お…お母さん、またこんな時間まで飲んだの？」

「おうよー！今日も接待で忙しかった！っちゅーねん！！」

「ち…ちよつとー！！ご近所迷惑だつて！」

マンションは一軒家とは違いご近所付き合いが特に密な空間でもある。ここで波風を立てられたらたまったものではない。

「……ん」

後ろの方で音がした。茜が恐る恐るふり返ると、温は目を覚まして万樹の姿を呆然と見つめていた。

「どうしたのあ？あかね」

まずい

非常に、果てしなく、とてつもなく、まずい。

おそらく熱がでていたくても、ふらつきたくなるような状況だ。

「…って、え…？あ、あああああああああっ！！！！」

万樹は茜の静止を振り払って、ずんずんと温のほうへと近づいていく。

）「あっちゃあ（

茜はその場に倒れこみたくなるのを必死にこらえた。

はじまりのおわり(後書き)

影の主人公(え!?) こと万樹さん登場!!の巻でした

## 夏風邪

万樹は温はるの襟首をむんずとつかむと、これでもかというくらいがくがく上下に揺さぶった。

「おのれえええええ、この野獣めが!!、こんな時間にうちの茜になにしてやがるてめえええええっ!!」

「ま…まきさつ…!、お…落ちつ…」

「これがおちついていられるかあっ!!」

「おおおおおお母さん!?!」

万樹は熱を出してふらふらな体をおして、万樹を止めにかかる。

当の温はるというと、起き抜けに襟首をつかまれたショックからか白目をむいていた。

「こんの、色情魔があああ!!」

明け方の密室に年頃の男女がふたりきり。(しかもひとり睡眠中)

この状況を鑑みるに、万樹が何を想像していたのか茜はわかる気がした。

万樹と温の折り合いは、正直言ってあまりいいものではない。万樹いわく「あいつに似ていて憎たらしい」などと実の甥に対して身

も蓋もない発言をしている所から見ても、あまりいいものではないのだろう。あいつというのは、彼女の実の兄である冬麻のことである。――

つまりは兄弟の間の不仲が甥との間の仲をこじれさせていったといつてもいい。

「おかあさん！おちついて！お隣の草壁さん朝が早いって言うてるでしょ！？」

「あんたも！男を見たら狼だと思えていつも言ってるでしょ！？ああ、嘆かわしい、こんなやつに…こんなやつにい…っ！」

ぎりぎりぎりぎりぎりぎり

馬乗りになって体重を乗せている分、温ほの顔色がどんどんうすうすくなってゆく。いよいよ危ない。

そのとき、茜の部屋の扉がゆっくり開いた。向こう側に立っていたのは、長い髪をうなじの辺りで結いか細い手には近くのコンビニの袋を提げていた。

「あらあら、まあまあ」

いつものように、首を30度ほど傾げながら困ったように微笑んで見せた。

「万樹ちゃんったら、こんな朝早くからハッスルしちゃったらだめでしょ？」

「な、な、な、夏代お！！あんた自分の息子の手綱位握ってなさいよおお！！！！！！」

「あらあら、まあまあ」

もう一度首をかしげて和やかに微笑んで見せた。それだけでこれまでのどたばたした空気が一気に柔らかくなる。

「万樹ちゃん、顔が赤いわよ。呑んでる？」

夏代は万樹のもとにかけより、頬をなでる。それに気を取られた万樹は手の力を緩めたので、温はるは咳き込みながら這うようにして逃げ出した。

「昨日の夜遅くに温くんから電話がかかってきて、茜ちゃんが熱出してるとっていうから、始発のバスに乗ってきたのよ。途中コンビニでゼリーとかスポーツ飲料とか買ってきたんだけど」

「すみません、とりあえず今はお風呂に入りたくて」

「え…あらあら、まあまあ！髪の毛ぬらしちゃって！！！！」

そばぬれた茜の黒髪を見て、夏代は肩を支えてやりながら言った。

「熱って…茜？」

ようやく正気に戻った万樹がおそろおそろ問うた。

「万樹ちゃんは今日はお仕事おやすみ？」



今日は土曜日で学校は休みだった。

「え…、いや昼から出勤だけど」

「じゃあ、自分でベッドにもぐりこんでね。シャワーは茜ちゃんが先だから」

そう言いながら茜を部屋から連れ出し脱衣所へと入る。ぴったりとくっつくようにして歩いた夏代の体はとても冷たかった。

「お母さんに、心配かけちゃったかな…」

「え？」

「お母さん、今日も仕事なのに私が風邪なんか引いたせいで、「休む」なんて言い出さないといいんですけど…」

熱に浮かされたように、小声でそういうとあわてて茜は手を振った。

「あ、その…!!すみません!夏代さんもこんな朝早くに来てもらって…」

「…うつん、そんなの全然苦じゃないわ。それよりも熱が上がってきてるみたいだからさささっと流すくらいでいいと思う。ドライヤー待機して待ってるわね」

そう、いつものような朗らかな笑顔で茜の頬を撫でると、脱衣所の戸を閉めた。

「…」

夏代がリビングへと向かうと、温がソファにイスを座りながらテレビのニュース番組を見つめていた。外はもう明るくなっており、カーテンから差し込む光は柔らかかった。昨夜から降っていた雨はもう止んだらしい。夏代がリビングに帰ってきたことに気付いた温はソファから立ち上がると、廊下へと続くドアノブに手を伸ばした。

「温くん」

「帰るよ。母さんがいれば十分だろ？」

「…温くん、心配したのよ、何の連絡もよこさないでいきなり茜ちゃん倒れた、なんて電話してくるから」

消え入りそうな、それでいて凜とした声色だった。

「…「じゅん」」

温はポツリとそうつぶやいて、ドアを閉じた。かしやりという金属の触れ合う音と共に彼は扉の向こうへと消えていってしまった。

「きょうは私もここにお泊りするわね」

ぶおおおというターボの回転音を響かせながら夏代は言った。シ

ヤワーからでてきた茜の髪を乾かしていた。腰までもある長い黒髪は乾かすだけでもそれなりの労力を要する。

「え！？そんな悪いですよ！」

「そんな、気にする必要はないのよ。冬麻さんはお仕事が忙しいから当分職場泊まりでしょうし、温君もそうしたほうがいいって」

タオルを当てながら丁寧に乾かす夏代の姿はかつて自分があこがれていた「母親」そのものだった。いつも感じていた。どうして自分は「ひとり」なのだろうか。幼稚園の時だってただの一度も自分で迎えに来てくれたことは無かった。いつも空まかせて仕事、仕事、仕事。茜が物心ついたころからそうだったので今更変えようとは思わない。むしろ茜は万樹のことが好きだ。仕事もバリバリできるし、世に言うキャリアウーマンを地で行ってるタイプだ。性格もさばさばしていて話していて楽しい。けれどもどうやら茜自身の求めている「母親」とは別のものであるらしい。

「はい、乾いたわ。待っててね。今おかゆ作るから。それともおうどんのほうがいい？」

「いえ、おかゆでお願いします」

「了解」

夏代は親指を立てると、ふんふん鼻歌を歌いながら廊下の向こうへと消えていった。

枕もとの時計を見ると、朝の7時を少し過ぎたくらいだった。今日は土曜日で休みなのが不幸中の幸いというべきか。それともせつ

かくの休日がこうして風によって潰されるのを最悪と見るべきか。

とにかく今は休みたかった。

夏代の用意してくれた氷枕に頭をつずめると、茜はゆるゆると目を閉じていった。

たいせつなひと

わたしのたいせつなひと

わたしのたったひとりのひと

わたしのたったひとつのせかい

かんけつし、へいさしたわたし「たち」のせかい――

そのせかいはわたしたちだけのもの

そのせかいはだれにもこわせない

けれどいつもおびえている

いつか――それは「こわれて」「しまつものだから

## 誰かの記憶

ふわふわとした浮遊感が体を支配していた。なんだか、ジェットコースターに乗っていて坂を急降下するときのあの独特な感覚だった。

目の前を見たことの無い女の子が走り去って行く。ブラウンの混じった髪をツインテールにして赤いリボンがゆらゆらと揺れていた。年のころは5、6才といったところだろうか、可愛らしい仕草で両手を勢いよく降り、駆けてゆく。

(「だれ…?」)

茜は目を凝らして女の子が走り去った方向へ体を向けた。

そこに立っていたのは、夕陽に照らされて手をつないで歩く女の子ともうひとり見覚えのない少年の姿だった。年が離れているのだろう、身長が女の子の倍ほどもあり、意志の強そうな瞳が印象的な端正な顔立ちをしていた。

女の子は快活に笑いながら、手にしていた物を少年に向けて指し示した。

(「うさぎのぬいぐるみ…?」)

いや、はたしてウサギといえるのか怪しい代物だった。耳は左右の長さが全然違っていたし、目の位置も大きさも左右対称とは程遠いものだった。腹からは綿が飛び出し、口は半開き。そう、今にも「きしゃー！ー！」と言って襲い掛かってきそうな恐ろしいシロモノだ。

けれど女の子はそれをまるでかわいらしいものでも見るようにうっとりとした表情で見つめ、はにかみ笑いを見せた。少年もそれに釣られて微笑む。

微笑ましい光景だった。夕日に照らされた細長い二つの影が遠くまで、遠くまで伸びていた。

（「あれ…？」）

どうしたのだろう。あわてて自分の頬に触れてみる。驚くほど熱かった。目尻から涙が溢れ出していたのだ。

（「どうして」）

ぼたりぼたりと、なんのためらいもなく流れ始めた涙は留まることは無かった。

ふと、女の子がさりげない仕草でこちらを振り向いた。そしてうさぎもどきのぬいぐるみをきゅっと握り締めてゆっくりと手を振った。

ばいばい

そういつている気がして、茜は駆け出す。

「待って！！」

なぜか、知っている気がしたのだ。

あの女の子のことを。

「待って!?!」

「はいはい、いつまででも待ちますよ」

茜は自分がベッドに横たわっていることに気付くと、横に居た人影に気付いた。夏代だ。

「体の具合、どう?」

「え…?、あ、はい。前よりは随分楽です」

眠って少し汗をかいたせいだろう、のどにまとわりつくような妙な痛みは薄れていた。

「そう。何か飲む? スポーツドリンクなら買ったのがあるわ」

「いただきます」

待っていてね、と一言おいてから、夏代は立ち上がり扉の向こうへと消えていった。

茜はため息をつきながら天井を見上げていた。ここ数日間に自分の身に起こった様々なこと。多分それは空あそから託されたAI-SIサKEイキがすべてを握っているのだろう。

自ら「考え」そして「行動」するAI-人工知能

the Superlative Intelligence  
that have Knowledge of Everything  
ing

『すべての知識を有する最上の知能』

——それが、サイキS I K E

(「…だめだ」)

考えれば考えるほど頭が回らない。大分症状は治まってきたとはいえ、体は本調子ではなかった。

そうこうしているうちに、夏代がリビングから戻ってきた。手の上の盆には茜愛用のマグカップと湯気の立ったお椀が載せられていた。

「おかゆ、食べれる？」

気を利かせて持ってきてくれたのだろう。そういえば昨日の夕方から何も口にしていなかった。

「…頂きます」

茜は体を起こすと、マグカップを手に取る。

「あの、お母さんは？」

「ああ、二日酔いで真っ青な顔のまま仕事に行ったわ。通勤途中で飲んでねってウコン渡しといたけど…」



「…まったくお母さんってば自分の限界も知らないで飲み続けるんだから。あの、温はるは？」

「ああ、帰ったわよ。いつもながらそっけなく、ね」

空になったマグカップを夏代に手渡すと、熱々のおかゆの入ったお椀を受け取った。

「…食べさせてあげようか？」

「…ぶっ！..！」

おかゆを噴出しかけた茜は何とかこらえて夏代のほづを見る。いつものように首をかしげて微笑んでいた

「あらあら、まあまあ」

茜は耳まで真っ赤にして首をぶんぶんと振った。夏代はその様子が新鮮でたまらないらしくくすくすと笑う。

「ねえ、茜ちゃん」

「は…はひ」

「やっぱり、うちで暮らそうっ？」

その言葉に改めて茜は夏代のほづを見つめた。

「私、心配なのよ、今日みたいにいきなり風邪なんてひいたらって

思つと…」

「だっ…、だけど」

「万樹ちゃんも、万樹ちゃんだわ。自分の娘が熱出してるといふのに、仕事に出ちゃうなんて…あれじゃあ、」

「あのっ…!!」

その先を言わせまいとして茜は声を張り上げた、しかしその反動からか気管に空気が入り咳き込む。慌てて夏代が背中をさすってくれた。

「大丈夫!？」

「だ…だいじょうぶ…です…ごほっ…!!」

わかっている

夏代は悪気があつて言ったのではない。ただ茜自身のことを心配してそれで…。

けれど茜は聞きたくなかった。自分の母親の悪口など。

ぐうたらで、親としては失格かもしれないが、茜にとって「母親」いや、「家族」といえる存在は万樹ひとりなのだから。

あらたなはじまり（前書き）

今回はあの人の素顔が明らかに！？編です（どんなだ）

あらたなはじまり

東京霞ヶ関合同庁舎

「……………それで、茜ちゃんは大丈夫なのかい？」

男の声は低く、それでいてどこか落ち着いているものに聞こえた。

『お薬飲んで今は眠ってるわ。熱も大分下がっているみたい』

男は後ろの壁に寄りかかりながら、左耳に当てていた携帯電話を右耳に当てなおした。

『それで……心配だから、今日はこっちに泊まるうと思うの。冬麻さんと温ほくんには悪いんだけど……』

「いや、実を言うと僕も今日は仕事で帰れそうになくてね」

目の前を行きかう部下の姿を見ながら男―冬麻は答えた。

「……そうなの？」

「うん、担当の部署が変わったってこの前言っただろっ？引継ぎやらなにやらで忙しくてね」

『そう……』

電話の向こうの女性―夏代は少し落胆したかのような声を出した。それを聞いた冬麻はくすりと笑った。

『何?』

「いやあ、かわいいなあって思ってたね」

その言葉が発せられた瞬間、ダンボールを持って右往左往していた部下たちが一齐にこちらを向いた。おそらく、「ノロけている暇があったら手伝え!!!」とでも言いたいらしい。

『…冬麻さん?』

相手が無言なのを不審がったのか、いぶかしげな様子で夏代が問うた。

「ん…? いや、何でもないよ。そういうわけだから、しばらく夕飯は要らないかな。茜ちゃんのこと、よろしくね」

『ええ。それじゃあ、仕事中に失礼しました』

「うつん、僕も休日サービスできなくてごめん。じゃあ」

冬麻はそこまで言うと、携帯電話のボタンを押して一息ついた。そしてため息を一つ。これから起こる何かに備えようとも言うつようつに。

「課長」

「うつん?」

「課長」それは最近自分についたあらたな職場での呼び名だ

った。

「先ほどから…その、例の方がお待ちになっておられますが…」

「ああ」

冬麻は微笑を崩さないまま踵を返して、オフィスの更に奥の部屋へ続くドアノブを握り締めた。

そして一つ深呼吸

意を決して開けたドアの向こうには大きなマホガニーのデスクが一つ、それに来客用と見られるソファールとテーブルが並んでいた。部屋の中にいた人影はあきらかに客人であるにもかかわらず、この空間の主のみが座る、デスクの大きなイスに腰掛けていた。

その人物は足を大胆に組み、スカートから覗く美しい曲線を惜しげもなく晒していた。胸元の開いたスーツはそれだけでも目を引くが、憂いを帯びたその表情から察するに顔立ちはまさしく「美女」というに相応しかった。

「……万樹」

「やつほお、兄貴。……いや、」

朝日を背に受けて、万樹はどこか誇らしげに言い放つ。

「公安庁『第3部』課長殿、とお呼びした方がよろしいかしら？」

どこかそぐわれない慇懃な態度に、冬麻は表情を曇らせた。

「……さすが、君の『仕事』は情報が命なだけあるね」

いつもとは違う鋭く、冷たい声音。しかし万樹はひるむことは無い。

「遅くなっただけけど、『第3部』立ち上げおめでとう」

「それはどうも」

力の無い兄からの返事に万樹はわざとらしく肩をすくめて見せた。

「ああ、実の妹からのめったにない祝福なのに、喜んでほくれないのかしら？」

からからと万樹は笑う。

「ーそう、本当に思っているのならそこからどいてくれないかな？」

冬麻がそういうと、万樹はありとあっさりイスから退いた。そのさい揺れるようにして彼女の周りの空気が冬麻のほうまで巡っていく。

「…相当飲んでるね？」

「まあねー。この仕事やってればそういつ付き合っても多いってことよ」

ふんふんと鼻歌交じりに懐からウコン飲料を取り出すと、一気飲みし始める。冬麻はそれをただただ見ていた。

「しっかし、驚きね。兄貴が新部署を立ち上げるなんて。・・・しかも非公式の。上も渋ったんじゃない？」

「さあ、どうだったかな」

冬麻はあいまいな調子で答えた。

冬麻―海棠冬麻かいていふゆいは、もともところ、公安調査庁の公務員―つまりは公安調査官であった。公安調査庁とは一般でいうところの公安警察とは違い、法務省の下部組織であり、その活動目的は「日本に対する治安・安全保障上の脅威に関する情報収集」となっている。その活動内容からは日本の「スパイ組織」といわれることも多いが逮捕権は無く、あくまでも情報の収集がその行動範囲である。しかしそうであっても集める「情報」が「情報」なだけにきなくさいところに首をつっこむことも多々ある。また、現在の所部署としては、総務部・調査第1部・調査第2部が存在している。

冬麻は当初は公安調査庁に6年ほど勤めた後、上層部の決定で去年度まで同じ情報組織である内閣情報調査室に出向していた。そのうち辞令が出て再度こちらに勤めることとなったのだが、その折冬麻は今年度からあらたに”立ち上げられる”こととなった調査第3部―つまり『3部』の課長として抜擢されたのだ。

もとより、調査官としての優秀さは他と比べても群を抜いており、その物事を見極める観察力とすばやく的確な判断力を『上』は高く評価していたのだ。

「どうだった、CIRROサイロの居心地は？」



万樹はさして興味もなさそうに聞いた。

サイロ  
CIROとは内閣情報調査室(Cabinet Intelligence and Research Office)の略称である。

「――悪くは無かったよ。けどこちらの状況が『上』に筒抜けだったからね、そこはあまり気分のいいものじゃなかったかな」

「ふうん」

万樹は自慢の腰まである黒髪を撫でると腰に手を当てた。これは彼女が相手に対して威嚇する時の格好でもあった。

「さて、本題に入らせてもらおうわ」

「どつぞ」

諦めにも似たため息をつきながら冬麻は短くため息をついた。

あらたなはじまり（後書き）

長くなりそうなので二分割します。

## あらたなはじまり2

「例のAIのこと、どうして黙っていたの？」

それは感情を極力押さえつけた声。しかしそれは必死に隠している怒りそのものを現しているようで威圧感があった。

「AIIとは？」

「あなたの息子、海棠空かいとうあめきが開発したAIよ」

「ああ」

冬麻ふゆあしは一人合点がいったように頷くと、来客用のソファソファーに腰掛けた。万樹もそれをみてか、どっかりソファソファーに座る。

そして懐から煙草とライターを取り出すと、目で何かを探した。

「灰皿なら無いよ」

「あら、煙草やめたの」

少々意外そうな目で兄のほうを見た。

「このまえ夏代さんに煙草の害についてのありがたーいお説教を1時間半聞かされたところだね」

それを聞いた万樹の顔は明らかに”お気の毒様”という哀れみの表情が見て取れた。彼女は煙草を懐にしまうと、もう一度足を組ん

だ。

「空そらからの何らかの接触があれば、私に連絡する——これは『約束』だったはずよ」

「さあ、どうだったかな？」

冬麻がおどけて見せるのを見て、万樹は体をふるふる震わせながら拳を握り締めた。

こういうところが、昔から気に入くないのだ。兄弟げんかをひとたび起こせばうまく立ち回り、自分に非があったことなどおくびも見せない。

「空そらがあんたの家にAIを送り込んだことは知ってるわ。そして…  
賽さいが投げられたことも」

「もしかしてそれって『サイキ』にかけてる？」

「——茶化さないでくれるかしら。知っているんでしょう？茜がAIを解き放してしまったことを」

「さすが情報が早いなあ」

お得意の冬麻の微笑みに万樹は薄ら寒いものを感じてしまった。やはりこちらを牽制しているのが見え見えだった。

「ま、そうなることは君も想定していたことだろう？」

「あんたが、自分の息子の手綱をにぎってないから——ということに

なるんでしょうが!」

半ば、いらいらしながら無意識の内に懐を探っている自分に気が付き、やめる。

「息子といつてももう立派な大人だしねえ」

違う。

万樹にはわかった。冬麻は「息子とはいつても所詮は他人だ」といいたいのだ。

冬麻はそういう人間だ。「自分」と「他人」の境界線をきっちり決めている。たとえそれが「家族」であつたとしても。

情が無いわけではない。彼は妻の夏代を愛しているし、二人の息子にも愛情を注いでいる。しかしそれは現状が平穏だからだ。

いざというときはすっぱりと「切る」ことが出来る。しかし、それは自分のためではない。もっと大きなもののためだ。

それは自分を犠牲にすることと同時に他人をも犠牲にすることだ。そこが、彼がこうしている仕事をしている所以ゆえんなのかもしれない。

「まあ、いいわ。もともと味方ってわけでもないしね」

「冷たいなあ」

「もう一つ聞きたいことがあるの」

「何かな？」

万樹はあざとらしいものを見るような目つきで兄を見た。

「柴崎コンサルティング会長逮捕の一件よ。あれ、あんたの差し金でしょ。」

「人聞き悪いなあ」

にこにこ笑顔を絶やさないうまま、背もたれに体を預けた。

「マネーロンダリング資金洗浄、賄賂、盗聴、ヒューミント、エトセトラ…、けれど警察は今一歩逮捕に至るまでの確実な『情報』をつかんではいなかった」

「よかったの？あの会社、たしか警視庁上層部ともつながっていたはずだけれど」

「『トカゲのしっぽきり』だよ」

「成る程ね」

万樹は兄の顔を見た。表情の変化は見られない、しかし、先ほどまでとは違い強い瞳がこちらを射抜いていた。

「今度はこっちが聞きたいね。逮捕の一件にどうして『我々』が絡んでいると？」

「昨日の接待相手をご丁寧に教えてくださったのよ」

「…差し支えなければ、その『相手』を教えてもらえるかな。君のことだから海外の情報網だよな。アメリカ？それともヨーロッパ？」

相手から情報を引き出した以上こちらからも、何かしらの『見返り』を返さなければならぬ。それはこの世界の暗黙の了解でもある。

万樹はため息を一つつくと、右手を差し出し親指と人差し指で円形を作って見せた。しかしそれは完全な環ではなく、親指と人差し指はつながっていない。―それはあるアルファベットを象っていた。

「…驚いたな。英国<sup>イギリス</sup>か。しかもS I S長官直々の来日とはね。さすがに大仕事なわけだ」

「おかげで昨日は一晚中付き合わされたわ。今の長官殿は稀に見る酒豪だね」

二日酔いの残る体を引きずってここまで来たのだらう。さすがに疲れているようで、目の下には隈が見えた。

先ほど万樹が作って見せたアルファベット、-「C」は英国の諜報機関、イギリス情報局秘密情報部（Secret Intelligence Service）通称S I Sの長官を表す符牒だ。S I Sは小説や映画などの影響からかM I 6 -（Military Intelligence section 6）の方が通りがよいが、こちらは旧称であり現在の呼び名としては正しくない。

「C」とは、S I Sの創設者の一人であるマンズフィールド・ジョージ・スミス「カミングの暗号名であり、書簡における彼のサインとしても知られている。現在でも彼に敬意を表して、代々のS I

S部長は暗号名「C」を踏襲しているわけだ。

「柴崎は英国のテロ組織との金銭面でのつながりがあった。まあ体悪く言えば武器密輸の悪玉ってわけ。それに英国も目をつけていたのよ。でもまあ酒の席で部外者にぼろっと漏らすくらいだからたいした組織じゃないんだろうけどね」

「ふうん。どうしてSISの長官殿がお忍びで来日したのか聞くのは無粋だよな」

「当たり前でしょう。観光だとも思っただ？」

「まさか」

大げさに肩をすくめてみせた冬麻を醒めた目で見た後、大きく伸びをした。

「さて、要件はざっとすませたし、帰るわ。夏代によろしくね」

体にぴったりとフィットしたスーツの襟を整え、万樹はドアノブに手をかけた。

「まあ、せいぜい足元をすくわれないように気をつけることね」

そのような言葉を残して、ふり返らないまま扉の向こうへと姿を消した。それを見届けた冬麻は長いため息をつき、つぶやいた。

「早速すくわれかけているぞ」

誰も聞くことの無い言葉を吐いた後、立ち上がると自分のデスク



の上につままになつていた、「スーパーウコン飲料XXX!」  
これで二日酔いなんか吹っ飛ばせ」と書かれた毒々しい色の空き缶を  
ゴミ箱に放り込んだ。

あらたなはじまり2 (後書き)

ウコン飲料のネーミングは、ニフィーリングです(笑)

## 素敵なスポーツ

「帰られましたか」

自室からようやく出てきた冬麻を待ち構えていたとばかりに、20代半ばの青年が声をかけた。人当たりのよさそうな顔立ちに、肉中背のすっきりとした体つき、格好はというと、スーツの上着は着ておらず、真っ白なシャツをひじの辺りまで捲り上げていた。

「ああ、我が妹ながらおっそろしいよ。全く」

20代の息子がいるとは思えないほど若々しい彼は、この10分ほどでいくらか老け込んだようだった。

「…あれが課長の妹さんですか。…お綺麗な方ですね」

「……めずらしいな、お前が女性を褒めるなんて」

「ひどいですね、僕は女性に対して素直なだけです」

そう返事をして見せた青年―津原遊馬つはらゆうまを疑わしい目で見たと冬麻は、ため息を一つついて、そのあとに続く報告を待った。

「……『R』が動きを見せ始めました」

「『彼』が日本にいるのか」

「はい。昨日所属不明のヘリが都心を飛行していたそうです。…

…おそろくは…」

「そのことを万樹らは知っているのか」

「あちらはこちらよりも欧米や欧州圏の情報網に顔がききますからね」

それでいてわざわざ公安庁に顔を出したということは、万樹の所属する「組織」も牽制する必要があったからだろう。「彼」との接触をはからないために

「それと警察からの連絡事項です。昨日逮捕された柴崎渉の身柄を数日こちらが預かることを了承することです」

「毎度ながら返事が遅いことだ」

そう、冬麻は今回の「アヴァロン」の一件に際して、『情報』を与える代わりに『見返り』を求めた。――この一件の渦中の人物、柴崎コンサルティング会長・柴崎渉の身柄である。容疑者を警察以外の組織が拘留するというのだ。超法規的といわざるを得ない。しかしこの見返りを求めるのはこの世界の『掟』だ。

「引渡しは明日の朝とのことです。昼から事情聴取ができるよう段取りをしておきましょうか？」

「ああ、頼む」

一介の情報組織であるこの公安調査庁にこの「第3部」が創設したいきさつは、いくつかあるが、その最たるものはやはり「日本政府の諜報組織活動の拡大」にある。国際関係が不安定となっている現在、日本は情報機密の点でいえば遅れた存在であり、人的諜報、ヒューマン

機器的謀報シキョウどれをとっても欧州・欧米や他の先進諸国とは比べるべくも無いのが現状だ。

そこで日本の情報組織の一端を担う法務省公安調査庁に試験的に運用が決定したのが、新たな部署・「第3部」なのである。

日本政府が内々に作り上げた部署であるだけに不明瞭な組織アンノウンであり、その不透明さから日本のM I 6といってもおかしくはないかもしれない。

遊馬ユウマがおそろおそろといったように、冬麻に話しかけた。

「あの、息子さんのことですが」

おそらく空あきのことだろうと察した冬麻は先を続けるよう促した。

「消息が西海岸のサンフランシスコで途絶えています。『R』も彼を完全にロストした模様です」

「そうか」

実の息子のことだというのに、顔色一つ変えはしない。ただ深く考え込んだ。

「…件くだんのAIについてですが、彼女の様子はどうです?」

彼女とは「茜」のことだろう。

「夏代から容態を聞く限り、ただの風邪だそうだ。安静にしていれば大丈夫だと」

そうですか、と短く返事をした彼はどことなく落ち着かない様子だった。

「その…、本当なんですか？彼女があ…」

未だ信じられない現実を突きつけられたように、目が明らかに泳いでいた。

「津原、この仕事についてどれくらいになる？」

「え！？ああ、ええと、大学卒業してからだから、4年…ですかね」

「慣れるまで10年はかかるぞ、この仕事は」

「…課長は、」

津原が何かを言おうとしているのを耳にした冬麻は人当たりのよい笑顔を向けた。

「…ん？」

「課長にとって、この『仕事』とは何なのですか？」

それを聞いた冬麻は、あくまでも人のよい笑顔を浮かべたまままで答えた。

「そうだな、私にとってこの仕事は『素敵なスポーツ』かな」

それは、冬麻自身も深く敬愛する、ある軍人の残した言葉だった。

「…引越し作業に戻りますね。今日中にPCをネットワークにつ  
ないで置かないと、誰もここが情報組織だってわかりっこないです  
から」

そう冗談を言い放つと、遊馬は忙しく動き回る部下たちに混じり、  
作業を再開した。

冬麻の手元には彼から手渡された書類だけが残った。それを見た  
冬麻はおそろおそろ口を開くとつぶやいた。

「……………アオイ」

## 夢の境

また、夢を見た。

私が幼いときのゆめ。

何時だろう。原体験の記憶とでもいうのだろうか、おぼろげで、とらえどころのなくて、はっきりとした映像が浮かんでこない。

そのかわり、とても胸のうちが熱くなるのだ。

茜がふと目をさますと、そこはいつもの自分のベッドの上だった。熱も引いたようで、体には運動後のような疲労感だけが残っていた。首を右に巡らせると、そこには健やかに眠りにについている夏代がいた。枕もとの時計を確認すると、ちょうど夜中の3時を回ったころだった。

のどの渇きを覚えた茜は、夏代を起こさないよう細心の注意を払いながらベッドから降り立ち、そろそろとドアの方へと向かう。ずっと寝ていたせいか体が思うように動かなかった。

リビングへと入ると、キッチンに入り冷蔵庫を覗く。夏代が色々と買い揃えてくれたのだろう。食材がこの前より増えていた。

スポーツドリンクのペットボトルを抜き取ると、コップに注ぎ、一気に飲み干した。



「ぶはあー」

生き返る、そう感じた。一昨日起こったことを考えればあまり洒落になっていないが。

そういえば、夢を見た気がした。

懐かしく、それでいて初めて見るような夢。

しかし殆どの場合そうであるように、どのような夢だったかは記憶には無かった。

（「夢といえば…」）

昨日見た夢のことを思い出す。空兄あきにいの夢。

いつも見るようなとらえどころの無い夢とは違い、はっきりと覚えていて。彼の体温も匂いも、そして周りに広がる草木の揺れる音や光…全てを。

あれはなんだったのだろうか。

まさか現実を起こったことだともいうのだろうか。

（「茜、きみはひとりじゃない。それを忘れないでいれば、大丈夫。「運命」にだって勝てるんだから」）

「運命…」

そういえば、昨日会った青年、アオイはこうも言っていた。

（「そう、運命。何万という道に枝分かれしていようとも、僕と君が出会うことは『運命』なんだ」）

運命

それは曖昧で明確な答えを与えるのを拒否しているかのような言葉だった。

（「ばつかじゃないの」）

月並みな言葉かもしれないが、未来とは自分で切り開いていくものだ。運命という言葉を用いることそのものが、茜にはあまり好きにはなれなかった。

イライラとした気持ちを抑えようとして、またスポーツドリンクをコップに注ぎ込むと、茜はまた一気飲みをした。

梅雨の時期とは思えないほど晴れ上がった日曜日の朝こと

「でもよかったわね、熱も下がったし」

計ったばかりの体温計に表示された数字を見ながら、夏代は嬉しそうに微笑んだ。

「これで明日から、ちゃんと学校に行けるわね」

そうだった。学校を休まなくてもいいという気持ちとは裏腹に、

貴重な休日を風邪で潰してしまったことになるのだ…。どこか損をした気持ちになる。

「…本当にありがとうございます」

ぺこりとお辞儀をした茜に夏代は首を振った。

「いいえ、珍しく甘えてくれて、私も嬉しかったわ」

その言葉に茜は赤面してしまう。どうしてかむず痒い気持ちだった。

「空も温も男の子だからかしら、母親離れが早くてね。あまり私を頼らなくて寂しいから、つつい茜ちゃんにおせっかいを焼いてしまつたよ」

すこし恥ずかしそうに、顔を伏せがちにして夏代はつぶやいた。

「夏代さん…」

「さあさ、それじゃ着替えましょうか。そのままだと汗でべたべたして気持ち悪いでしょう？」

「あ、はい」

着替えを渡されて、茜はキッチンに朝食を作りに出かけた夏代の後姿を眺めていた。その姿は本当の母親のようで、茜はすこし寂寥感というものを覚えていた。

万樹は土曜日の午前中に出かけたまままだ帰っていないらしい。

仕事だろつとは思うがもしかしたら夏代とあまり顔をあわせたくないだけのかもしれない。

「サイ、起きてる？」

着替え終わった茜は、部屋の片隅でコンセントに繋がれたPCに向かって話しかけてみた。

『充電はもう既に完了しています』

いつものような明るく、綺麗な声だった。

「でさ、あなたには、聞きたいことが山ほどあるんだよね」

『待ちたまえ、ワトソン君』

「…へ？」

『この状況を説明するのは、真に骨が折れるのだよ。だから全員がそろつのを待とうではないか』

「何その台詞…」

どことなく、楓子の芝居がかった口調に似ていなくも無いが。

『知りませんか？アキから教わったのですが』

「…ああー！」

そういえば、昔空の部屋に『コナン・ドイル全集』置いてあった

ことを思い出し、一人合点がいった。

(「…って、何教えてんのよ…空兄」)

PCに向かって真面目にシャーロック・ホームズの台詞を吹き込んでいた空の姿を思い浮かべて、少々情けない気持ちになる。

父親にしてこの子あり、といった感じだろうか。

「…サイって、あきに空兄が作ったんだよね」

感慨深げに

『…作ったのではありません』

「え?」

『「再生させた」のです』

「!?!」

その言葉を聞いて、ますます昨晚の夢が現実味を帯びてきた。その空は言った。SサイキIキKキEは『再生させた』のだと

「それってどういうこと?」

『…わかりません。私も海棠博士からそう教わったばかりです。けれど…』

「茜ちゃん」

ドアの開く音と共に夏代がひよっこりと顔を出す。茜は慌ててPCを閉じて、作り笑いでふり返る。

「朝食作ったけど、食べる？」

「え…、ええ。頂きます」

茜は立ち上がり、夏代のあとに続いて部屋を出た。

リビングの食卓にはほかほかの湯気を立てた朝食が並べられていた。学生でしかも朝は殆どひとり朝食を取っている茜は工夫の凝らされた和朝食に軽く感動を覚えた。やはり持つべきものは料理上手な女性なのだろう。

「お嫁さんにしたい女性NO1…」

「ん？」

「なっ、なんでもないです！」

茜は首をぶんぶん振り、箸に手を伸ばすと手を合わせて小さく「いただきます」とつぶやいた。

夏代はにこにこ笑顔のままどうぞ、と優しく薦めてくれた。

朝食のメニューは、塩ジャケ、ご飯、味噌汁、ほうれん草のおひたし、漬物…といった理想的なまでの和食。しかも味はお墨付きだ。

「このおひたし、おいしいです！」

香りのよい独特の風味が口の中に広がる。まさしく絶品だった。

「そうでしょ？鹿児島産の黒ゴマを入れてみたの。温君も気に入ってくれていてね、この前なんかボール一杯平らげちゃって」

ボールを前におひたしをがつつく温ほる…。不気味というか何と  
言うか。

『……次のニュースです』

テレビの方に注意を向ける。丁度、朝いつも見ている情報番組のニュースが流れているらしかった。

『一昨日、都心の高層ビル『アヴァロン』オーナーの柴崎コンサルディング会長・柴崎涉容疑者が脱税の疑いで逮捕されました。これに伴い、家族連れでにぎわうはずだった今日は急遽シヨツピングモ  
ールを閉鎖し、警察の捜査に入っています。警察の調べによります  
と……』

ぶっ

上機嫌ですすっていた味噌汁を噴出しかける。

「あらあら、まあまあ、大丈夫？風邪がまだ治ってないのかしら」

「いえ、のどに詰まらせただけですから」

テレビの画面を食い入るよう見つめる。

『アヴァロン』

それは、一昨日自分を捕らえていた牢屋の名前でもある。120メートルの超高層ビルであり最先端の武装、セキュリティの施されたビルとして威容を誇っていた。

茜は引き続きニュースに耳を傾けようとしたが、それほどたいしたものではなかったのだろう、すぐに終わってしまった。

(「どづいづこと…?」)

自分が搬送用エレベーターを脱出する時、確かに一発の銃声が聞こえた。それと何か、言い争う声も。それを最後としてアヴァロン内部のことは何も知らない。あの後内部では一体何が起こっていたのか。

わからない

わからない事だらけで、昨日の頭痛をぶり返しそうだった。

朝食を終えた茜は、食器の後片付けを夏代に任せて、自室へと向かった。熱が下がったとはいえ体はだるく、目もとろんとしていた。昨日あれほど寝たというのにまだ寝足りないらしかった。

茜は自分のベッドに倒れこむとそのまま泥のように眠っていつてしまった。



しばらくして目を覚ますと、もう昼が近い時間となっていた。

（「おなか空いたかも」）

空腹で目を覚ましたらしい自分の意地汚さに少々嫌になりながらも、身を起こして立ち上がった。SIKEはというと、部屋の隅のほうでじっとしていた。

いや、「しゃべる」という行為さえなければ、外見上はただのPCなのだ。それだけに「声」だけが「SIKE」を「SIKE」たらしめている。そう考えていると、少しだけ寂しい気がした。

（「あれ…？」）

『寂しい？』

自分は何故そのようなことを考えたのだろうか。

何故SIKEの「存在」を確かなものにしたいのだろう。

わからなかった。

しかし何故かここで、夢の中で空が話していた言葉を思い出す。

「あの子はね、茜と同年位の女の子なんだよ」

もしかしたらSIKEにはモデルとなった人間がいるのかもしれない。

いや、もしかしたら「その子を『再生』しよう」とした結果がS  
IKEなのかもしれない。

いずれにせよ、わからない事だらけだった。

そこまで深慮していると、インターフォンが鳴った。どうやら夏  
代が応対に出ているらしく話し声が聞こえ、しばらくして部屋の前  
を足音が通り過ぎていった。

（「誰だろう」）

万樹だろうか。

そう思った茜はドアを半開きにして半身を廊下に出し、突き当り  
の玄関を覗いた。

・・・そこには、

「温君」  
温君

何故か不機嫌そうな、温の姿があった。

## 最終定理

「あらあ、温君、<sup>はる</sup>どうしたの？」

夏代の間延びした声に答えるようにして温は「ああ」と生返事をした。

「茜は？」

その答えを聞いた夏代は、にやりと笑うと

「なあに？ やっぱり茜ちゃんのことか心配なのね」

底なしに楽しそうな声だった。茜は気付かれないように中途半端にドアから覗き込む。相変わらず不機嫌そうな顔だ。

「熱は下がったのか？」

「ええ。明日からは学校にも行けると思うけど」

温は靴を脱ぐと夏代のほうはお構いなしにずんずんとこちらへと向かってくる。

（「やっぱ…」）

茜は慌ててドアから離れると、ベッドへ飛び込もうとした。

しかし温の足の方が速く、ドアの開く音が勢いよく背後で響いた。

仕方なしに振り返ると、そこにはやはりいつものように不機嫌そうな顔立ちの青年の姿があった。

Tシャツにジーンズといったラフな格好で、肩には外に出かけるときに使うのだろう小さなリュックを背負っていた。

「おい」

「…何よ、ノックぐらいしなさいよ」

「…思ったよりも元気だな」

（「だったら何だっていうのよ!?!」）

温はそのまま断りもせず、どかどかと部屋の中央に置かれている丸テーブルの横に座り、リュックの中身をあさり始めた。

年頃の女性の部屋だとは、もはや思っていないらしい。

しばらくして茜のほうへと向き直ると、床を指差した。どうやら「座れ」の合図らしい。

「?」

茜はしびしび温のほの前まで行くと、素直にその前に座った。

「……見せてみる」

「……は?」

「金曜日にあった数学のテスト、見せてみる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

意味をつかみかねたらしく、茜はもう一度首をひねった。

「数学のテスト、見せる」

沈黙

「はあああああああつ！！！！？？？」

「糸伊原茜 数学2 . . . . 37点」

スコーン

その点数を聞いた茜は気が動転して、丸テーブルの上に置かれていた筆箱で温の頭をしたたかに殴っていた。

「おい！」

「それはこつちが言いたいわよ！なんであんたが私の小テストの点数なんて知ってるのよ！！あんた私のストーカー！？」

「はあ？一昨日お前を負ぶって帰る途中、定期出そうとしてカバンの中身見たら、見てくださいとばかりに乱暴に突っ込んであるから！」

「そつだとしても、こういうときは言わないものなの！！ほんつとくにデリカシーってものがないんだから」

そこまでいうと、今度は温が谷よりも深いため息をついた。

「俺にデリカシーがあるうが無かるうが、一応これでも親切心で来てやったんだぞ」

茜は更に眉間に皺を寄せた。

「お前、2年の初めからこんな点数とってたら、林野に目つけられるぞ。それとも覚えてないのか？明日提出なんだけど」

小テスト・林野先生。数学・赤点・提出

ここから導き出される答えといえば

「あああっ!!」

そうだった、と茜は口を押えて必死に動揺を隠そうとした。しかしバレバレである。温はやっと思いついたかとはばかりに肩をすくめた。

明日は数学2の授業のある日――すなわち金曜日に行われた小テストの「直し」の提出期限でもあるのだ。

茜はあわてて自分の学生カバンをつかむと中身をひっくり返してでてきた一枚の紙切れを食い入るように見つめた。

（「だめじゃん・・・これ」）

やはり何度見ても身の毛もよだつような点数しか表れてこない。

しかも林野が担当する数学の小テストは「小」がつくとは思えないほどの問題量を出すことで有名であり、間違えた問題すべてをやり直すとなると、自力で明日提出できるとはとても思えなかった。

がけつぷちだった。

「だから、いわんこつちゃない」

いつもなら、ムカツとくるはずの温の声も気にならなかった。なぜなら、今彼は自分を救ってくれる唯一の存在であるからだろう。

「…今ならあんたが仏に見えるわ」

「それはどうも。で、どうするの?」

考えるべくも無かった。

「……宜しくお願いします」

「だから、何度言わせるんだよ!そこはこっちの微分公式を使うんだって!」

茜は机にかじりつきながら、頭の中を行きかう数列と壮絶な戦いを繰り返していた。温の説明に納得はするものの、それより先に進むことができない

しかも、毎度のことながら温は人に教える時でさえ、容赦ない。いや、「教える時だからこそ」だろうか。まさしくスパルタだった。

「違う！その問題は教科書に一番最初に載ってる公式で解けるんだよ！本当に授業聞いてるのか！？」

あまりの言い様に茜はむっとしたが、この状況で言い返してもさらにきつく言われるだけだということをよく理解しているので、口には出さずただ目の前の問題に集中するようにした。

そうなのだ。本当であれば、授業をきちんと聞いて、予習復習をして、事前にテスト勉強をしておけば解ける問題ばかりなのだ。それを「苦手だから」の一言では逃げる口実にはなりはしない。

そのとき、部屋のドアがノックされた。

エプロン姿の夏代の姿だった。いつものように背まである長い髪をうなじの辺りでくくり、肩に垂らしていた。

「昼ごはんできたわよ」

夢中になって気がつかなかったが、そういえば家中に夏代の作るご飯のいいにおいが広がっていた。この匂いは、チキンライスだろうか。

茜が必死に懇願の視線を送ると、温は奈落のそこよりも深いため息をついた後、呆れ顔で茜の方を見た。

「いいよ」

どこか投げやりな調子の温の答え方に



「あらあら、まあまあ」

と、夏代はいつもの調子で微笑んだ。

その日の昼食は、夏代の得意料理TOP3に入る、半熟のオムライスだった。絶妙の柔らかさの卵が口の中でとけてゆく感触はまさしく絶品というほかは無かった。

それと、これまた肉のうまみが十分に出ているコンソメスープ。

「はあああ、幸せ」

「病み上がりとは思えないな」

おかわりを頼んだ茜を見て、温は率直な感想を漏らした。

「悪かったわね」

「温君、おかわりは？」

「いや、僕はいいよ」

リビングのテレビが、お昼の料理番組からニュースへと切り替わった。

「休日の今日、大勢の人手で賑わうはずだった、都心有数のショッピングセンター『アヴァロン』は、管理会社の「柴崎コンサルティング」会長の柴崎涉容疑者の逮捕により、今週一杯は閉鎖されたままだということですー」

ニュースの内容は、朝見たものとはさほど内容の違いは無かった。

「……茜ちゃん、ご飯の量これくらい？」

「あ…はい」

ぼうつとしていた茜は意識をキッチンの夏代のほうへと向けた。

「たくさん食べてね」

「はい」

茜はもう既に次のニュースに切り替わっているテレビを見ながらどこか釈然としない気分を襲われたのだった。

## さじ加減

昼食が終り、テスト問題の直しがすんだのは、もう夕方近くになってからだった。ようやく最後の二問を解き終わった茜は、自分がまるで砂のように崩れ去ってゆくのを想像してみた。

それほどまでに疲れきっていたのだ。

隣で根気よく教え続けた温ほるも同じらしく、某スポーツ漫画のラストシーンのように、白くなっていた。

どうやらここまで出来ないものとは思っていなかったらしい。

しばらく無言でいると、ノックの音が聞こえた。

「茜ちゃん、温君、飲み物いる？」

それに答えるように、無言で手を上げる二人。

「何がいい？」

「紅茶で。お砂糖とミルクつけてください」

「俺、コーヒー。ブラック」

「了解。ちょっと待っててね」

再び沈黙



「国際電話」

（「その手があったか」）

実を言うと茜も一度は考えた手だった。しかし、通話料の計算をするに当たり、メールの方が遥かに簡単でお金がかからないことに気付き、電話することはなかった。しかも、通話のタイミングなんてわかるはずも無く、もつといえ、本人以外の誰かが電話に出た場合、どう対応すればいいのかわからないということもあった。

「たまに電話しても、茜の話しばかりで、正直うざったい」

「…」

それはつまり、裏を返せば”自分の兄を取られているようで気に入らない”という意味にもとれる。当たり前だろう、遠い国へいつてしまった兄とのたまにできるコミュニケーションの時間が、他の女の子の話題で占められているのだ。

「なんだ、温<sup>はる</sup>って案外ブロンなのね」

「え？」

温は怪訝な表情をした。何言ってるんだこいつ、と目が言っている。

「だってそれってさ、私に温兄を取られるみたいで嫌ってことでしょ？」

「どっつてそうなるんだよ？」

「…あんだ、現国の成績悪いでしょ？」

「――別に」

ふい、と視線をそらす。これは、温が嘘をつくときについついやつてしまう癖だった。昔、それを度々空にたしなめられていたことを思い出す。

（「温君、人にいやなことをしてしまつたら、ごめんなさい、しないとね」）

あれは茜と温が幼稚園の年長組だった頃の話だ。同じ組の男子が温のおもちやを取り上げたのだ。多分それはその子にとって温自身のことが入らない、ということもあつたのだろう。言いたいことははっきりと言うし、手も早かつたし。

だから案の定温はその男の子の頭をポカリと殴つたのだ。

そして自分でまいた種にもかかわらず泣き出す男の子。当然先生が駆けつける事態になつた。

事の顛末を保育士の先生から聞いた空は、茜の隣でむっすりとしていた温に目線を合わせた。

（「あいつが悪い」）

そうとしか言わない温は、空にじつと見つめられるのが耐えられなかったのか、目をそらした。すると、温がこちら、とばかりに肩に手を置いた。

（「でも、その子に先に手を出したのは温君だよな？」）

そして、諭され続けること約15分、とうとう温は頷きかえしたのだった。

そう考えると、何だかんだ言って温は空に頭が上がらないのだ、と茜は思った。

「何だよ、にやにやして、気持ち悪い」

「……今すぐ殴っていい？」

「……やっぱり、やり慣れてないことはするんじゃないよな」

「は？……あー、もしかして今の慰めてくれたの!？」

茜のずばりとした指摘に、温は急にこちらを向いてさっきまで無然としていた表情を180度変えた。

（「うわあ、真っ赤」）

耳から頬まで、余す所無く朱色に染まっていた。

「……明日は雪かもね」

普段の付き合いからか素直に喜ぶことの出来ない茜はそうもらしていた。

「そうじゃなくて、俺は単に…」

「単に？」

「単に、兄貴のことよりも……」

「はいはい、飲み物熱くなってるから気をつけてね」

両手が塞がっているせいなのか、ノック無しで夏代が入ってきた。

「ありがとうございます」

「いえいえ、……温君どうしたの？顔真っ赤にして」

「…何でもない」

肩を落としながら、夏代から熱々のコーヒーの入ったマグカップを受け取った。

「そう、温君夕食こっちで食べるわよね」

ちょうどいいから、と夕食まで茜に付き合ってくれることになったのだ。茜にとってありがたい話だったので素直に受け取っておくことにした

「ああ」

夏代が部屋から出て行ったあと、温はおもむろに言葉を切り出した。



「あれをみせてくれ」

「……は？」

「兄貴から送られてきたPC、持ってるんだろ？」

「!？」

茜はしばらくくぐくぐと声を出さずじっと温のほっぺを見つめていた。

## 強さと弱さ

「何固まってるんだ」

どうしてそれを知っているのか、わからないといった表情で茜は温<sup>はる</sup>を凝視した。

「な…なんで、知ってるの」

「…1ヶ月くらい前から、頻繁に兄貴からメールが来ていたんだ。今自分が開発しているAIについて」

「…」

「それは、今までの常識を根底から覆す理論を持ったAIなんだってメールに書いてあった。まあ、どういう思惑があつて俺の所にメールが来たのかまではわからないけど。なんで俺が茜を見つけられたかわかる？」

「あ」

そういえば、そうだった。何故か温はちょうど茜が近所のビルの上に降り立ったベストのタイミングで駆け込んできたのだ。出来すぎといえは出来すぎだった。

「あの日ー金曜日の放課後にメールがあつたんだ。茜が拉致られた、つて。最後に兄貴の名前があつたけど、見たこと無いメールアドレスだった」

「…それでどうしてあの時間、あそこにいたの？」

温は傍らにおいてあったリュックサックに手を突っ込むと、携帯電話を取り出した。

「これ」

表示した画面を茜に示す。

そこにはメールの何件かにわたって、簡潔にこう書かれていた。

『――19時40分、御代志ビル』

『――20時10分 代官山 フォルデルト・ビル』

『――20時30分 葛木女子大学』

何の変哲も無く、特徴も無いただの時間と場所の羅列。

「何、これ？」

「俺にもよくわからん。数十分刻みでコロコロと場所を変えてくるんだ。おかげで東京中走り回ったよ」

それである時、制服もよれよれで傘も差していなかったのか。

考えてみれば、大雨の中、傘もささずに自分を負ぶってマンションまで連れ帰ってくれたのだ。

「あ…ありがとう」

温の瞳をしっかりと見つめてそういうと、照れ隠しのためかまた、顔を横に背けた。その時、ダークブラウンの髪がさらりと肩を撫でる。

「…ふん、それよりも、さっきの話に戻るけど、例のパソコン出して」

まるで亭主が妻に向かって「茶を出せ」という風な気軽さで、机の上を指した。

茜はため息をつき背後の勉強机の下からPCを取り出した。それを二人の間にある丸机に置く。

「ふうん、やっぱりパソコン自体はマニア向けだな」

見ただけでわかるのか、即答だった。おそらくこちらも築山並みのマニアと茜は見た。

「で、どうやって例のAIは起動するんだ？」

少しわくわくしているのだろう。声が弾んで聞こえた。

（「…」のうって、男のロマンっていつやつなのかしら？）

理解しがたいといった表情で茜はSサイキIイKキEエに呼びかける。

「サイ」

『……はい、アカネ』

スリープモードに入っていたのだろう。真っ暗だった画面が急に明るくなり、いつもと同じ『フサイ』のロゴマークが現れた。

「これが思考能力を持つAI、か。でもこんな薄型のパソコンのどこにそんな容量が…いや、その他にも視覚認識の面でいえば…」

『誰ですか』

どこか不穏な空気を察してか、SIKEが頼りなさげに声を上げた。

「彼は、私の従兄弟で温ほってるというの。字は温かい、って書いて一文字で『はる』。わかる？」

茜がそういうと、SIKEは白面のディスプレイを出し、そこに文字を打ち込んでいく。

「そう」

『海棠博士の弟ですね』

「あ、知ってるんだ」

『写真を見せられましたから』

そう言つて次の瞬間ディスプレイ上に現れたのは、まだ5、6歳  
といった所のあどけない茜と温が、タオルケットに包くるまつて、仲良く  
眠っている写真だった

「なんだそれは――！！！！！！」

二人して同時に声ができる。まさしく驚天動地といった風体だった。

『題して『空秘蔵ツ―ショットコレクション NO.1』です』

「題さなくてもいい！！」

「ナンバー付けされてるってことは、他にもあるのか！？」

温の声にこたえるようにして次に表示されたのは、先ほどの写真  
よりもいくらか幼い二人の入浴姿だった。大き目の海棠家のお風呂  
の浴槽に二人して仲良く浸かっていた。

更に二人の赤面度が上がる。

「なんでこんなもん撮ってんだうちの親は！！」

「何よこれ！！」

茜は真っ赤になりながら、丸テーブルをがくがくと揺さぶった。

『題して『空の秘蔵ツ―ショット…』』

「もういいわ！！！！」

「あのクソ兄貴…」

荒い息を吐きながら、温は悪態をついた。どうやら今の写真攻撃で大いに動揺しているらしい。・・・それは茜も同じことだった。

（「空兄あまじい、あんなものコレクションしてたんだ」）

悲しいやら、恥ずかしいやら…。茜はまた深いため息をついた。恐るべし、空兄。

「ねえ、温はサイについてどれくらい知ってるの？」

不意に疑問に感じた茜はそう尋ねていた。

「：現存のAIのように命じられた、プログラミングされたタスクをこなすものではなく、自分で思考することの出来るAI - それがSIKEだつてメールには書いてあったよ」

「それって、すごいことなの？」

「茜はチェスの名人がコンピューターと戦っている所つて見たことあるか？」

「うん、ニュースとか、新聞とかでよくやってるよね」

この前見たのは、チェスの世界チャンピオンとコンピューターの対戦、だったと思う。惜しくもコンピューターが負ける形となったが、大接戦だったらしくその様子をクラブで築山が熱弁を振るって

いたのを思い出した。

「あれだって、その場の人間が見たらコンピューターが自分で考えて「手」を打っているように見える。しかし、実際の所そうじゃないんだ。「こういう手が出たらこうする」という細かい命令をあらかじめプログラミングされているに過ぎない。そして現在、科学の発達と共にAIに命令できるタスクの量が増えてきている。だからチェスの世界王者にコンピューターが勝つということも有りうるんだよ」

チェスというのは、思考を基にする競技である分、「こうしたらこの手しか打てない」という行動を制限されるゲームである。その点から考えるとプログラミングといった観点から見れば、現存のAI技術に対応しやすい競技なのである。このほかにも将棋やトランプ、オセロなどのコンピューターゲームにもこの理論が当てはまる。

「でも、このAI - - S I K E サイキは違う。普通の人間と同じような思考法でチェスを打つことができるんだ。 - - だから、昨今のAIのように初戦で世界チャンピオンに勝つあるいは接戦に持ち込むなんて芸当は先ず出来ないね」

「どうして?」

「それは、S I K E自身がチェスについて『思考』していないからだよ。人間と同じようにS I K Eも『思考』することで『成長』していくんだ。だから、もしかしたらS I K Eがチェスについて学んで行けば、もしかしたら世界チャンピオンにだって勝てるかもしれない、けれどもずっと負け続けるかもしれない。それは誰にもわからないんだ」



「？」

「まあ、言い換えるなら「限界の無いAI」ということになるか。専門的な言い方をすれば『強いAI』ということになるんだろうけれど」

『強いAI』・・・それは、柴崎自身も口にしていた言葉だ。

「人間と同じってこと？」

「まあ、簡単に言ってしまうえばそうだな。しかし、こんな物SF小説の中でしかお目にかかれなれないと思っていたが・・・」

『海棠博士は――』

急にSIKEEが話し出したので二人は話すのをやめた。

『海棠博士は、私に「人」とは何であるかを、茜の元で学べ、と言っていました。色々なものを見て、聞いて、感じて――』

その声はどこか悲しい響きを持っているような気がしてならなかった。

強さと弱さ（後書き）

何だかようやくSFらしくなってきた（笑）

空兄の恐るべき本性が明らかに！？

## 夢の声

「……………ねえ、」

いつものように優しく語りかけてくる声。

そして、笑い声。

けれどそれは、ある日突然何処かへと消え去ってしまった。

……………雨の日と共に

「おはようございます」

アイマスクを取られたアオイは急に視界に飛び込んできた大量の光に、寝起きの顔のまま瞬きをした。

「…どれ位寝ていた」

「30分ほどですかね。どうです、少しは頭がすっきりしました？」

それを聞いたアオイは、少し耳鳴りのする頭を右手で押えながら答えた。

「余計に混線しそудだ。やっぱり、夢はあまり見たくないものだな」

仮眠用のソファァーから立ち上がると、すぐ右脇にある自分のデスクに腰掛ける。

「それよりも、『アドニス』の調子はどうなんだ」

傍らに控えていた中年の男性―松方は、手元にある書類を剝って報告した。

「先ほど起こったハッキングトラブルは回避されました。損傷は軽微です。まあ、痛み分けといったところでしょう」

「そうか」

アオイは頭の中を渦巻く雑念を振り払うかのように、頭を軽く振った。

「…大丈夫ですか？必要なら水をお持ちしますが」

「おいおい、うちのご主人様も随分ヤワになったもんだなあ、そんなに日本の空気が合わないかあ？」

軽い口調でノックもせずに入ってきたのは、長身で体つきのがっしりとしたまだ若い男性だった。しかしその立ち居振舞いから、すぐにそれなりの強さを持ち合わせていることが知れる。服装は至ってラフでジーパンにTシャツという、恐ろしく職場には不似合いな格好だった。

「おの大野」

「よっ！ただ今帰還いたしましたぜ、ボス」

軽く敬礼をして、アオイのデスクの前に居直った。

「…随分楽しんできたようじゃないか。ここよりも向こうの方が性に合っているんじゃないか？」

少しだけ機嫌の悪いアオイは少し睨みを聞かせながら目の前にいる男に向かって言い放った。暗号名『T』こと大野明義おのあきよしとは一応上司と部下の関係ではあるが、歳の開きがあるせいか子ども扱いされることが多い。

「そんなそんな、滅相も無い。俺の愛マイ・スイート・ホームしき我が家はここだけだよ」

ほんの数日前までスパイとして数年間、小野坂洋平おのざかようへいとして柴崎コンサルティングに潜入していた彼はどこか飄々とした風情で物事を割り切ることの出来る男だった。 - - だからこそこの仕事に向いているのかもしれないが…。

「…どうだか」

「はいはい、アオイも大野も、言い争いはそれぐらいにして下さい。それでアオイ、これからどうするんです？」

「そうそう、あの嬢ちゃんに的を絞るのか？ほら、お前えらくご執心だろ？お前もずいぶんと面食いだなあ」

大野は腰に手を当ててからからと笑う。

「…お前は今日復帰したばかりで知らないだろうが、向こうが攻撃を仕掛けてきた。多分、龍の逆鱗にでも触れたんだろう」

「向こうって、例のAIの製作者か？」

「ああ。『アドニス』が攻撃を受けた」

日時変更ー午前零時丁度を狙ったそのハッキングは、いまだかつて無いほどの深部まで侵入を許してしまった。どうせ在野のハッカーの仕業だろうと見て甘く見ていたのが災いだった。ものの2分でこちらの情報を奪い取って言った上にいくつかのプログラムシステムに傷をつけて帰っていった。

こんなことが出来る人物に該当するのは一人しかいなかった。

「それはそれは、ご愁傷様で」

完全に他人事だと決め付けているのか、大野はあまり興味の無い様子で言い放った。もとより機械系等に弱い彼には無縁な話だったが。

「ーしばらくはSIKEシステムの製作者である海棠博士の捕<sup>ほ</sup>捉<sup>そく</sup>に全力を挙げることにする。日本にいることは確実だ。虱潰しに探せ」

珍しく低くくぐもった声で話すアオイにただならぬものを感じたのか、松方は一礼するとその場を離れた。

「あっ！ずりいぞー！」

その後を追うようにして、大野も部屋をあとにする。

誰もいなくなった部屋の中、アオイはもう一度目を閉じてみた。

ほんの数日前に目の前にいた長い黒髪の、美しい少女のことを思い出していた。

烈しくも決して粗野ではなく折れることのない、野の百合のような凜とした美しさ――。

形の整った唇、ほっそりとした白い首、黒曜石のような深色の瞳。

「ますます、あの人にそっくりになっていくんだな」

それは懐かしい、今でも鮮明に思い出すことの出来る「夢」のような存在。

それをゆっくり噛み締め、昔を懐かしむかのような細かい声で、アオイは言い放っていた。

「――ふうふうふう、危ない危ない」

PCのディスプレイの前で青年は首を傾げ、肩を叩いた。ハッキングのこの場合はクラッキングに該当するのカーを仕掛けたのは久方ぶりのことである。腕が鈍っていないかと心配だったが杞憂だったらしい。案外すんなりと情報を得ることが出来た。しかしこちら側にも損傷を負ったらしく、しばらくPCを使えないであろうことは明らかだった。

「やっぱり、あの『アドニス』相手にちょっときつかったかなあ。でもこれからの方針を考えるのに向こうの情報は必須だからなあ」

殺風景な部屋には所狭しとPCやそれに関連する電気機器、プラグ・コードなどが並び、敷き詰められ、足の踏み場もない状況だった。

「でも、今ではなれてるよなあ、きつと。でも居場所までは特定できないだろうし…、完全に振り切ったし」

青年——海棠空かいあんくうは齒ため息をつく眼鏡をはずし、大きく伸びをした。

「…年を取ると独り言が多くなるよな。いや、単に寂しいだけか？」

目の前のディスプレイには先ほど『アドニス』から奪取したばかりの情報の数々が並べられていた。

その中に何枚かの写真が収められているファイルがあった。

これだ

たいして特徴のあるファイルでもないのに、直感がそう告げている。

おそろおそろマウスを手にして、それをダブルクリックする。

次の瞬間ディスプレイに並べられた「それ」は普段温厚な顔つきの空を戦慄させるのに十分なものだった。

「これが…」



搾り出したかのような、殆ど息だけの声。

「これが…新たな『魂』の形なのか…？」

## 夢の声（後書き）

アオイの物語でした。

空<sup>あそび</sup>単独で出すのはもしかして初めて!?

やはりアオイは書いていて楽しいです!

## 新しき日常

嵐のような週末が去ってゆき、また普通の日常が戻ってきた。

いつもと同じ通学路を歩いてゆく。周りを見回すと、校門前で朝の挨拶を交わす学生たちの姿が見えた。

（「ねむ…」）

茜はこらえきれない眠気を欠伸で表現した。風邪を引いてあれほど寝ていたというのにまだ寝足りないらしい。

「おっはよーー茜」

ひときわ肺活量のある、よく通った声が聞こえ、茜はふり返った。

「あ、おはよう楓子」

茜の高校での一番の親友とも言える楓子はいつもと変わらず、お下げに眼鏡といった風体でそこにそこに立っていた。

（「ああ…これが現実なんだ」）

金曜日にあったことを思うところして彼女と会えていることは奇跡に等しいことなのかもしれない。そう思うと表情が和らぐ。

「…朝っぱらから何ニヤついているの？」

あまりにも不自然な表情だったのか、怪訝な顔で楓子は茜の顔を

覗き込んだ。

「いやっ！なんでもないので！何でも…」

内心焦りを隠しきれない様子で茜はわざと目線を楓子からそらした。

「…ん？そういえば見慣れない顔がごきますなあ」

楓子の視線が茜の後ろに向けられる。そこにはいつもなら居ないはずの人物が、気だるそうな風体で立っていた。

その人物―海棠温かいとうほんは、茜と同じく欠伸をかみ殺すと、焦った表情の茜に向かって一言言い放った。

「あっ！あの…これはね…」

「先行くぞ」

「ち…ちよっと…！」

なにやら勘繰っている様子の楓子を置き去りにして、茜は必死に温ほんの後を追う。

教室に着くなり、温は茜と一緒に登校したことなど忘れ去ったかのように、教室の隅のほうにある自分の席へと移動した。「じゃあ」とか「またな」とかという言葉は一切なかった。

茜はため息をつきつつ席につくと、学生鞆の中身を机の中に移し変えた。そしてふいに手提げカバンの中身を見る。

そこには本当に普通のPCと何らかわりない、アスタルテ社製のPCが入っていた。本当は専用のバッグにいれたほうが良いのだろうが、デスクトップのPCしかない我が家にそんなものがあるはずもなく、こうして比較的丈夫そうな手提げに入れて持ち歩いているのである。

(「次の休みの日に電化量販店にでも行こう」)

そう考え、机の横についているフックにぶら下げておいた。

「あ・か・ね・ちゃーん」

薄ら寒くなるような猫なで声で名前を呼ばれた茜は、無視しようとして黒板に書かれた1限目の授業内容を確認した。

「数学か…」

朝から憂鬱になる教科だ。何故月曜日の朝から難解な数字と顔を突き合せなければならぬのだ。

「おーい、茜ちゃん!？」

気がつくとも楓子の顔が目の前にある。眼鏡と地味な髪型のせいか目立たないが、それなりに整った顔立ちをしており、舞台栄えのする華やかな表情をわずかながらに覗かせていた。

「……………何よ」

彼女の言いたいことになんともなく察しのついていた茜は、無然とした表情で視線をそらす。

「この週末何かあったのかな、海棠くんと」

「…」

なかったと胸を張っていえたらどれほどいいだろうか。

”銃を持っていたかつい男たちに銃撃されつつビルの中から脱出してきました”

「……………」

事実をありのまま述べようとすると、どうしても無理がある。一体どこの脱出ゲームだ、と自分で自分にツッコミを入れたくなった。

「黙り込むってことは、怪しいなあ」

「なっ！何も無いわよ」

「じゃあさ、なんで今日一緒に登校してきたの？」

茜は言葉に詰まった。そして、そっと教室の窓際の席にすわる温のほうに視線をずらした。他人の気持ちなどお構い無しに、またしても欠伸をしていた。

「それは……」

そのとき、茜にとっては神のお助けともいえる第一声が教室に響いた。

「おらー席につけー。ちゃっちゃとHR始めるぞー！」

その担任の一言により、茜は友人からの質問攻めをかわすことができたのだった。

### 1 限目は数学。

小テストの直しを終えていた茜は、自信満々の表情で教師にノートを提出した。何人かの生徒が教師にひたすら泣きながら懇願していたが、数学担当の教諭――林野は提出物の期限が厳しいことでも知られていて、ひたすらに首を振るのみだった。

温はというと、ノートを提出しないまま、窓から外の景色をボーンと眺めていた。

（「あれ…？」）

出しに行かないのだろうか、と様子を窺っていたが、彼がノートをどつと提出することはなく、数学の授業に突入した。

（「…という事は…」）

提出の必要がない、つまり、小テストの結果が…、

（「満点だったってこと！？」）

呆れた様子で茜は温を呆然と見ていた。

（「そういえば、数学得意って言っていたものね」）

机の引き出しから教科書を取り出すと、いつものように授業が始まる。

少しだけ低い教師の淡々とした声に、生徒がノートにシャープペンを走らせる音だけが響く。期末テストも近いせいだろう、いつもより緊張した雰囲気の流れていた。

茜はというと、この週末に起こったことで頭がいっぱいだった。

あれは、昨日の夜――

「なるべく単独行動は控えた方がいい」

茜が知っているすべてのことを話し終えた後、しばらく熟考していた温はこう告げた。

「ーえ？」

「茜の言っていることが事実なのだとしたら、単純に警察に連絡すればいいってものじゃない。もしかしたらもっと大きな組織が動いているかもしれないし、危険だ」

「でも……」



「これは推測でしかないけれど、そのAIを世界中のあらゆる国家が狙っているとしたら？」

「…」

つまりは、警察といった国家権力をあてにすることはできない、そう言いたいのだろう。

「多分、『アヴァロン』の管理会社関係者が逮捕されているのも偶然じゃない。もっと複雑な『仕組み』が働いているんだと思う。このAIはそうさせるだけの力を十分に秘めているんだ」

「でもー」

「とにかく、明日からは一緒に登校しよう。下校もだ。なるべくうちで夕食食べていったほうがいい。うちに来るのがベストな選択肢なんだが…」

（「何だか頭が混乱してきた…」）

とにかく今まで起こったことを整理しよう、と机の引き出しからルーズリーフを取り出し、シャープペンシルを走らせた。

（「まずは、空兄あまにいが私にサイを送り付けてきたことが発端なのよね」）

ルーズリーフの中央に四角を書き、『SIKE』と文字を入れた。そしてその横に『茜』と、自分の名前を入れた。

（「で、それを手に入れようとした柴崎が私を下校中に連れ去った…と」）

右端に『柴崎』と書き込み、『茜』の文字へと矢印を引っ張った。

（「そういえばーあの時こう言ってたっけ」）

『正直に言えば、我々はそのAI自体に興味はない。ただ、取引の材料としたいだけだよ。…物事を円滑に進めるためにね。平和ボケしているこの国に住んでいたら分りにくいかもしれないが、このAIには世界中の様々な国家が注目しているんだ』

とすると、柴崎の率いている組織自体はSIKEEを利用することを目論んではない、ということになる。

（「ーつまりは、誰かに依頼されてやったってことー？」）

『柴崎』の名前の上に『？』マークを書いた、そして矢印を引き、その下に『依頼された？』と書き記しておく。

（「で、あの時『アヴァロン』の管理システムにサイキ以外の誰かからのハッキングがあったのよね」）

SIKEEいわく、独立したネットワークからのハッキングらしく、ある地点でプツリと消息が途絶えたのだという。

（「そういえばー」）

S I K Eが一時柴崎に奪われた時、何かが起こった気がした。実を言うと、そのときの記憶がいまだに曖昧で、霧がかかったようにうつすらとしかわからない。理解できるのは、S I K Eが管理者権限を奪取して運搬用のエレベーターを動かしたことだけだ。

（「そしてー」）

謎の青年、アオイ。不思議な雰囲気をもった人物だった。おそらく一癖も二癖もあるに違いないと、茜はそう思った。

何かしら諮ったようなタイミングで茜の前に現れたことといい、怪しい人物ではある。

ーーそれに…。

「はら、糸伊原！」

教師に名を呼ばれ、茜は即座に身を強張らせた。慌てて黒板を見ると数学担当の林野が青筋をたてながら、こちらを睨んでいた。

「テスト前だっというのに、ずいぶん余裕なんだな」

「え…？」

「（9）の問い2、前に出て解いてみる」

ほら、と黒板を指し示された茜はしばらくの間頭の中が真っ白になっっていた。



## 弁当のおかず

…そんなこんなで4時限目が終り、教室内は一気に昼食モードに早変わりする。茜はため息をつきながら、カバンの中から弁当を取り出した。

夏代が作り置いてくれたおかずをつめたスペシャル弁当だ。

「茜、今日弁当？」

いつも一緒にお昼をとる楓子が茜の席へと寄ってきた。手には財布が握り締められている。

「あんたは学食？」

「うん、母さんが寝坊しちゃってさ」

と知っている割に嬉しそうだ。それもそうだろう。この学校の学食は都内でも1、2位を争うほど美味しい、と評判なのだから。

「オムライスか、生姜焼き定食もいいよねえ」

「いや、和定食も捨てがたいよ」

と話し合っていると、一つの影がこちらに近づいてくる。……温ぬるだった。

「…今日、学食？」

「え…？あ、うん」

気だるそうな目をして、ため息をついた後、温は信じがたいことを口にした。

「一緒に食おう」

「……………は？」

眉間に思い切り皺を寄せた茜の返事に、不服そうに温はもう一度声を出した。

「一緒・に・食おう」

今度はご丁寧に単語ごとに区切ってくれた。

「あらまあ」

呆気にとられている茜を尻目に楓子はにまにまといやな笑いを浮かべている。

（「絶対誤解されてる…！！」）

けれどもそれを否定すれば、色々と面倒くさいことを説明せざるを得なくなる。

「いいよいいよ、私他の子と一緒に食べるから。んじゃねー」

誤解したまま上機嫌で他のクラスメイトたちの元に駆け寄ってゆく。茜は内心で必死に呼び止めたい気持ちを抑えながら隣にいる温

を恨めしげに睨んだ。

「行くぞ」

沈黙に耐え切れずしてか、温は早足に歩き出す。その手には弁当の包みと、お茶の入ったペットボトル。茜は絶句したまま手提げと弁当袋をむんずとつかむと後を追った。どうしてもクラスメイトの視線が気になる。

廊下を歩いていても、どうしても周囲の視線が気になった。黙ってみていれば「美形」と取れるほど整った顔立ちをしている温は昔からとにかくもてた。その普段の性格からか周りの女子からは「毒舌」な彼の性格を「クール」なのだ勘違いしてしまうらしく、告白しては温の目の前で玉砕していく女の子たちを見て、茜はどうしてこんな奴を好きになったのだろうか、と不思議でならなかった。

本人曰く、「顔だけで選んでるんだろ」と言っているが、必ずしもそうではないと茜は思っている。茜の場合、母親譲りのこの容貌のため勘違いをして告白してくる男子は多いが、大抵は一言口を滑らせただけで敬遠して、後は寄ってこない。たまに自分に対する愛情の裏返しなんだとか言って、更に迫ってくる勘違い野郎が出て、自分でも驚くくらいの罵詈雑言を並べ立てて追い払ったりするが、大抵は最初のいくらかのコミュニケーションで茜自身に幻滅して去ってゆく。

しかし温の場合、少なくとも性格を見て選んでくれている部分もあるのだから、もっと真剣に向き合ってみてもよい気がする。

他人の色恋ごとに首を突っ込んでもろくなことにならないのは茜も重々承知しているが。

（「って、考え事に浸っている場合じゃ…」）

気がつくのと、温の背中が廊下の遙か彼方だった。それを見失わないように必死に追う。

温と茜がたどり着いたのは、裏庭から伸びる細い道の先にある広場のような場所だった。日光が良いぐらいにあたって花壇からは色とりどりの花が咲き乱れており手入れが行き届いているのが伺えた。

温は下段の淵に腰をかけると、弁当の包みを解き始めた。

「…どうい風吹き回し？」

「なにが？」

茜の2倍ほどもある大きな弁当箱の蓋を開けた。白ご飯、焼きジャケ、おひたし、からあげ、玉子焼き…。夏代の手作りなのだろう栄養バランスも考えられているらしかった。

「だって、今までそんなに一緒にいることなんてなかったのに、急に今日から2人で行動なんて…絶対色々噂になってるって。現に目立ってたし」

「茜ってさ、そついの気にするタイプだった？」

「…あんたと違って繊細なのよこっちは」



「織細：ねえ」

玉子焼きに箸をつけながら、温はつぶやいた。言外に「そんなわけない」という意味をふくませながら。

茜は憤慨しながら温の隣に腰を下ろすと、弁当の包みを解き、蓋を開ける。普段は朝時間がないこともあって、冷凍食品の詰め合わせになっていたが、やはり手作りのおかずはほっとするというか、何だか嬉しい気持ちになる。

「大体私の身が危険だって言うけど、ここは法治国家日本なのよ？それにここは学校！そりゃあ、あんなことがあった後じゃあ不安にもなるけどさ……」

ニユースを見ながら、どこか「こんなことは自分とは関係ないんだ」「こんなことに遭遇するのは『例外』なことなんだ」と思って完全に傍観者だった自分が、いつの間にかその危険の渦中にいたのだ。今でも自分が「例外」に陥った時の恐怖をありありと思い出せる。

茜は感情の残滓を取り除こうとして軽く首を振った。そして、傍らにおいていた手提げからPCを取り出した。

「……サイ」

「イエス。アカネ」

スリープモードに入っていたため、サイキSIKEはすぐに返事をした。

「ただ今の時刻午後12時15分、天気、東京都、晴れ時々曇り、

気温28度、湿度67パーセント」

「おはよう。いや、こんにちはかな」

「はい、おはようは通常人間の使う『朝』という概念の通じる時間帯に使われる挨拶です。今は昼ですのでそれは当てはまらないと思われます」

「はは…」

コンクリートほどに硬いS I K Eの説明文に、茜は苦笑した。

「どう、空兄について何か思い出せた？」

温は日本にいますーそれはこれまでの経緯で唯一明らかになったことだ。もう彼はアメリカにはおらず茜たちの暮らす日本のどこかにいるのだ。しかも追われる身という立場で。

「海棠博士についての情報は今のところ私にアクセスの権限を与えられておりません」

「こつちからハッキングを仕掛けるってことはできないのか？」

そう聞いてきたのは温の方だった。見ると弁当の半分以上を食べた後で、お茶を口に含ませていた。

「それは、いくらなんでも物騒なんじゃあ」

「…お前…、諸悪の根源は兄貴だつてこと忘れてないよな？」

「…はい？」

「いいか、お前が『アヴァロン』の連中に囚われたのだって、こうして俺と一緒に行動しなきゃならないのだって、すべては兄貴がこのAIを茜のところを送り付けてきたからだろ？腹立たないのか？」

たしかに、傍から見ればそうかもしれない。けれども茜は恐怖を味わったと同時にかけがえのないものに気付いたのだ。だからあまり空のことを責める気にもなれなかつたし、それよりも彼のことを心配する気持ちのほうが遥かに大きかった。

「それは…そうかもしれないけど。でも、どうして空兄は私のところにサイを送ってきたんだろう？」

「さあね、あの人の考えることは理解の範疇を超えてるから」

単に誰でもよかったということでは無い気がした。もしそうなのだとしたら、海棠家に荷物が届けられているのだから、海棠家の誰かに宛てるはずである。

「…」

考え事をしている茜の眉間に何か触れた。温の人差し指だ。茜の額を押えていたそれをぐりぐりと押さえつけるようにまわし始める。

「な…何？」

「あんまり考えすぎてもしょうがないこともある。特に茜の場合は」

そう言っつて茜の表情を読み取るかのように、顔を覗き込んだ。紺色とも取れるような深い深い烏色の瞳に、茜は少しだけどきまぎした。

「…何か急にそういっつこと言われると、悪寒がするわね」

「そっつか？ほらよく言っつじゃないか」

「え…？」

「馬鹿の考え休むに似たりーって」

「なっ…！」

どこか得意な調子の温に拳骨をお見舞いしてやりたい気持ちも必死にこらえて、とりあえず意識をまだ半分も食べ終えていない弁当箱のほうに集中させることにしたのだった。

弁当のおかず（後書き）

弁当のおかずは私の好きなものを適当に入れてみました（笑）

## 他人の恋路は何とやら

「んで、正直な所、どうなのよ？」

「どつって、何が？」

慣れないことをしているせいか、少々げんなり気味の茜はため息をつき、オレンジのパックジュースをずずと啜った。

「どつちから告白したの？」

ぶふおお！！

漫画の効果音のように盛大な音を吐き出しながら、のどに液体を詰まらせた茜は、吐き出すまいと必死になりながら、手に口を当てて咳き込んだ。

「うわっ！大丈夫！？」

「あ…あ…、あんたが変なこと言い出すからでしょ！！！」

「今更そんなこと言いなさんな、『月光の照らす花園で永遠の愛を誓い合う男女、しかしその道のりは苦難のものであった…！！ああ、愛し合う二人の運命や如何に…！！』」

「それ次の芝居の台詞？」

楓子は呆れ顔で茜を見た後、首を振った。

「いや、今のあんたたちの状況を脚色してみました！」

親指を立てて自信満々に答えてみせる。

「しすぎだ！…それに、本当に私と温はるは何でもないんだって。ちょっと今事情があつて、二人でいることが多いだけよ」

真剣な表情でそう話すと、楓子は「そういうことか…」と眉をひそめた。

「…何？」

少しだけその表情に不穩の色が見えたことに気付いた茜は訝しげに聞いたです。

「ほら、温君つてさ、何かと女子にもてはやされること山の如しじゃない？」

「はつきり』もてる』って言いなさいよ」

「ま、そうなんだけど。それでさ、女性特有のねばねばこつてりとした醜い感情を持つ腹黒い乙女があんたを狙ってるのよ」

「…まじで？」

「まじ」

つまりは女子によくある、ひがみ、嫉妬という奴だ。しかも楓子の話し振りから察するに一人や二人ではないらしい。

やはり昨日今日でいきなり、同行動をとったのがまずかったようだ。

「いやー昼ドラもびっくりですなあ」

完全に他人事のようにふるまう楓子に少々辟易しながらも尋ねた。

「それで、誰なの？」

「うーん、表立ってはそれほどいないけど、特に激しいのは3年の湯木先輩かな」

「誰？」

「あれ、知らない？合唱部のヒロインこと湯木佳奈美先輩」

とはいったものの、学年が違うとなると、茜の知り合いはパソコン部の面々のみということになる。名前を言われた所で顔が浮かぶはずもなかった。

それとは対照的に楓子のほうは、演劇部長ということもあり、部活関連の知り合いが多く顔も広い。

「容姿端麗、成績優秀とくれば、ちょっとやそつとの殿方じゃ満足できないってことよ」

「へー」

なるほどなるほど、と適当に相槌を打っておいた。そういう自分が大好きな人間に茜は興味も関心も無かった。あまり関りあいたく



もなかったが。

「演劇部も合唱部とは何かと因縁でね、去年は文化祭の演目で結構やらかしちゃったし」

「あー『オペラ座の怪人』ね」

楓子の所属する演劇部は、どちらかという硬派で過去の作家の作品を上演するのが伝統となっている。その正統派の演技が高校演劇界でも評価されて、去年は確か関東大会のベスト8の成績だった。そんな中でも1年生ながら準ヒロインを演じていた楓子は茜の目から見てもまさしく、『舞台の女王』といえるだけの貫禄を持ち合わせていた。

事件は去年の9月、秋に行われる文化祭の準備に追われていたときのこと、演劇部の出し物が「オペラ座の怪人」に決定し、演劇部の面々も夏に行われた大会とは違い、比較的自由な環境で活動できる舞台にはしやぎながらも着々と準備を進めていた。

しかし、そんなある日、生徒会から連絡が来て、「オペラ座の怪人」は合唱部がやる演目だから、他のものに変えてほしい、とってきたのだ。——文化祭まであと1ヶ月を切っているというときに。

もちろん、演劇部は合唱部よりも先に申請していたし、本来「オペラ座の怪人」はミュージカルであり、演劇の一種である。どう見てもおかしかった。

いくら演劇部がくっついてかかっても、生徒会の態度は一貫しており、演目を変えないのならば出場停止もやむなし、ということにまでな

ってしまっ。

事の真相はわからなかったが、教師たちもやんわりと他の演目を進める始末で、演劇部員たちもここで時間を無駄にして文化祭をふいにしてしまうことも躊躇われたため、演目差し替えという苦渋の決断を下したのだ。

「実を言うとき、あれ、湯木先輩の差し金だって演劇部員が噂してるんだ」

「え!？」

「…多分映画とか演劇を見て触発されたんだろう、って。それでやりたくなっただんじやないか、とかさ。生徒会の方は当時の彼氏が会長やってたから……ま、噂は単なる噂であって真実ではないけれども……」

釈然としない表情を浮かべるところをみると、そのことでいまだに引きずっている部分があるのだと茜は見抜いていた。

「楓子……」

「だから、茜も湯木先輩には気をつけなさいよ。あんたのことだからさ、また色々つかつかっちゃんだろっけど」

「……そりゃあ……」

そこまでで会話は途切れた。6時間目の始まりを告げるチャイムがなると同時に教師が入ってきたのだから。

すべての授業が終りHRが終わると、生徒は各々部活動か帰宅か掃除かに散ってゆく。

「帰るぞ」

何の前触れもなく、茜の席まで歩み寄ってきた温がぶつきらぼうに茜に言い放つ。

(「こんなやつのごがいいんだか…」)

茜は改めて温の顔を見た。通った鼻筋に整った端正な顔立ち、深い琥珀色の瞳。染めていないのに色素の薄い髪。

(「ま、顔はいいわね」)

「人の話を聞く気はないのか？」

「あ、ごめん」

急いでカバンの中身に教科書類を詰め込むと、後を追いかける。

「ねえ」

教室前の長い廊下を二人並んで歩くのは少し違和感があった。幼稚園や小学校に通っていた頃には当たり前前の距離だったのに、今ではそわそわして落ち着かない。

「…何だよ」

「温ってさ、女子にもてるじゃない？付き合おうとか思わないの？」

「別に」

「別に…ってことは、『いいな』って言う子から告白されたら付き合おうの？」

「…っっっ！そんなことどうでもいいだろ！お前は自分の心配でもしてる！」

「なっ！」

温はそのまますたすと昇降口めがけて歩いてゆく。歩幅が茜とは段違いのせいか追いつくだけで精一杯だ。

「お、海棠。ちょうどいいところに」

職員室の前を通りかかった時と同じタイミングで中から出てきたのは、茜のクラス担任の桜井だった。

担当教科は現代国語、年のころは40を過ぎたところだろう、すらっとした立ち姿に奥さんが選んでくるといふアニメ柄のネクタイがとてもよく目立っている。子煩悩で生徒に自分の愛娘（5歳）の写真を見せて回っては、鬢髻を買っていた。

「…なんですか？」

「いやいやそんな身構えなんて。ちょっと委員会のことだな？…何だお前ら付き合ってたのか？」

珍しく二人でいるのを見かけてか、邪推するように顎に手を当てるとにやりと唇をゆがませた。

「違います!」

茜は誤解を解くべく力いっぱい否定する。

「…だそうです」

「ふうん。それはそうと、この前海棠が出してくれた決算報告書の件なんだが…時間取れるか?」

温は4月から図書委員会の委員長を任されていて、予算案を組んだり決算を出したりと忙しいらしい。

「…」

ちらりとこちらを見る温を見て、茜は苦笑した。少しだけ悲しそうな顔をしていたから。

「いいよ。行ってきたよ。私待ってるからさ」

茜が気を利かせてそう言うと、温はわずかに頷いて桜井に続いて職員室へと入っていった。

（「さて…と」）

テスト2週間前なのだから教科書でも広げて少しでも公式や単語を覚えるべきなのだろうけれど、教科書に手を伸ばす気にはなれなかった。

（「どれくらいかかるんだろ」）

SIKEでも出して暇つぶしに話すか、とも思ったが人通りが多いのでやめた。パソコンの前でぶつぶつぶやいては変な女と思われても仕方がない。

（「うーむ」）

「糸伊原さん？」

名前を呼ばれ、思考の世界から帰ってくると、すぐ目の前に見知らぬ女生徒が立っていた。短めのスカート丈に、ウェーブのかかった長い髪、綺麗だが化粧の濃い顔にリップクリームがきらきらと輝きを放っていた。

周りには何人かの女子がいて、その面々から見て察するに3年生のようだった。

友人というよりは女王様とのお付きの侍女といった方がしっくりくる組み合わせだった。

ずっと女生徒が近づくと、香水の匂いが鼻先を掠めた。万樹が愛用している男物とは違い、濃いフルーツの香りが咽る様に迫ってくる。

「ちよつといいかな？」

茜は瞬時に、この人が例の「湯木先輩」なのだと察知した。



## 恐ろしきもの

平和な日常を謳歌していたはずの茜は、何故か4、5人の女生徒に「ちよつとツラ貸せや」コールを受けて、ドラマなどでよく見かけるシチュエーションに陥っていた。

（「・・・早く帰りたい」）

ため息をつきながらも、目の前の人物を見た。『合唱部のヒロイン』こと湯木佳奈美。・・・確かに高い鼻筋が印象的な美人ではあるが、周りにまとう雰囲気は噂通りきつそうな性格をかもし出していた。

「何なんですか？こんなところに呼び出しなんて」

必死に文句を言ってやりたい気持ちを抑えつつも、ここで爆発してはいけないと自分をなだめつつ温厚に口を出した。

「何なんですかって、ここに連れてこられたことの一つも見当がつかないの？」

先ほどまでの明るい調子は微塵も見られない、どこか相手を見下しているかのような高慢ぶった言い方だった。

「・・・」

できるだけ侮蔑の意味を込めた表情で相手を見たが、佳奈美は身は全然ひるむ様子がない。・・・いや気付いていないだけだろう。そう感じたのは、彼女が茜の目を見て話していなかったからだ。



「…温のことでしょうか？だったらご心配なく。私と彼は付き合って  
ませんから。ただの親戚同士です」

イライラが押えきれず、少し険のある言い方になってしまふ。そ  
んな自分にも腹が立ってしまったてどうしても居心地が悪くなつてし  
まった茜は、さっさとその場を離れようとした。

「待ちなさいよ」

腕をつかまれる。佳奈美ではなかった。先ほどから佳奈美の後ろ  
を着いて回っている、取り巻きの一人のようだ。細い唇が印象的な  
長い髪をポニーテールにした女生徒だ。

「一方的に話の腰を折るのは卑怯じゃない？」

「なっ…！」

茜は腕を振り払うと、もう一度佳奈美の方に体を向けた。

「私が聞きたいのはそんなことじゃないのに」

「え？」

「私が聞きたいのは金曜日のこと」

金曜日…その言葉とともに、脳をフル稼働させて考える。そう、  
その日は確か茜が拉致されて『アヴァロン』に閉じ込められた日だ。

「金曜日…？」

考えても一向に答えが出ない。少なくとも彼女たちにごうして言い寄られるようなことをした覚えがなかった。

「夜遅くに清野のあたりを、海棠君とえらく親密な感じで歩いていたそうじゃない」

「！」

それを聞いて思い出した。あのビルで気を失った後、温は濡鼠になった茜を背負って夜の街中を歩いていたのだ。よく考えれば目立つことこの上ない。

「夜の11時かそこらに、どうして付き合ってもいない男女二人がそんな格好で歩いていたのかしらね」

「…そんなこと、先輩に関係あるんですか？」

半ばヤケになった茜は、そうまくしたてた。佳奈美は肩にかかっていた髪を振り払うと、つやつやとした唇をゆがませた。

「あら？あなたは物分りがいい方だと思っていたのだけれど？」

くすくすくすくす。周りから人を不快にさせるような、貶されたような

（「だめ、もう限界」）

「…温に気があったら、直接言えばいいじゃない」

「え？」

「温に直接好きなら好きって言えばいいでしょうが。何よ、こんな風に皆で寄ってたかって。みつともない!!」

そのとたん周りにいる女子たちの表情が180度一変した。

「みつともない…？そっちの方こそ可愛くて男にちやほやされてるからいい気になってるだけなんじゃないの！」

「私にそんな論題振ってくるよりも、温に直接言えばいいじゃない！何よ！告白する勇気もないの？金魚のフンなんか引き連れて！」

それと同時に佳奈美の取り巻きが茜につかみかかってきた。それを交わそうとするも、いかんせん圧倒的な人数の差から、押さえ込まれてしまう。

「ちょっと！離せ!!」

カバンを取り上げられ、中身をばらばらと目の前で落とされた。教科書や筆箱、電子辞書が音を立てて落ちてゆく。それと同時に手提げカバンもひっくり返された。

「何これ」

手提げカバンに入れていたノートPCだった。頑丈な作りであるがそれはかなりの高さから落下したにもかかわらず、へこみや瑕は見当たらなかった。

「パソコンじゃん」

「なんでこんなもの学校に?」

「さあ?」

「でも、とりあえず高そうだね」

女生徒の間の手から手をわたって、PCがーS I K Eが茜から離れてゆく。

「返せ!」

最終的にPCは佳奈美のもとに手渡された。それと同時だった。

聞きなれない電子音と共に、大音量の音がPCから鳴り響いた。

それはもはや音というよりも『電波』というのに近くて、小学生が防災のために身に着けている警笛や変質者撃退用のアラームの耳障りな音に似ていた。

その大音量に驚いてか、PCを持っていた佳奈美の腕はひっくり返り、PCはまた地面にたたきつけられた。

「ちょっと!今のは何なのよ!」

そんな彼女の言葉も無視をして、PCに駆け寄った茜はディスプレイを覗き込んだ。どうやら異常はないらしく、いつものように『』のロゴマークが画面上をくるくると回っているのみだった。

音の方はというと、茜がディスプレイを覗き込んで数十秒で止ん

だ。どうやら”彼女”が助け舟を出してくれたらしい。

しかしその代わりに、

「何だ今の音は」

「こつちから聞こえたぞ」

「不審者でも出たのか」

突然聞こえた爆音に誘われるようにして、人の集まりがぞろぞろとこちらに向かってやってくる。

茜はこれ幸いと、荷物の中身をかき集めると、今だ呆然と立ち尽くしている佳奈美を尻目に、その場を去ろうとした。

「あ…」

人だかりから一步はなれるようにして、こちらに歩み寄ってくる温の姿があった。

温は茜の姿を認めると、そのまま横にいる佳奈美に視線をずらし、こつと言った

「原口先輩が呼んでましたよ」

茜でもわかるような、静かな、怒りを極端に押さえ込んだような声だった。その並々ならない気迫を彼女も感じていたのだろう、一歩も動けないようで、茜はその場を離れることができた。



恐ろしきもの(後書き)

何だか、どろどろとしたものが書きづらいことこの上なく(笑)

## アルマンティン

佳奈美から逃げるように離れた茜は、隣で少し憤っているような表情の温を見た。

「…湯木先輩と仲いいんだ」

先ほどの悶着の余韻からか、皮肉を込めて口にしてみた。すると、温は目を細めて言葉を詰まらせた。

「1年の後期で委員会の活動が一緒だったんだ。それだけのことだ」

「別に私は二人が付き合ってるとかそういうことを聞いてるんじゃないんだけど」

知らず知らずの内に言葉の端々に棘が混じる。このままだと自分がものすごく悪い人間のように思えたが、一度口火を切った言葉は中々心の中に戻ってきてくれるものでもなかった。

「湯木先輩、温のこと好きなんだって」

「本人が言ったのか？」

「言うてなくても、ああいう風に呼び出されたら普通気付くよ」

腕の中で熱くなってしまうているPCを強く抱きしめると、茜はうつむき加減でつぶやいた。S I K Eが助けてくれなかったら、自分はどうなっていたのだろう。そう考えると、恐れと共に強く黒いドロドロとした感情が渦巻いた。



「もういいよ」

「え？」

「もういい。こういうことしてたら、多分いるんなことに身動きが取れないよ。だっていつまでもこういう風に一緒にいたら、温だつて彼女も作れないじゃない」

「…あのなあ」

何かに脅えるように俯いている茜を見て、温は戸惑いながらも恐る恐る茜の肩に手を伸ばそうとした。

「おう、海棠」

急に呼び止められて、行方を失った温の手は何かを紛らわすように空中をつかんだ。声のしたほうに視線を向けると、よく見知ったクラスメイトの男子だった。

「っと、糸伊原も一緒か。お前ら今日はよく一緒にいるよな」

「…」

「やっぱり、あの噂は本当だったのか」

「噂？」

「皆まで言わせるなよ。ほら…」

温が友人の前で絶句していると、茜はその隙をついてか、一目散に昇降口めがけて走り始めた。

「…おい！」

茜は失速しないまま下駄箱の中に右手を突っ込むと、下穿きをすばやく引き出し、上履きを中に詰め込むと外へと飛び出した。その俊足たるや、現役の上級部員をあっという間にかわすほどだった。

「…もしかして俺、言ったらいけないこと言った？」

茜を取り逃がした後の温の殺気立った表情を見て、哀れな同級生こと弓田は上ずった声を上げながら必死に許しを請うのだった。

赤のランプを灯している信号に足止めされた茜は、はやる息を抑えるように胸の辺りに手を当てた。何故だかわからないが、苦しかった。

『アカネ、心拍数が20〜30上昇しています』

手提げの中からSIKEの声が聞こえた。茜はMP3からイヤホンを抜き取ると、PCにつないだ。

「さっきはありがとう」

『……アカネはハルのことが嫌いなのですか？』

「え？」

『先ほどから、一緒にいたくないかのように接している』” 思えたので』

「” 思う?”」

『はい。私は茜ではありません。私が” S I K E ” という個性を持った人格である限り、茜の気持ちを完全に知りえることは出来ません。しかし、対象となる人物を観察して、該当する症状をある程度割り当てることが可能です』

相変わらずの弁舌ぶりに、茜は苦笑した。

「違つよ」

茜は空を見上げた。梅雨明けもまだだというのに、雲ひとつない快晴ぶりだ。西の空のほうは夕方が近いたためか茜色に色づき始めていた。

「私と温はね、中学にあがって3年間、まともに口を聞かなかったんだ」

『それは付き合いがなかったという意味ですか?』

「うん、まあね。同じ中学で同じクラスだったこともあったけど、お互いバリバリの思春期を迎えちゃってさあ、ま、色々あったわけよ」

従兄弟だとはいつでも男性と女性との区別をつけなければ気がすまない年頃のことだ。一緒にいれば冷やかされるし、女子の格好の噂の種にされた。それが互いを疎遠にさせたといっても良かった。

それに加えて茜が温はるの兄である空あきについて色々と話すが、温の癪さわにさわったらしかった。

時には夏代が間に入って話しをすることもあったが、それも大抵10分足らずで終了して温は自分の部屋に引っ込むことが多かった。

高校に入ってから夏代に買い物を買われることがあって成り行き上二人でスーパーに立ち寄りたりするが、あまり会話もないまま買いたいものを買って帰ることが殆どだ。時折言葉をかわしても、茜の性格上喧嘩を吹っかけて終わることも有り、あまり良好な関係とは言いがたかった。しかしそれでも、昨日のように勉強を見てくれたり風邪で休んだりした時にノートを取ってくれたりしたことはままあり、何だかんだといって面倒見のいい性格なのは兄譲りなのかもしれない、とそう思う。

「急に一緒に行動するようになってさ、どっという風に接したらいいのか分からないんだ」

『アカネはハルのことが好きなのですか？』

「え……」

『好きってどっという気持ちですか？どっという感情なのですか？』

「いやいやいやいや、待って待って……!」

いつの間にやら茜が温のことを好きだということを前提に話を進めているSIKEに、慌てて止めに入った。

『恋って何ですか？』

「…」

そう聞かれた茜はしばらく黙り込んでしまった。初恋の人は空だと心の中では思っているものの、未だに恋とはどういうものなのか明確な答えを茜は持っていなかった。

「正直言っただけにもよくわからないよ。でもさ、答えは一つじゃないと思うよ」

『それは、恋の帰結する方向が人それぞれ存在するということですか？』

「ま…まあそういうことかな。私の友達でも彼氏とすぐ別れて別の相手と付き合う子もいるし、一途に同じ相手と付き合う子もいるし…。でも、どちらが正しいかなんて他人が決めることじゃないんだよね。だからさ、恋の定義なんて人それぞれなんだよ」

しゃべっていて段々説教くさくなってくるのに恥ずかしさを感じながらも、SIKEに話しかけることによって、先ほどまで昂ぶっていた感情がだんだんと落ち着いていくのがわかった。

『恋の定義は人それぞれ』

自分の言葉を復唱するSIKEに茜は何だか教師にでもなった心境だった。

「今日の夕飯は自炊に決定かあ、何作ろうかな」

東京の空とは思えないほどの澄んだ空を見上げて、茜は一筋の白

銀色に光る一筋の光を見出した。

「飛行機雲」

マゼンタとアクアマリンのグラデーションが美しい空を通る一筋の真っ白な線に茜はしばらく見惚れていた。

しばらく耳を澄ますと、微かだが蝉の鳴き声が聞こえてきた。

夏は、もうすぐそこである。

## 愛と残酷の女神

「ただいま」

誰もいないとわかっていても、長年の習慣からか「ただいま」と言ってしまう。茜は黙って靴を脱ぐと自分の部屋へと向かった。

デスクトップのPCを立ち上げ、いつものようにメールをチエックする。

『受信メール 0件』

半ば予想通りであっただけに、肩透かしというほどではなかったが、それでもどこか茜にとっては寂しいものがあった。空にはあれあきからメールを何通も送ったがメールアドレス自体がもう使われていないらしく、『メールアドレスのエラーにより送信できませんでした』の通告メールが受信ボックスに溜まるばかりであった。

「ねえ、サイ」

『何ですか、アカネ』

「サイが空兄に最後に会ったのはいつ？」

『6月4日です』

今は6月18日——つまり丁度2週間前ということになる。

『アメリカ、ワシントン州のオリンピアで私と彼は別れました。彼は……追われていましたから』

追われていた相手……。それはおそらく彼の雇用先であるアスタルテ社だろう。

……アスタルテ……

豊穣の女神を社名に頂くその会社は、いまや情報産業業界のトップシェアを誇る巨大企業だ。もとは小さなプログラミングを請け負うのみだったのだが、半導体の開発にも目を向けるようになり、また、極少数に限られた人間にしか触れることのできなかった「コンピュータ」を世間一般に溶け込ますためのマーケティングに成功した最初の会社だった。

アスタルテ……これが、空の消息をたどる最大のキーポイントなのかもしれない。

しかし、確認をしようにも、マーケティングしか行っていないアスタルテ社の日本支社にとりあってもおそらく相手にされないだろうし。研究員として働いている空の詳細を尋ねようと思ったら、アメリカにあるアスタルテ本社に問い合わせるしかないだろう。

「え……英語……」

自慢ではないが、茜は英語の成績はまずまずで、クラスでもトップだ。しかし、書いたり聞いたりすると、話すのとはわけが違う。第一話せたとしてもちゃんと相手からレスポンスが返ってくるのかも怪しい。

「お母さんなら……」



茜はふと頭の中に浮かんだ人物を口にした。けれどもすぐに首を振る。

茜の母、万樹は通訳業を生業にしている。それだけに英語も堪能で最近フランス語やドイツ語も日常会話程度ならこなせるのだという。それほどコミュニケーション能力を有しているのなら、海外の会社へ問い合わせるのもわけないだろう。そこまで考えては見るものの、茜は唇を軽く噛んだ後、気分転換に料理でもしようと、着替えを済ませて自室を後にした。

夏代直伝のチキンライスをオムライスにして、インスタントのオニオンスープとレタスサラダで夕食を済ませた後、携帯電話が、チカチカとメール受信を知らせるライトが点滅しているのに気がついた。

温はるからだった。内容はいたって簡潔で、明日の朝も迎えに行くということだけが記されていた。

「…ふう」

ため息が洩れる。正直に言うと、今はあまり顔をあわせたくなかった。

『どつしましたか』

「ん？何でもないよ。あ、お風呂は入る」

風呂を沸かしたままになっていたことに気付いた茜は、慌てて携

帯を閉じると、立ち上がった。明日は温には悪いけれど早めに家を出よう。……そう思って。

少し長めの入浴を終えた茜は、髪をドライヤーで乾かした後、リビングへと戻ってきた。

「サイ、…どうしたの?」

めずらしくSIKKEからの返事はない。画面は例の「」のマークが映し出されているが、肝心の「声」が聞こえてこない。

「ねえ」

「……アカネ、あれは何ですか?」

「?あれ?」

あれといわれても、思いつくものがない茜は少々途方に暮れてしまった。

『テレビです』

そういえば、家に帰ってきたとき何となく無音でいるのが寂しくて、つけっぱなしになっていたのだ。ふと画面のほうを見やると、特集番組らしく画面の右上のテロップに「モーツァルト、楽聖の生涯の謎」というタイトルがついていた。

そして次の瞬間に流れてきたのは、耳慣れない歌声。けれど、高らかに声量のある、聴くものを圧倒するような女性の声だった。

画面をしばらく眺めていると、ふくよかな体型の女性二人が舞台の上で大きな身振りを交えながら歌っていた。

「オペラーイーだね。音楽劇っていえばいいのかな。台詞が歌になってるんだよ。・・・私もあんまり詳しくないけど」

『オペラーイー演劇と器楽演奏を伴奏とした歌によって物語が進行する舞台芸術。現存最古の作品はイタリアのヤコポ・ポーリの「ダフネ」といわれイー』

「…ストップ」

そこまでわかっているのなら、わざわざ聞かなくても良いではないか。

「気になるの？」

『？それは、どういう意味ですか？』

「ーいや、興味があるのかなって」

ここまで興味津々に何かに意識を向けるのは、茜にとって少々意外なことでもあった。

『とても、「懐かしい」という気持ちになります』

「懐かしい？」

それは彼女自身の記憶なのだろうか？

『はい。とても遠い昔に、このような音楽に囲まれていたような――』

そこで少しの間沈黙が広がる。

「……それで？」

沈黙に耐え切れなかったのか、茜が口火を切った。

『――それだけのことです』

やっと返ってきた答えがそれだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1263e/>

---

SIKE（サイキ）

2010年10月10日11時37分発行